

博士論文

論文題目 初期カルナップの实在論と反实在論

氏名 長田 怜

目次

| | |
|-------------------------------------|-----------|
| 序論 | 1 |
| 第 I 部 『構築』の基本 | 3 |
| 第 1 章 『構築』の骨組み | 7 |
| 1.1 『構築』の課題——『構築』第 I 部 | 7 |
| 1.2 構造主義——『構築』第 II 部 | 11 |
| 1.3 構成理論——『構築』第 III 部 | 17 |
| 1.4 構成体系——『構築』第 IV 部 | 29 |
| 1.5 哲学的問題への応用——『構築』第 V 部 | 35 |
| 第 2 章 『構築』の解釈と批判 | 39 |
| 2.1 『構築』研究の流れ | 39 |
| 2.2 『構築』への批判 | 46 |
| 第 II 部 『構築』の实在論と反实在論 | 51 |
| 第 3 章 『構築』のさまざまな实在論／反实在論 | 55 |
| 3.1 経験主義的反实在論——分析哲学の伝統的解釈 | 56 |
| 3.2 中立主義——オフィシャルな構成理論の哲学 | 58 |
| 3.3 観念論——認識論的構成体系の哲学 | 61 |
| 3.4 实在論＋観念論——構成理論の哲学 | 62 |
| 3.5 实在論＋反实在論——現代的論争での位置どり | 66 |
| 第 4 章 『構築』と『現象の構造』 | 71 |
| 4.1 『構築』vs 『現象の構造』 | 71 |
| 4.2 共外延性 vs 同型性 | 79 |

| | | |
|-------|------------------------|-----|
| 4.3 | 実在論 vs 反実在論 | 85 |
| 第 5 章 | 『構築』と形而上学的実在論 | 93 |
| 5.1 | パトナムのモデル論的論証 | 93 |
| 5.2 | 『構築』とパトナムの論証 | 98 |
| 終章 | 『構築』後の実在論と反実在論 | 103 |
| 注 | | 107 |
| 参考文献 | | 115 |

序論

本論文の主な目的は、初期カルナップが実在論 vs 反実在論という形而上学的テーマに対してどのような立場に立っていたかを明らかにすることにある。とりわけ、初期カルナップ哲学の「再構築プログラム」の集大成たる『世界の論理的構築』（以下『構築』）に着目し、そこに見出される実在論的ないし反実在論的立場を解明する。このような研究が哲学史研究上とりわけ重要であるのは、次のような事情があるからである。まず、こうした形而上学的テーマについて初期カルナップがどのような立場をとっていたかは、きちんと解明されることがなかった。仮にこのテーマに対する彼の立場について言及されることがあっても、誤った立場が帰されてきたのである。したがって、こうした事情だけをとっても、正確に初期カルナップの立場を明らかにすることには大きな意義がある。さらに、このテーマに対するカルナップの立場は、初期とそれより後の時期とでは、変化している。そればかりか、この変化は、カルナップ哲学における根本的な立場の変化を反映しているのである。したがって、カルナップ哲学の変遷という主題においても、このテーマにおける初期の立場を正確に見定めることには大きな意義があると言えるだろう。また、こうした初期の立場の解明とその後の立場変化の解明によって、より大きな哲学史的文脈においても重要な教訓が得られることになるだろう。たとえば、論理実証主義運動は考えられているほど一枚岩ではなく、実在論という1つのテーマについてのカルナップという1人の哲学者の立場をとっても、そのうちに複雑な変化が見られる、ということなどの教訓である。

さらに、こうした哲学史的解明を通じて、単に歴史的な関心が満たされるだけでなく、実在論 vs 反実在論という哲学的テーマそのものに対して新たな洞察が得られると考えられる。第1に、実在論と反実在論には複数の種類がありえ、それら複数の実在論と反実在論が、1時期の1哲学者のうちにどれほど複雑に折り重なっているかが明らかになるだろう。そのような複層性はその哲学者本人が意図しているものではなく、彼が明示的に述べている立場よりも根本的な立場が、暗黙の前提として働き、基底をなしていることさえある。そして初期カルナップとは、まさしくそうした例の1つなのである。第2に、そうした解明を通じて、現代の反実在論が相手にしている立場にはどのような立場が含まれるか

がより具体的になり、現代的な實在論 vs 反實在論の対立点がより明確になるであろうことが期待される。

以上の点を解明するために、本論文では次のような手順を踏むことにする。

第 I 部は、こうした解明の準備段階である。まず第 1 章では、カルナップの『構築』がどのような哲学的プログラムを提示しているかを、テキストに忠実に示していく。続く第 2 章では、このプログラムが歴史的にどのように評価されてきたかをまとめておく。

第 II 部は、第 I 部を礎石とし、『構築』のプログラムの有する實在論的あるいは反實在論的立場を正確に見定めていく。第 3 章では、この点に関して従来解釈がどのような立場をカルナップに帰してきたかを明らかにしたうえで、それとは異なる新たな解釈の可能性を示す。最後の第 4 章と第 5 章は、そうした解釈によって、現代哲学における實在論争のうちに初期カルナップの思想を正確に定位する。第 4 章では、『構築』のプログラムを受け継ぐグッドマンの『現象の構造』と『構築』を比較することを通じて、實在論をめぐる初期カルナップとグッドマンの立場の違いが明確に定められ、グッドマンの有名な批判が両者の立場の違いを反映していることが明らかにされる。第 5 章では、パトナムの形而上学的實在論批判と初期カルナップ哲学の関係を論じて、フリードマンらが指摘してきた『構築』の問題点がどこに起因するかをはっきりさせる。それによって、第 3 章以降で提示してきた新たな解釈が『構築』の問題点の解明にとって非常に有益であることが理解されるであろう。

結論から先に言えば、本論文は、形而上学批判の代表的書物と見なされている『構築』が、いかに形而上学的であるかを示すことになる。『構築』はいわば、ミイラ捕りがミイラになった事例の 1 つである。

以下では、『構築』からの引用は節番号で行ない、他の著作については通常どおりページ数を記す。

第I部

『構築』の基本

第 I 部では、『構築』に関する基本的な事柄を確認する。第 1 章は『構築』がどういう課題をどうやって果たそうとしているかをまとめる。第 2 章は、『構築』に関してどういう解釈がなされてきたのか、その歴史の変遷を辿る。また、『構築』のどのような点に批判が加えられてきたのかも確認する。

第 1 章

『構築』の骨組み

まず本章では、『構築』がどのようなねらいをもち、どのようなやり方によってそのねらいを実現していくか、その概略を与えることとする。

『構築』は 5 部構成、通して 183 節からなる。まず第 I 部では、『構築』の課題が示される (§§1-9)。課題とは、「構成体系」の構築である。第 II 部では、この構成体系の構築に先立って、その基調をなす理論的態度が示される (§§10-25)。これは、体系構築においては「構造」の概念を導きとする、という態度である。第 III 部では、構造をもとに体系構築を行なう際に生じる形式的問題が扱われる (§§26-105)。この作業が、「構成理論」と呼ばれる理論の仕事である。そして第 IV 部では、実際の体系構築が示される (§§106-156)。ここでは、ひたすら定義や定義の概略が与えられる。最後の第 V 部は、構成体系の構築によって哲学的な諸問題の解消がいかにも実現されるかを論じる (§§157-183)。ここが課題遂行によって得られる「うまみ」の部分である。おおまかに言って、第 I 部は課題提示、第 II 部は基本姿勢の提示、第 III 部は課題遂行の可能性の検討、第 IV 部は課題遂行の実際、第 V 部は課題遂行の利点である。最初の 2 部は予備的議論であり、本体は続く 2 部、そして最後の 1 部は応用、といったぐあいだ。

以下では、以上の流れをもう少し細かく見ていくこととする。以下の 1.1-1.5 節のそれぞれの節は、『構築』の I-V 部の各部に順に対応している。

1.1 『構築』の課題——『構築』第 I 部

まず、課題は構成体系 (Konstitutionssystem) の構築であった。なぜそのようなことをやりたいのだろうか。それは、世界のあらゆる対象、とりわけ科学の扱うあらゆる対象がどのように結びついているかを透明に、クリアにしたいからである。ただし、注意したいのは、ここで「対象 (Gegenstand)」というのは性質や関係などと対比される (通常の) いみでの「対象」ではなく、性質、関係、クラス、出来事などをも含みこむ、非常に包括

的なタームと考えられている (§1) ことだ¹。科学が扱うと通常考えられているような領域にあるものはすべて「対象」である。たとえば、物理学が扱う電子、時空連続体、エネルギー、生物学が扱う遺伝的性質、肺、バクテリア、心理学が扱うような、感覚に現れた色、悲しみ、知覚状態など。また、自然科学のみならず、人文社会系諸科学（カルナップの当時の言い方では「精神科学 (Geisteswissenschaft)」) の扱う対象もすべて含まれる。たとえば、法学の扱う帝国憲法、政治学の扱う民主主義、美学の扱う表現主義など。また、(若干気を重くしつつ述べなければならないが、)「対象」の語と「概念 (Begriff)」の語は一応区別されるものの、実質的に相互に可換なものとして用いられている (§5)。この点についてはすぐ後に触れる。

さて、こういういみでの対象・概念の結びつき方を明らかにするといっても、単にそれらの間の相互関係を示したいわけではない。そこが「構成体系」の構築ということであり、みられていることだ。『構築』の冒頭2パラグラフ目にこの論点がまとめられている。

構成体系は、他の概念体系のように、概念をさまざまな種類に分け、これら種類の違いと相互関係を探究するだけではない。それに加えて、概念は、ある基礎的概念 (Grundbegriffen) から段階的に導出されねば、つまり、「構成」されねばならない。これによって、どの概念にもその確定的な場所が与えられるような、ある概念の系統樹 (Stammbaum der Begriffe) が明らかになる。わずかな基礎的概念からすべての概念を導出できる、というのは、構成理論の主要テーゼであり、この点において、それは他の対象理論 (Gegenstandstheorien) からもっとも大きく異なっているのである。(§1、強調原文)

要は、他の概念体系の構築と構成体系の構築が異なるのは、あらゆる概念を (1) 基礎的概念に基づける、しかもそれ(ら)から (2) 構成する、という2点においてである。これは、あらゆる対象の結びつきの透明化という理念が、これら2点において徹底化・厳格化されるということを含みする。

これら2点はどういういみでの徹底化・厳格化であるのだろうか。まず、(2)の点から見よう。構成 (Konstitution) という手段は、対象どうしの結びつきを1つのあり方のうちに統一することをいみする。一般に、 a という対象を b と c という対象から構成できる際には、 a についてのあらゆる命題が b と c についての命題へと変換できなければならない (§2)。さしあたってはこれを、対象どうしの「全面的変換可能性の条件」と呼ぶことにしよう。この変換可能性でまず注記すべきなのは、命題を単位とし、そこに現れる対象どうしを置き換えられるかどうかによって構成を規定しているということだ。さらに、全面的に変換可能ということは、 a について成り立つどんな命題についても、それと何らかのいみで同値で、なおかつ a を含まないような別の命題を見つけられる、ということである。これらの点、つまり、命題を単位とすることや同値な命題を見つけることがどう

いうみをもつかは、1.3.1節で詳しく論じる。カルナップが挙げている例を紹介すると、「 $3/7 > 2/5$ 」という命題は、「任意の自然数 x と y について、 $7x = 5y$ ならば $3x > 2y$ 」に変換可能である。この種の変換を行なうことによって、分数についてのどの命題も、自然数についての命題へと変換することができる。よって、分数が自然数から構成可能であることが示唆される。

しかし、全面的変換可能性の条件は、構成の1つの必要条件にすぎない。構成はさらなる要請を課す。あらゆる命題が変換できるだけでなく、その変換のための一般的規則が与えられねばならない。分数の例でいえば、分数についてのある命題が与えられるたびに、それを自然数についての命題へと変換することが常に可能であるだけでなく、そのような変換を一般的に規定するような規則がなければならない、ということである。これは通常、自然数による分数の定義の形で与えられる。そして、この種の数の定義を可能にしたのは、ホワイトヘッド-ラッセルの新たな記号論理学の道具立てだった。後に詳しく論じることとなるが、『構築』における構成の概念は、そうした論理的構成の理念に導かれている。ホワイトヘッド-ラッセルが数学的对象について行なったことを、カルナップは、科学の扱うあらゆる対象について行なおうという野望を抱いているわけである (§3)。かくして、構成体系においても、一般的規則は記号論理学の言語に表現された定義の形で与えられる。そのため、この種の規則は「**構成的定義 (konstitutionale Definition)**」と呼ばれることになる (§2)。

なぜこのような、定義という形をとった一般的規則が与えられねばならないのか。それは、構成による対象規定 (Gegenstandsbestimmung) という側面に関わる。単なる全面的変換可能性が言えるだけの状態では、ある対象を含む命題と同値な別の命題が見つかることが保証されるだけで、それらを見つける一意的な操作が規定されているとはいえない。それに対して、変換の規則が与えられるということは、どのような変換を行なったらよいかが一意的に規定される、ということである。このように、構成においては、対象どうしの結びつきのあり方はさらに厳格化され、ある対象の他の対象による一意的規定が求められる。この対象規定の側面は、以下でも論じるように、『構築』にとってきわめて重要である。

ところで、このような対象どうしの結びつきの与えられ方は、**還元可能性 (Zurückführbarkeit)** の概念とともに理解されるのが一般的かもしれない。つまり、カルナップをはじめとした論理実証主義者の着想を論じる文脈では、上で規定したいみでの b と c からの a の構成可能性は、 b と c への a の還元可能性として理解されるのが一般的かもしれない。カルナップ自身も §2 ではこのような言い換えをしているため、構成可能性と還元可能性は相互に可換な概念であるようにも思われる。しかし、より厳密な構成の規定を行なう後の節 (§35) では、一般的規則の提示を伴わないただの全面的変換可能性を「還元可能性」として捉え、構成はそれに一般的規則が加わった、より強い概念と見なしている

ようである。したがって本論でも、先の全面的変換可能性を狭義の還元可能性と見なすことにしたい。

ではさらに、透明化の徹底の(1)の側面、つまり、**基礎的概念への基礎づけ**という側面を見ておこう。これは、**対象領域の統一性** (die Einheit des Gegenstandsgebietes) の理念に関わる。あらゆる対象が基礎的对象から構成可能であることが示されることによって、あらゆる対象が実は基礎的对象という**唯一の対象領域**に関わることが示される (§4)。

これもまた、還元**の概念のもと**に理解されるのが一般的であるかもしれない。すなわち、あらゆる対象は**唯一の対象領域**に還元可能である、というように。そして、通常それに続くのは、「だからその**唯一の対象領域**しか存在しない」というシメの一文であろう。あるいは、もっと言いたくなって、「その**唯一の対象領域**とは**感覚的現象**のことである」となるのかもしれない。しかし、そこまで言うこと (唯一の対象領域へ還元可能だということ以上に言葉を足すこと) は、カルナップの本意ではない。この点は3.4節で詳しく論じることとするが、ここではこの点に関わって、次の点だけは譲歩として認めておきたい。確かにこのような基礎的对象への還元可能性というアイデアそのものは、**实在** (Wirklichkeit) の所与 (Gegebene) への還元という伝統的プログラムからの借り物であり、カルナップ自身も、マッハらの名前を挙げてその点を認めている (§3)、ということである²。

だが、カルナップ自身は自らの着想の新しさを、この種の還元**のプログラム**を構成という厳密な手段³によって実行することに見てとっている。したがって、もともと「還元」はあくまで**实在分析** (Wirklichkeitsanalyse) という従来のプログラムにそぐわしいようなタームであり、「構成」はそれに新たな意義を与える積極的なタームと見なされていると言ってよいだろう⁴。

『構築』は全体として、従来の哲学的プログラムを新たな構成の理念のもとに実現してやろうという意気ごみに満ちている。一般にイメージされているように、伝統的哲学の打倒にやっきになっているというよりはむしろ、伝統的哲学のうちで余計なもの**と重要なものを正確に仕分けよう**としている、もしくは、伝統的哲学のさまざまな陣営の間で共通して語られている事柄を取り出そうとしている、というのが実情に近い。対象どうしの結びつきをクリアにするという作業に関しても、前世代の哲学者たちの仕事を参考にしながらも、基礎的对象からの構成という切り詰められた手段のもとで言えることだけを科学的な知とし、そこからはみ出た事柄がいかに「装飾」にすぎないかを明らかにしようとしているのである。

先に言及した、対象と概念の間の区別を実質的になきもののように扱う、という態度もまた、この文脈で理解されるべきである。つまり、これらの区別は構成体系の構築においては**いみをもたない**、ということである。カルナップは、「対象・概念の構成」に対応する哲学的言い回しとして、「対象の (単なる) 認識」と「概念の (思考からの) 生成」の2つ

があると言い、それぞれを「实在論的な語り方」と「観念論的な語り方」（後に見るように、より具体的には「新カント派的な語り方」）に対応させている（§5）。そして、これらの言い回しの違い、あるいは考え方の違いは、単に「心理的な違い」にすぎないとし、どちらが本当に正しいか、などというのは不毛な論点であると見なす。それらの違いを捨象してなお残る、厳格にして中立的な手続きを、「対象・概念の構成」に見ているということだ⁵。彼が中立性を重んじていることの証拠に、構成体系の構築の実際（『構築』第Ⅳ部）においては、それぞれの構成段階で、記号論理学の言語における構成的定義からこれら2つの語り方への「翻訳」が付加されている⁶。このようにカルナップは、構成体系の構築を通じて、伝統を拒否したというよりは、伝統のエッセンスを抽出しようとしていたのである。このようなカルナップの態度を、「中立主義」と呼ぶことにしたい。中立主義については、第3章で主題的に論じることになるだろう。

1.2 構造主義——『構築』第Ⅱ部

以上が『構築』の課題である。具体的な構成のステップを見る前に、このような途方もない試みがなぜ実現可能だと（少なくともカルナップ自身のうちでは）見なされているのか、もう少しはっきりさせておく必要があるだろう。前節で明らかになっているのは、構成は、より具体的には、「構成的定義」なるものは、記号論理学を用いた数学的概念の定義に準ずる命題の変換規則である、ということであった。そして、そのような規則であるがゆえに、さまざまな哲学説に中立の内容のみをもつということだった。しかし、数学の概念ならいざ知らず、感覚に現れる音やら電磁場やら他人の心やら盆踊りやら、科学のあらゆる対象が記号論理学を用いて定義されるなどということは、およそ信じがたいはずだ。だが、この信じがたさは、構成体系においてこれら対象を規定する際、つまり、それらの構成的定義を行なう際、それらのどういった特徴に着目すべきかが理解されれば、（多少は）和らぐはずである。そして、カルナップによれば、構成的定義で着目すべきだとされる特徴こそが、科学の本来扱うべき特徴であり、そうであるからこそ、そこに焦点を絞ることによって、哲学的な装飾を剥いだ内容が抽出されるのである。

では、この特徴がどういうものかを明らかにするために、まずは対象を特徴づけるにはどういうやり方があるかを考えてみよう。今、ある領域の対象について特徴的な事柄を述べたいとする。このとき、どのような語り方が可能だろうか。カルナップによれば、まずは大雑把に分けると、性質記述と関連記述の2つのやり方がある（§10）。「性質記述（Eigenschaftsbeschreibung）」とは、その領域の対象のもつ性質に依拠した記述方法である。たとえば、「*a* は人間である」、「*b* は20歳である」、「*c* は中肉中背の男である」など。一方、「関連⁷記述（Beziehungsbeschreibung）」とは、対象の間で成り立つ関連を示す記述方法である。「*a* は *b* の母である」、「*c* は *b* より50歳若い」、「*a* は *c* よりりんご2つ分

背が高い」など。カルナップはこれらのうち、連関記述のほうを重視する。それは、「対象どうしの結びつき方」を明らかにするという構成体系構築の理念から言っても、当然のことだろう。

この選択はよいとしても、これだけでは、記号論理学を用いてあらゆる対象が数学の対象のごとく定義可能、というところまで行けるようには思えない。そこへ到達するには、さらにいくつかの絞りこみの作業、洗練の作業を必要とする。カルナップは、連関記述のうちでも特別の身分をもつ記述に焦点を絞る。ある対象領域において、対象どうしがどのような連関にあるのかを、その連関の形式的性質だけの点から記述することができる (§11)。つまり、「…は～の母である」や「…は～より 50 歳若い」などの連関の具体的内容 (カルナップの言い方では「内容的意義 (inhaltlicher Sinn)」) を用いることなしに、そうした連関のもつ形式的性質にだけ依拠した記述を与えることができる。ここで「形式的性質」というのは、連関のもつ推移的、反射的、対称的、結合的などの性質である。たとえば、この領域の対象の間には推移的連関が成り立つ、これらの間には対称的かつ非反射的連関が成り立つ、というような特徴だけをもとに記述を与えることができる。つまり、ある対象たちの間に成り立つ連関の 2 階の性質を持ち出すということである。この種の記述に着目することによって、構成にとって望むべくより「形式的」な条件に近づけそうである。

ところで、連関の形式的性質だけに言及したこうした記述は、連関の構造 (Struktur) を記述することによってもれなく得ることができる (§12)。ただし、『構築』で言われるところの「構造」とは、次のように規定される概念である。すなわち、2 つの連関が同じ構造をもつのは、それらの中に同型写像が与えられうる場合である (§11)。つまり、ある連関の構造とは、それと同型な連関と共有されるような、連関のあり方のことである。たとえば、異なる 2 つの対象領域について、各々のうちでの対象どうしの連関が同じ有向グラフで描かれる場合、それら連関は同じ構造をもつと言える。構造がこのように規定されると、同じ構造をもつ連関どうしは同じ形式的性質をもつことになる。したがって、ある連関の構造の記述、すなわちその「構造記述 (Strukturbeschreibung)」が完全に与えられれば、その形式的性質も定まることになる。

構造記述の例としてカルナップが与えるのは、先に言及した有向グラフである。あるいは、ある領域の対象たちに随意的番号を付与した上で、当該の連関が成り立つ対象たちを番号の順序対で表す、という記述の仕方である (§12)。この場合、同じ対象には一貫して同じ番号を、違う対象には一貫して違う番号を割り振りさえすれば、それらに具体的にどのような番号を振ろうとも、連関がどういう構造をもつか、もれなく伝えることができる。そして、この番号の対が与えられさえすれば、当該連関のもつ形式的性質も導かれる。構造記述の具体例については、本節の少し後に論じる (鉄道路線図の例)。また、1.3.3.1 節では別の例 (色の例) を見ることになるだろう。

こうしてカルナップは、構造記述という記述の仕方を選び出す。記述は構造記述でなければならない、というこの考えを、「弱い構造主義」と呼ぼう。このテーゼは、カルナップの中立主義、すなわち、ただの「装飾」を剥ぎ取って、心理的にすぎない事柄、主観的な事柄を構成の外に追いやろうという彼の態度を、より明確な形で示している。この場合、彼が「心理的」ないし「主観的」と見なしているのは、性質や連関の具体的内容（内容的意義）のことである。この点については、後に論じる。

さてしかし、当然のことながら、単に構造記述を行なえば扱いたい対象の構成にまで至れるというわけではない。前節で論じたように、構成は対象を一意的に規定しなければならない。ここまでで論じた記述という手段は、性質記述であれ、連関記述であれ、構造記述であれ、ある領域の対象たちに性質や連関を付与しているだけであり、それらを一意的に規定する条件を与えてはいない。では、一意的な規定には何が必要なのか。

カルナップは、対象規定（対象名の指示（Bedeutung）伝達）に2つの方法を区別している（§13）。1つは直示（Aufweisung）であり、この場合、「意図された対象は知覚可能にされ、指し示しの身振りによって表される」。たとえば、「あそこのあれがスカイツリーだよ」など。もう1つは標示⁸（Kennzeichnung）である。これは性質や連関を用いた規定の仕方である。たとえば、「スカイツリーは世界で一番高いテレビ塔だよ」（もしくは「スカイツリー」は世界で一番高いテレビ塔の名前だよ）とか「スカイツリーは東京の下町にある634メートルの塔だよ」（もしくは「スカイツリー」は東京の下町にある634メートルの塔だよ）とか。これらはそれぞれ、ラッセルの見知りによる知識と記述による知識に対応すると思われる⁹。当然のことながら、これらのうち、カルナップが構成において用いたいのは標示のほうである。というのも、あくまで連関記述、それも構造記述によって対象を規定したいのであるから。しかし、構造記述のみによって対象を標示する（これを「純粋に構造的な標示（rein strukturelle Kennzeichnung）」と呼ぶ）などということとは可能なのだろうか。

この問いを吟味するためにはまず、標示の特徴と見なされるかもしれない2つの点を考察しておこう。第1に、標示は、言説（Rede）の関わる対象の範囲に照らして行なわれる（§13）。これは当然といえば当然のことを言っているだけで、現実には当該対象領域でどのようなことが成り立っているかに照らして、対象は一意的に規定される、ということである¹⁰。ある標示を行なおうとする際、標示対象は(1)少なくとも1つ、かつ(2)ただ1つ存在しなければならない。このことは、当該の対象の範囲を参照することなしには、満たされているか満たされていないか判定できない。たとえば、「現在のフランス国王」が(1)を満たさないのは、現在のフランスを見れば王制ではないという現実があるからであり、「日本のエネルギー政策会議」が(2)を満たさないのは、それがたくさんある（ありすぎる）という現実があるからである。

第2に、この第1の論点とも関わることだが、標示においては、対象規定は常に「先送

り」されている (§13)。たとえば、スカイツリーについて「東京の下町にある 634 メートルの塔」と標示する場合、それに先行して、その部分である「東京の下町」や「634 メートル」や「塔」などの語の表す対象の規定（それらの語の指示申告）を必要とする。そして、それらの対象規定においても、たとえば「日本の首都」や「メートル原器」、あるいは「東京タワーのある都市」や「光速」などなど、別の標示が用いられる可能性がある。そして、そうやって辿っていくと最終的には、標示ではなくて直示に対象規定は「還元」されねばならないと思われる。そして、そのようないみでの「還元」こそが、一般にイメージされる『構築』にとっては最重要の関心事であると思われる。

しかしながら、驚くべきことにカルナップは、標示のこれら 2 つの特徴を最終的には無視できるような極地へと至ることができる、と考えている。第 1 に、対象領域を参照しなくても済むような標示の仕方があり、第 2 には、対象規定を最終的に直示に委ねなくてもよいような標示の仕方があるという。

まずは第 2 の点から考えていこう。ある対象領域が固定されているとして、直示を用いず、構造記述だけによって標示を行なうということはいかにして可能になるのか。カルナップが挙げる例は、次のようなものである (§14)。ヨーロッパの都市という対象領域が与えられたときに、ある都市を規定するやり方を考える。まず、鉄道路線図を手がかりにしてみる。ただし、都市の名前は書きこまれないただのグラフ、「構造図」としての路線図である。それを用いて、たとえばもっとも多くの辺が伸びる頂点（もっとも多くの路線が集まる駅）をまずは規定し、それがただ 1 つだけ存在するならば、この構造的特徴をもってして、ある駅を規定できる。もしそれが可能でないならば（たとえばそういう頂点が 5 つあるならば）、この特徴に加えて、他の複数の辺をもつ頂点が当該頂点からもっとも近くて何番目の頂点であるか、など、他の構造的特徴を付け加えることによって、5 つのうち、どの頂点がどの駅に対応するかを規定できるはずだ。そして、それが規定できれば、あとは隣の頂点を隣の駅と規定するなどして、すべての駅が規定できるはずである。

たとえば、次のようなシンプルな鉄道路線図を考えてみよう¹¹。

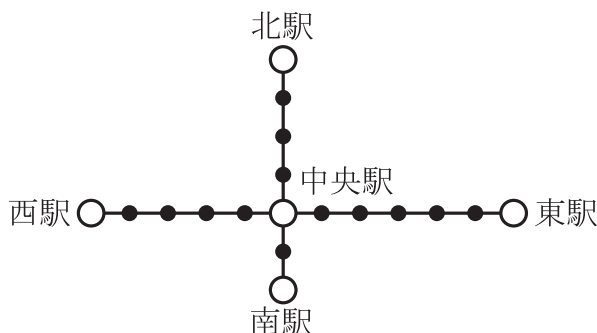


図 1-1 サンプルの鉄道路線図

この鉄道網の各駅を構造だけによって規定することを考える。駅の中の隣り合うという連

関を「 R 」と呼ぼう。まず、中央駅だけが4つの隣駅をもつことに着目する。4つの隣駅をもつという性質 Φ は次のように定義できる。

$$\Phi x =_{\text{Df}} \exists y \exists z \exists w \exists v ((Rxy \wedge Rxz \wedge Rxw \wedge Rxv \wedge y \neq z \wedge y \neq w \wedge y \neq v \wedge z \neq w \wedge z \neq v \wedge w \neq v) \wedge \forall u (Rxu \rightarrow (u = y \vee u = z \vee u = w \vee u = v)))$$

この性質をもつ駅はちょうど1つだけあり、それが中央駅なのだから、「中央駅」という名辞は次のように導入できる。

$$\text{中央駅} =_{\text{Df}} (\exists x) \Phi x$$

重要なのは、 R 鎖¹²が各終点まで違う長さをもつことである。たとえば、南駅は次のような仕方で定義できる。ちょうど1つの R 隣をもち、中央駅と R 関係に立つ何らかの駅と R 関係に立つ、1つの、そしてたかだか1つの駅がある。他の駅は、定義された駅からの R 鎖の長さで定義できる。終点駅がすべて定義されれば、終点駅と中央駅への R 鎖の長さですべての他の駅を定義できる。

もし鉄道路線図だけで規定できないとしたら、道路図、電話網図、さらには空間的でないような他のあらゆる連関を導入して、規定していけばよい。他の事例でもこれと類似の作業を行なうことによって、対象領域が定まっていれば、ただの構造記述によって原理的には対象規定は可能だ、とカルナップは考えている。

そこで、次のように主張される。

単なる構造の提示による一義的な標示は、科学的な区別が可能である限りは、一般に可能である。(§15)

これを「強い構造主義」と呼ぶことにしよう。このテーゼにおいては、客観的ではなく主観的と見なされ、除外されるべき事柄のうちに、性質や連関の意義だけでなく、直示という対象規定の手段も含まれている。これはいわば、「直示を追い出す」役目を担っているのである。よって、直示という作用は、あらゆる対象の直示対象への「還元」プログラムにおいて一般にイメージされるようなポジティブな役割を果たすどころか、ここではむしろ除外されるべきネガティブな働きと見られているのである。

次に第1の論点について見ておこう。この論点からすると、原理的には対象領域の提示すら必要ないということになる。つまり、構造主義はもっと強めることができるというのである。なぜ対象領域は提示されなくてよいのか。ここにこそ、前節で論じた対象領域の統一性のテーゼが関わってくる。つまり、構成体系においては、基礎的对象からあらゆる対象は構成されるはずであり、それが示された暁には、対象領域は1つであることとなるのだから、対象領域をいちいち提示しなくともよい。ここから、次のように言われる。

どの科学的命題も、それらがただの構造命題であるように、原理的には変換できる。(§16)

これを「最強の構造主義」と呼ぶことにしよう。ここでも一般にイメージされるのとは違って、あらゆる対象の現象的对象への還元というプログラムは、現象的对象の特権性を示すというよりはむしろ、対象領域が全体で1つしかないことを示すのに向けられているのである¹³。

かくして『構築』の課題は、あらゆる科学的命題をただの構造命題へと変換していくことに集約される。これこそが、あらゆる科学的対象の構成ということの内実である。このようなテーゼによって、哲学で生じる不毛な問題も排除できるという。それは具体的には次のようなことである。

まず、それぞれの科学には、その扱う「対象種 (Gegenstandart)」がある。物理学であつたら物理的对象¹⁴、心理学であつたら心理的对象、というように (§18)。カルナップの考えている主な対象種のうちには、これらの他に、精神科学 (人文社会系諸科学、文化科学) の扱う精神的対象 (geistige Gegenstand) がある (§23)。これはたとえば、資本主義だとか倫理的な義務だとか盆踊りだとかのことである。

ところで、これら異なる対象種の間には、何らかの関係¹⁵ が成り立っている。たとえば、心理的出来事と中枢神経系における出来事 (物理的对象の1つ)の間には「心身関係 (psychophysische Beziehung)」が成り立つ。また、ある心理的出来事とある身振り (物理的对象の1つ)の間には、後者が前者の「表現」である、といういみにおいて、「表現関係 (Ausdrucksbeziehung)」が成り立つ (§19)。さらに、他人の前で帽子をとろうという決意 (心理的对象) と帽子をとるといふしきたり (精神的対象)の間には、前者が後者の「発現」であるといういみで、「発現関係 (Manifestationsbeziehung)」が成り立つ。また、ある絵画 (物理的对象) がある芸術様式 (精神的対象) の「具現」であるといういみにおいて、これらの間には「具現関係 (Dokumentationsbeziehung)」が成り立つ (§24)。

さて、これらの関係について、その本質は何なのかと問うこと (その「本質問題 (Wesensproblem)」を解くこと) が、長らく哲学者の仕事とされてきた (§20)。たとえば、心身問題とは、心身関係についての本質問題である (§22)。この場合、心身関係は2つの別々に存在する対象の間の並行的関係なのか、それとも同じ1つの種類の存在者の2つの「側面」を導くにすぎないのか、という論争が行なわれたりする。

これに対してカルナップは、こうした論争が不毛であると説いて、まったく別の仕事を自らに課す。まず、本質問題を解くのではなくて、これらの関係に規則的な対応づけを与える (その「対応づけ問題 (Zuordnungsproblem)」を扱う) のが、それぞれの専門科学の仕事である (§20)。たとえば、脳状態と心理的状态との間にはどういう対応づけが成り立つのか、など。カルナップ自身の仕事は、こうして対応づけが与えられる関係について、

それを成り立たせているものはいったい何なのか（本質問題）を問うのではなく、対応づけをもとに、その関係に立つ一方から他方を構成してみせることである。これが実現可能だとされるのは、強い構造主義のテーゼによって、科学の行なう対応づけをもとに構造的標示が可能だと見なされているためである。

以上は異なる対象種間の構成の話であるが、同じ対象種のうちの構成も、基本的には同じようなアイデアで行なわれる。つまり、科学の解明する対象どうしの規則的關係をもとに、それらの構造的標示を与える、という方法で構成は行なわれるのである。したがって、カルナップの仕事とは、科学の行なっていることのうえに、あるいはそれと無関係によもやま話を加えることではなく、科学の行なっていることをもとに、それが本来関わっているはずの構造命題を取り出すことにある、と言える。本質問題を含めた伝統的な哲学的問題と構成理論との関係については、1.5 節で詳しく論じる。

1.3 構成理論——『構築』第 III 部

かくして、構成は純粹に構造的な標示によって行なわれるべし、ということになる。この理念のもとでこそ、記号論理学によるあらゆる対象の形式的定義が可能と見なされるわけである。しかし、今のところそれは理念でしかなく、あまり現実味がない。そこに現実味をもたらすために実際に体系構築を行なっていくことにこそ、カルナップの「英雄的な努力」(Quine, 1969, p. 74) は向けられていたのである。

「構成理論 (Konstitutionstheorie)」とは、このような大それた体系構築がどうやったら可能になるかを示す理論である。この理論では、体系構築に先立って、構築がうまくいくための戦略を練ることになる。この戦略がうまく立てられれば、あとはそれに従って定義を連ねることが体系構築となる。カルナップによると、構成理論が扱う主たる問題は次の 4 つである (§26)。

- (1) 基底 (Basis) の問題——「後の階層すべてがそこに基づくような最初の階層、起点となる基底」を選択するという問題。
- (2) 階層形式 (Stufenformen) の問題——「ある階層から次の階層への移行を行なうために、常に繰り返される形式」を規定するという問題。
- (3) 対象形式 (Gegenstandsformen) の問題——「異なる対象種が階層形式を逐一適用することによっていかにして構成されるのか」という問題。
- (4) 体系形式 (Systemform) の問題——「異なる対象種が多重に層をなすことによって、体系の全体的な形式がどのように生じるのか」という問題。

このうち、(1) 基底の問題はもっともわかりやすいだろう。これまでに見たように、構成体系の構築においてはあらゆる対象が基礎的对象から構成されねばならないのだが、基底

の問題とは、その基礎的対象はどれにしたらよいのかという問題である。(2) 階層形式の問題とは、前節で見たような対象種の違いが、構成体系においてどのように反映されるのか、という問題である。すでに述べたように、構成とは記号論理学を用いた定義である。ところで、ホワイトヘッド-ラッセルの記号論理学はタイプ理論を伴ない、タイプの階層をもつ。そこで、この階層を利用して、対象種の違いを構成体系に精密化することが可能になる。しかし、より具体的に、構成においてどのような種類の形式的対象の間の定義を許し、それによってどのような形式的対象の階層を生成するかが、1つの問題となる。これが階層形式の問題である。(3) 対象形式の問題とは、(2) で規定された形式のもとでそれぞれの対象が具体的にどういうふうに定義されるべきか、その見とり図を与えるという問題である。(4) 体系形式の問題は、どのような順に定義を行なうとあらゆる対象の定義がうまくいきそうか、体系全体を俯瞰的に見渡す視点から考察するという問題である。

もちろん、これらには相互に関わりがある。特に、どのような基底を選ぶか ((1) の問題) によって、個々の対象をどう構成するか ((3) の問題)、そしてまた体系全体をどう構築していくか ((4) の問題) の戦略も変わってくるし、逆に、基底にふさわしいものを選ぶ際 ((1) の問題) には、体系全体の構築を可能にするかどうか ((4) の問題) という条件の考察が不可欠となる。他方、(2) の問題は他より先に決定することができる。これは、具体的にどのような体系構築を目論むかに先立って、前節で見たような構造主義的戦略の延長線上に決定できるような事柄だからである。そこで、まずは(2) 階層形式の問題を見ていくこととしよう。ちなみに、『構築』第 III 部では、(2) 階層形式 (§§27-45)、(4) 体系形式 (§§46-60)、(1) 基底 (§§61-83)、(3) 対象形式 (§§84-94) の順に論じられる。以下でも、基本的にこの順序で概説することにする。

1.3.1 階層形式

1.1 節で見たように、『構築』の構成は、基礎的対象からの全面的変換可能性の規則を与えるものであった。これは、記号論理学による数学的概念の定義に準ずるものであり、1.2 節で見たように、特に純粹に構造的な標示、すなわち、構造記述だけを用いた対象の規定という形態をとるのだった。こうした理念の実現にあたっては、まずは記号論理学の用いる概念的資源がどのようなものかを確認しておく必要があるだろう。

カルナップは、フレーゲ以来の関数的な言語の分析、すなわち、関数 (Funktion) と入力項 (Argument) からなるものとして言語を分析するという伝統を踏まえ、まずは「命題関数 (Aussagefunktion)」という概念を取り出す (§28)。これは、ある文において1つ以上の対象名を除去したとき、残った不飽和記号が表すものとされる。これには、ただ1つの入力項場所 (Argumentstelle) をもった命題関数としての「性質 (Eigenschaft)」と、2つ以上の入力項場所をもった命題関数としての「連関 (Beziehung)」がある。

さらに、2つの命題関数について、次のような概念が規定される (§32)。

2つの命題関数は「広がり等しい (umfangsgleich)」

⇔ 一方を満たすどの対象も他方を満たすし、逆もまた言える。

そして、広がり等しい関数たちにある同一の記号を割り振ったとき、その記号の表すような類の対象を「外延 (Extension)」と呼ぶことにする。特に、性質の外延は「クラス (Klasse)」 (§33)、連関の外延は「関係 (Relation)」 (§34) と呼ばれる。

また、それぞれの命題関数には、入力項としてとれる対象の種類が決まっている。これはラッセルのタイプに相当する¹⁶もので、「対象圏域 (Gegenstandssphären)」と呼ばれる (§29)。命題関数の対象圏域は階層を形作り、さらにそれをもとにクラスや関係にも対象圏域の階層が形成される。この対象圏域の概念によって、構成理論においては、前節で見た対象種 (こちらは前理論的区別) よりも細かく、そして正確に、対象の階層を定めていくことが可能になる。

さて、このように道具立てが整理された上で構成の問題に戻ると、先に用いていた概念をより正確に規定できるようになる。まず、「全面的変換可能性」、すなわち「還元可能性」ということでいみしていた事柄は、「広がり等しい命題関数による全面的な置き換え可能性」と規定される。詳しくは、次のように定められる (§35)。

対象 a は b, c, \dots に「還元可能」である

⇔ a, b, c, \dots にもつばら関わる¹⁷ (b, c, \dots は欠けていてもよい) どの命題関数にも、 b, c, \dots にもつばら関わる広がり等しい命題関数が存在する。

すると、対象 b と c をもとにした対象 a の構成的定義とは、次のような翻訳規則のことになる。すなわち、 a が現れる命題関数の各々を、 a ではなく b, c のみが現れる広がり等しい命題関数へとどのように変換しうるか、ということを一般的に示す規則である。

しかし、なぜ広がり等しい命題関数を置き換えてしまってもよいのか。もし、構成的定義が「意味の定義」であるべきなら、もっと厳しく、意味 (内包) の点で等しい命題関数に限定して置き換え可能性を規定しなければならないのではないか。

ここで思い起こしたいのは、前節の「弱いいみでの構造主義」において排除されていた事柄である。そこでは、連関の構造とは別の「内容的意義」は排除されていた。カルナップによれば、それは主観的にすぎず、科学の扱うべきものではない。還元可能性の規定において働いているのも、これと同じ精神である。彼はまず、表現の意味に「指示 (Bedeutung)」と「意義 (Sinn)」を区別する。文の指示は真理値、名の指示は (狭義の) 対象である。命題関数表現の指示は当然命題関数だが、これは、外延的に区別される限りでの命題関数である¹⁸。つまり、異なる表現であっても、広がり等しい命題関数に対応していれば、同じ指示をもつと言ってよい。そして、これら文、名、関数表現の意義の

ほうには、単にその表象や思想において区別されるような内容を割り振る (§44)。ここでカルナップは、指示は客観的に重要だが意義は客観的重要性をもたない、と見なしている¹⁹。弱い構造主義の場合と同様、意義は考察対象から除外されるわけだ (§45)。もちろん、ここでは必ずしも構造記述が要請されているわけではないが、構造主義の場合と同様に科学的に区別されうるものから意義を排除し、外延的に区別できない事柄はおよそ科学的に区別できない事柄であるから見なしているのである。したがって、この区別に基づく、同じ指示をもつ命題関数表現とは、広がり等の等しい命題関数に対応する表現のことであるから、カルナップの重視したいいみでの意味を保存した定義とは、広がり等の等しい命題関数どうしの定義になるのである。

このように広がり等の等しさを保存するような定義として規定されたので、構成的定義は外延間の関係を定義すればよい、という結論が得られる。したがって、このような定義によって形作られる対象圏の階層とは、クラスや関係の階層である。かくして、構成の定める階層がどういう形式かという問題、すなわち階層形式の問題は、次のように解決される。構成の階層形式とは、クラスと関係である。

このような方針の基調となっているのは、カルナップが「外延性テーゼ (Extensionalitätsthese)」と呼ぶテーゼである。このテーゼは、命題関数は外延記号によって代理してよい、という主旨のものである (§43)。上述のとおり、(1) 命題関数表現の指示は外延的にしか区別されない。そのため、(2) 還元可能性は外延的に定められるし、さらに、(3) 命題関数は外延記号で代理してよい。だから、(4) 構成の階層形式はクラスと関係である。これがここでのカルナップの主旨であろう。しかし、(1) から (2) へは前々パラグラフで説明したことに従うステップだとしても、(1) から (3) の外延性テーゼへのステップは自明ではない。命題関数を外延的にしか区別しないとしても、そこで指示として手にしている命題関数は、その命題関数の外延とは別のものであるはずだ²⁰。したがって、命題関数を関数記号でなく外延記号で代理してよいというのは自明なことではない。このステップはおそらく、対象と概念を区別しないという例の方針 (1.1 節最終パラグラフ参照) からきている。したがって、外延性テーゼにおいて主観的だと見なされ排除されている事柄には、意義のみならず、これら対象と概念の違いも含まれることになる。この点については 3.4 節で論じる。

1.3.2 体系形式

以上はまだ、形式的な話である。体系を実際に構築していく際には、1.2 節で論じたように、科学的に解明された対象種ごとの対応づけの関係をもとにして、どの対象種がどの対象種から構成されうるかを見定めねばならない。これを行なうのが体系形式の問題である。

まず、一般に対象どうしの対応づけを見定めるとはどういうことかを明らかにしておこう。先に 1.1 節の最後で言及したように、構成的言語の翻訳には实在論的言語がある。これは、記号言語で書かれた構成を翻訳して、対象に名前を割り振るような形の言語で表現することをいみする。後者の言語は平たく言えば、科学で実際に用いられているような言語である。するとこの翻訳はいわば、個々の構成が何を意図しているかを「還元」しているようなものである。逆に、科学で何が解明されているかを参照して構成の糸口を見つける際には、この翻訳とは逆の作業を行なえばよい。つまり、科学で用いられる表現のうちに、構成を行なうための条件を見つけていくのである。カルナップはこの条件を次のように定め、「還元可能性の事態的基準 (Sachverhaltskriterium der Zurückführbarkeit)」と呼んでいる (§47)。

対象 a が対象 b, c, \dots に還元可能である

\iff 対象 a, b, c, \dots の関わる任意の事態の存立について、対象 b, c, \dots にのみ依存する必要十分条件を告げることができる。

ここで「事態 (Sachverhalt)」というのはおそらく、实在論的言語において表現されるような対象どうしの結びつきのことである²¹。こうした事態どうしの関係を構成的言語において表現しなおすことによって、構成は達成されることになる。たとえば、2つの物体が熱平衡にあるのは、それらが接触させられても温められも冷やされもしないとき、かつそのときに限るので、これらは還元可能性の事態的基準を満たす。よって、「熱平衡」は「接触時の温度変化のなさ」によって定義することができる (§48)。

ところで、このような事態的基準のうちでも『構築』の体系にとって特に重要なのは、カルナップが事態の「標識 (Kennzeichen)」と呼ぶ条件である。これは、「ある事態の必要十分条件であり、かつ、通常それによってその事態が認識されるような条件」のことを言う (§49)。ただし、「ある事態の必要十分条件である」というのは、還元可能性の事態的基準を満たしている、ということである。つまり、この条件を満たすことは単に還元条件を満たすということにすぎない。重要なのは「通常それによってその事態が認識されるような条件」でもある、という部分のほうだ。

たとえば、気圧の高さと気圧計の示度の高さの間には、一方の存立が他方の存立の必要十分条件であるという関係が成り立つ。したがって、これらの間には還元可能性の事態的基準が成り立つ。しかし、気圧計の示度の高さの認識によって気圧の高さを認識するのであって、その逆ではないから、前者は後者の標識である。

標識が重要なのは、『構築』で目指す体系が、認識論的 (erkenntnistheoretisch) 体系だからである (§53)。これは、単に事態的基準を満たす場合に構成を行なうのではなく、「認識上の優先性 (erkenntnismäßig Primarität)」を反映する仕方で構成を行なうことをいみする (§54)。つまり、何を介して何を認識するか、という順序をきちんと反映させて

構成が行なわれる、ということである。

では、標識をもとにして、どのように体系構築の糸口を見つけるのか。まず、1.2節の最後に示したような対象種の間関係を手がかりに、大雑把な対象種の構成順序を定める。カルナップのもくろみは、発現関係をもとに心理的对象から精神的对象を (§§55f.)、物理的对象と知覚の関係をもとに心理的对象から物理的对象を (§57) 構成する、というものである。さらに、心理的对象のうちに「自己心理的なもの (Eigenpsychisches)」と「他者心理的なもの (Fremdpsychisches)」を分け、前者は物理的对象よりも認識上優先的だが、後者は物理的对象を介して認識されるので、物理的对象のほうがそれよりも認識上優先的だと見なす (§58)。したがって、『構築』の認識論的体系では、自己心理的对象、物理的对象、他者心理的对象・精神的对象の順に構成が試みられることになる。

ここで2つの点に注意したい。どちらも例の中立性の論点に関わる。1つは、認識論的でないような構成体系、特に「唯物論的 (materialistisch)」体系もまた可能だと見なされている (§59)、という点である²²。この場合、認識上の優先性を考慮することなく、たとえば心身関係あるいは表現関係に基づいて心理的对象を物理的对象から構成し (§57)、精神的对象を心理的对象から構成する、という順序を辿ることができる。この種の構成体系は、法則性の点で優れているとされる。2つ目は、こうした代替的な体系構築の可能性からもわかるとおり、認識論的な構成体系にしろ、唯物論的な構成体系にしろ、それを構築したからといって、実証主義 (特に感覚主義 (Sensualismus)) なり唯物論なりの特殊な形而上学にコミットすることになるわけではない (§§59f.)、という点である。これに類する論点は、1.5節でまとめて扱う。

1.3.3 基底

このような体系の見取り図をもとに、どのような基底を選び、そこからどういう構成を行なうことができるのだろうか。基底には、「基礎的要素 (Grundelement)」と「基礎的關係 (Grundrelation)」の2種類がある (§61)。基礎的要素の間に成り立つのが基礎的關係である。前節の方針より、最初に自己心理的对象が構築されるのだから、これら基底は当然、その対象種のうちに設定される。

ところで、自己心理的对象は主観的な対象であるのに、どうやったらそれを客観的に構成することができるのか、という疑問が生じるかもしれない。この問いには、再び、構造主義でもって答えが与えられる。カルナップは次のように主張している。

科学はその本性上、構造科学であるという認識、それゆえ、個々人の体験の流れを出発点として客観的なものを構成する方法があるという認識を根拠とする限り、自己心理的基底を伴った体系形式は許容できる。 (§66、強調原文)

つまり、個々人の体験の流れの「素材 (Material)」は間主観的に取り出せないとしても、その「構造的性質」は科学によって間主観的に取り出せるはずだ、というのである。これは、1.2 節に登場した、強さの異なる数々の構造主義の論点と一見類似していながら、実のところどのバージョンにもなかった論点を含んでいるので、注意が必要である。これまでの構造主義において、「構造」の客観性と対置される主観性（ないし非中立性）はすべて、（広義の）対象の種類に特有のものではなかった。性質・連関の意義にせよ、直示という手段にせよ、この性質の意義だから主観的だとか、この対象の直示だから主観的だとか、そういう限定はいっさいなく、どの対象であるかに限らず主観的だと見なされていた。しかし、ここで扱われる主観性は、自己心理的对象という対象種に特有の主観性である。そして、そのような特殊な主観性も、構造主義でもって乗り越えられるはずだ、ということが主張されている。この点については 3.4 節で詳しく論じる。

1.3.3.1 基礎的要素

では、この対象種のうちでも、どういう基底を選ぶことになるのだろうか。まず、基礎的要素としては「要素体験 (Elementarerlebnis)」が選ばれる (§67)。要は現象的所与のことなのだが、ポイントは、これら要素体験は「分節のない全体としての体験」だとされていることである。つまり、感覚的に得られる個々の質（感覚に現れる個々の色、形状、音、などなど）を基礎的要素に選び、そこから個々の体験を構成していく²³のではなく、瞬間ごとに与えられる体験丸ごとを基礎的要素としてとり、その内部に質を構成していくことになる。この選択は、ゲシュタルト心理学を 1 つの拠りどころとしているようだ²⁴ (§67)。

ただ、このような分節のない対象を基礎的要素として選んだことから、構成手続きに関して多少厄介な論点が絡んでくる。カルナップによると、要素体験からの質の構成は、要素体験の成分 (Bestandteil) 分析だとは言えないのだそうだ。それは、この構成の手続きによっては、要素体験は 2 重のいみで分解不可能 (unzerlegbar) だからだという (§74)。第 1 に、要素体験はそもそも分節のない全体だということになっているので、分解不可能である（「内容に規定された分解不可能性」）。第 2 に、クラスと関係だけが構成階層として認められているので、そもそもどんな構成体系であっても、基礎的要素からの構成は、それらからのクラスや関係の形成にすぎず、それらの内部に何らかの対象を分解していく手続きにはならない（「方法論的な分解不可能性」）。したがって、要素体験からの質の構成は、それら体験の成分の分析ではなくして、それらの「準成分 (Quasibestandteil)」の「準分析 (Quasianalyse)」という、多少曰くつきの代物になる (§§69, 71)。

この準分析の手続きを進めるにあたっては、まず、分解可能な要素の成分分析という本来的ないみでの分析を参考にし、その後、それと類比的に準分析のやり方を定める。本来的分析の例として出されるのは、物のもつ色の分析である (§70)。話を単純化してアイ

デアの核だけを取り出すために、図 1-2 のように a から f までの 6 つの「物」があり、それらが各々の「成分」として黒、白、グレー（斜線で表す）の 3 色の 1 色以上をもつとしよう²⁵。

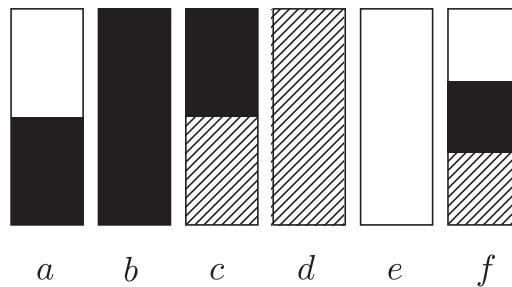


図 1-2 色分析の単純な例

さて、ここでの課題は、各々の物がもつ色が未知であり、それら物の間の関係記述だけが与えられている場合に、分析によって各々のもつ色を規定することである。その関係記述とは、同じ色を共有する物どうしの関係、すなわち「親色性 (Farbverwandtschaft)」の関係記述であり、次のような順序対の集合である。

$$\begin{aligned} &\{ \langle a, a \rangle, \langle a, b \rangle, \langle a, c \rangle, \langle a, e \rangle, \langle a, f \rangle, \\ &\quad \langle b, a \rangle, \langle b, b \rangle, \langle b, c \rangle, \langle b, f \rangle, \\ &\quad \langle c, a \rangle, \langle c, b \rangle, \langle c, c \rangle, \langle c, d \rangle, \langle c, f \rangle, \\ &\quad \langle d, c \rangle, \langle d, d \rangle, \langle d, f \rangle, \\ &\quad \langle e, a \rangle, \langle e, e \rangle, \langle e, f \rangle, \\ &\quad \langle f, a \rangle, \langle f, b \rangle, \langle f, c \rangle, \langle f, d \rangle, \langle f, e \rangle, \langle f, f \rangle \} \end{aligned}$$

この関係をグラフに表すと次のようになる²⁶。

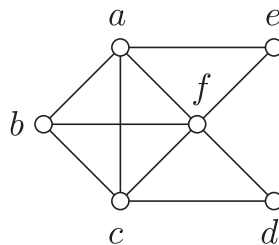


図 1-3 親色性関係のグラフ

こうした関係記述（構造記述）が与えられたときに、色クラスは次のようなクラスとして抽出できる。すなわち、(1) ある色クラスのどの 2 つの要素も互いに親色性関係に立ち、(2) 色クラスは (1) を満たすクラスのうち最大のものである。すると、この 2 つの条件を満たすクラスとして、 $\{a, b, c, f\}$ 、 $\{a, e, f\}$ 、 $\{c, d, f\}$ の 3 つの色クラスが取り出せる。そ

してこれらはそれぞれ、黒、白、グレーの色クラスである。こうして、関係記述だけから成分としての色クラスが規定できた。これが本来のいみでの分析である。

要素体験の場合も、これと類比的なプロセスを踏んで「準分析」がなされることになる。ポイントは、今の場合の親色性関係のように類似的な（つまり、反射的かつ対称的な）関係を用いれば、次のようなクラスを形成することができる、という点にある²⁷。すなわち、(1) そのクラスのどの2つの要素もその関係に立ち、(2) そのクラス外のどの要素も、このクラス内のあらゆる要素とこの関係に立つことはない、という性質をもつクラスである。こうしたクラスを「類似性円 (Ähnlichkeitskreis)」と呼ぶ (§70)。先の色クラスは、親色性関係を用いて得られる類似性円である。この方法は、フレーゲやホワイトヘッド・ラッセルが基数を定義する際に用いた「抽象の原理」に由来する (§73)。ただし、抽象の原理の場合、クラス形成において、反射的・対称的であるのみならず推移的でもある関係、すなわち同値関係を用いるのであるが。

1.3.3.2 基礎的關係

このようにして、分節不可能な要素体験を基礎的要素として選んでも、それらの間に成り立つ関係のうち、ある形式的性質（類似性）をもつものを見つければ、その関係を用いてそれら要素の準成分を取り出すことができるという。では、要素体験の場合、どういう関係を使えばうまいぐあいに準分析が進むのだろうか。つまり、基礎的關係として何を選んだらよいのだろうか。

先の親色性関係のように、その部分が同一（この場合、同色）となる関係、すなわち「部分同一性 (Teilgleichheit)」の関係 (§76) を用いると、その成分のうちに順序づけを行なうことができないという。たとえば物の色の場合、色の順序を与えることができない。要素体験の場合、そのうちに見出された準成分としての「感覚的質 (Empfindungsqualität)」の間に順序づけをできなくなってしまう。そのため、代わりにその部分が類似しているという関係、つまり「部分類似性 (Teilähnlichkeit)」の関係が必要だとされる (§77)。ただし、この関係は対称的であるため、そこから出発すると関係の向きがつぶれてしまい、時間順序の構成の際に都合が悪い。そこで、基礎的關係としては向きのある（つまり非対称的な）関係を選び、その関係から部分類似性を構成することにする。そうして選ばれる基礎的關係は「類似性回顧 (Ähnlichkeitserinnerung)」と呼ばれるもので、これは次の条件のもとで成り立つことが意図されている (§78)。

x と y の間に類似性回顧が成り立つ

$\iff x$ と y は、 x の回顧表象 (Erinnerungsvorstellung) を y と比較することで部分類似だと認識される要素体験である。

ただし、もちろんこれは定義ではない。というのも、条件の述べられる対象は基礎的關係

であるから。この双条件法は、構成体系に関わる表現（前件）と実在論的言語（この場合、心理学的分析の言語 (§75))での表現（後件）とを対応づけているにすぎない²⁸。この条件から明らかなどおり、 x が y に対して類似性回顧の関係に立っても、その逆は言えない。というのも、 x は y に時間的に先行する（回顧表象である）から²⁹。よって、この関係は非対称的である。そして、この関係を用いれば部分類似性も定義できる。すなわち、

要素体験 x と y が部分類似的である \iff 類似性回顧が x と y もしくは y と x の間に成り立つ。

次に、この部分類似性から部分同一性を定義したいところだが、直接それを行なうことはできない。そこでまず、部分類似性が反射的かつ対称的な関係であることを利用して、部分類似性の類似性円を形成する。そして、この類似性円から、何らかの感覚的質を共有した要素体験たちのクラス、つまり「質クラス (Qualitätsklasse)」を定義する (§81)。そのうえで、この質クラスを用いて部分同一性を次のように定義する (§82)。

2つの要素体験が部分同一である \iff それらがともに属する質クラスが存在する。

かくして、類似性回顧を基礎的關係として用いれば、その後の構成において欲しいものが手に入りそうである。

1.3.4 対象形式

以上のように要素体験間の類似性回顧を基底としてとったとき、その後の構成において、それぞれの対象はどのような形式をとるべきであろうか。

まず、質クラスが導出されると、それらの類似性（先のような要素体験の類似性ではなく、質の類似性であることに注意）を定義できる (§85)。

2つの質クラス a と b が類似的である $\iff a$ のどの要素も、 b のどの要素とも部分類似的である。

さらに、類似性があれば各感覚領域への分割が可能になる。

2つの質が同一の感覚領域に属する \iff 2つの間にある系列が存在して、この系列のどの質も、この系列の次の質と類似的である。

こうして、同一の感覚領域に属する質のクラスは1つの「感覚クラス (Sinnesklasse)」と見なされる。

この感覚クラスは、そこに含まれている類似性の系列の次元数³⁰がどれだけになるかによって、さらに細かく規定できる。「視覚 (Gesichtssinn)」の感覚クラスは次元数5、

音感覚は 2、皮膚感覚は 3 もしくは 4、というように (§86)。さらに、視覚の 5 次元のうち、色の 3 次元（色調、明度、彩度が意図されている）と場所の 2 次元（視野は 2 次元ということ）を区別する必要がある (§88)。これらを区別するには、2 つの質が視野内の同じ場所にある場合、それら質は同じ要素体験には現れえない（なぜなら当の場所は 1 つの要素体験に 1 つしかないから）が、2 つの質が同じ色をもつ場合、それらは同じ要素体験に現れうる、という違いを用いればよい。これによって場所クラスのを取り出した後、近接場所 (Nachbarstellen) が定義される (§89)。その際、場所クラスに含まれる質の類似性が用いられる。さらに、近接場所での質の類似性から、近接場所での同色性の関係を定義でき、そこからさらに、任意の場所に関する同色性が定義される (§90)。同色性関係は同値関係なので、その抽象クラスとして色クラスが構成でき、そうした 2 つの色クラスの要素どうしが類似している場合に成り立つ関係として、近接色 (Nachbarfarben) が定義できる。こうして、色の 3 次元順序が構成される。

以上が、低次の対象の構成の概略である。それ以降の構成については構成体系の実際に委ねられるので、1.4 節以降に論じることにした。

1.3.5 構成体系の叙述形式

実際の構成を見る前に、構成体系を提示する際に用いられる 4 つの言語について手短かに述べておきたい。それらは次の 4 つの言語である (§95)。

(S) 形式論理学の記号言語。

(W) (S) の日常言語（カルナップの言い方では「話し言葉の文章 (Worttext)」）へのパラフレーズ。

(R) 科学で用いられる实在論的言語 (realistische Sprache)。

(F) 虚構的構築の言語 (Sprache einer fiktiven Konstruktion)。

これまで述べたとおり、構成は (S) の記号言語を用いて行なわれる。これが構成の第一義的な言語である (§95)。それ以外の 3 つの言語はその翻訳にすぎない。前節で行なったように、この記号的構成を、記号言語ではない日常的な言語でパラフレーズすることもある。これが構成の理解を助ける (W) の言語である (§98)。さらに、1.1 節の最後でも述べたとおり、カルナップの中立主義の立場から、实在論的言語と観念論的言語という特別に哲学的な含みの大きな言語への翻訳も行なわれる。これらがそれぞれ (R) と (F) の言語である。

(R) は、体系形式を論じる際 (1.3.2 節) に多少明らかにしたように、科学（もしくは日常生活）において「事態」を表すのに用いられる普通の言語であり、ここにはそれぞれの対象を指示する名前が含まれている。この言語を用いることによって、記号的に構成され

たものが実際に馴染みある対象を定義するものかどうかははっきり判別されるようになる (§98)。この言語は、構成の内容の正しさを認識しやすくするという目的をもつという³¹ (§95)。この言語がなぜ、どういういみで「實在論的」と呼ばれているのか、という点については、4.4 説で詳しく検討する。

(F) は、きわめて哲学的ないみあいを帯びた言語である。これは、構成的定義を構築手続きの操作指令 (Operationsvorschriften für ein konstruktives Verfahren) と見なし、数々の虚構を想定することで、ある被験者 (仮に A 子さんとしよう) がその指令だけで認識を構築できることを示そうとする (§99)。「虚構」と言っているのは、このような明示的指令による認識をもっともらしくするには、無意識的・直観的に行なわれる実際の認識では生じないような想定が必要とされるからである。ところが、これら虚構はすべて、前節までに論じた構成的定義では前提されている事柄である。これはどういうことかという、もともと構成体系というのは次のような性格を備えている、ということにほかならない。

構成体系は、認識においては主に直観的に遂行された**實在の構築** (Aufbau der Wirklichkeit) 全体の、合理的再構築 (eine rationale Nachkonstruktion) である。
(§100、強調原文)

この再構築を実際に 1 人の主体に行なわせるという想定のもとで設えられる、件の虚構のうちには、以下のものがある。すなわち、(1) 所与を得る過程とその加工過程との完全な分離、(2) 所与の保持可能性、(3) 基礎的關係の一覧表である。(1) は、いっさいの「総合的契機」を除去して、純粹に要素体験を得る過程と、それらを加工する (それらから構築を行なう) 過程とを分離できる、という虚構である (§101)。(2) は、A 子さんは所与を忘却することなく同一のものとして記憶に留めつづける、という虚構である (§101)。(3) は、A 子さんは基礎的關係に立つ要素体験の番号の対のリストを保持する、という虚構である (§102)。

これら虚構を想定しておけば、あとは彼女に操作指令を与えることによって、構成を追体験させることができる。ここでのポイントは、(3) におけるリストが具体的にどのようなものかは A 子さん次第で我々には知りようもないが、指令自体は A 子さんに固有の事柄とは関わりあいがなく立てられており、その指令にさえ従っていれば認識は構築できるはずだ、ということである。つまり、操作指令は合理的再構築によって我々体系構築家が得た純粹に形式的な規則であり、最初に外延としてのリストさえ用意してもらえれば、あとは形式的規則だけで虚構的な認識は達成されるはずである、ということにほかならない。かくして、内容の正しさを確認するための (R) の言語とは対照的に、(F) の虚構的構築の言語を用いることによって、構成の形式的正しさが認識しやすくなるという (§§95, 99)。

以下の構成体系の各段階は、これら4つの言語で表現されることになる。

1.4 構成体系——『構築』第IV部

では、実際の構成を見ていくこととしよう。体系形式のところ(1.3.2節)で見たように、構成は、自己心理的対象 (§§107–122)、物理的対象 (§§123–138)、他者心理的対象・精神的対象 (§§139–152) という順で行なわれる。このうち、自己心理的対象については、1.3.3節と1.3.4節ですでに示したような構成のアウトラインが存在する。これに従って、各構成ステップを記号論理学の言語で明示的に定義し、それを1.3.5節で論じた別の3つの言語へパラフレーズする、というのが、この対象種に関してなされる構成の内実である。それに対して、物理的対象以下の構成は、単に概略が示されるにすぎない。それは、『構築』という書物にとってあくまで重要なのは構成体系を実際に構築することというよりも、その構築の可能性を示すことにある、というカルナップの意図によって正当化される。

1.4.1 自己心理的対象

自己心理的対象についてはすでに大まかな構成の流れを述べたので、それらの記号論理的定義と他の言語への翻訳とが実際にどのようなものであるかを確認するにとどめる。

まず、記号言語による定義と、その日常言語へのパラフレーズ、さらに、实在論的言語への翻訳(それぞれ、1.3.5節の(S)、(W)、(R))を見ておこう。

- (1) まず、1.3.3.2節で見たように、基礎的關係は類似性回顧であった。この最初のステップは、それぞれの言語では、以下のように記述される (§108)。(R)における言い換えは、1.3.3.2節ですでに与えたものである。
 - (S) Er (つまり、未定義の基礎的關係として Er が導入されるということ)
 - (W) 類似性回顧。
 - (R) x と y は要素体験であり、 x の回顧表象は y と比較され、それと部分類似だと認識される。
- (2) 次に、要素体験間の部分類似性 Ae は、次のように与えられる (§110)。
 - (S) $Ae =_{Df} Er \cup \check{E}r \cup Er^0$ (ただし、 $\check{E}r$ は Er の逆関係、 Er^0 は関係 Er に立てる項の間の同一性)
 - (W) 2つの要素体験 x と y が「部分類似」である $\iff x$ と y の間もしくは y と x の間に Er が成り立つか、 x と y は Er の同一の項である。
 - (R) 要素体験 x と y の間に類似性回顧が成り立つなら、 x の成分は y のある成分と類似しており、 y の成分は x のある成分と類似している。

- (3) さらに、この Ae は類似的な関係なので、その類似性円 (1.3.3.1 節) を形成することができる (§111)。
- (S) $\check{a}hnl =_{Df} Sim'Ae$ (「 $Sim'Ae$ 」は、 Ae の類似性円ということ)
- (W) Ae に関する類似性円は、端的に類似性円と呼ばれる。
- (R) すべてが互いに隣接する質の最大のクラスを規定し、それによってこれら質の現れる要素体験のクラスを規定すると、これら要素体験のどの2つも互いに部分類似であり、これらの外のどの要素体験もこれらすべてに部分類似であるということはない。

この $\check{a}hnl$ を用いて質クラス $qual$ を定義する。その後の構成は 1.3.4 節で描いたように進むが、ここでは省略して、ここまでのステップ (1)–(3) について、残り1つの言語である虚構的構築の言語 (F) への翻訳を見ておくことにする。1.3.5 節で示したように、この言語は、構成の手続きが被験者 A 子さんにとっての認識の自覚的な規則となるべく彼女に与えられる、操作指令の言語である。

(1) (S) Er

(F) A 子さんの手元にある唯一の素材は、基礎的關係リスト (1.3.5 節の虚構 (3)) である。これは我々には知られていない。しかし、我々には基礎的連関 (つまり類似性回顧) の意義 (Sinn) はわかっている。A 子さんはこの意義を知ることなく、リストだけから、この関係が反対称的 (決して対称的ではない) ことを確かめられる (§108)。

(2) (S) $Ae =_{Df} Er \cup \check{E}r \cup Er^0$

(F) A 子さんは Er リストのあらゆる対と逆対、同一性の対を入れることで、関係 Ae の目録を作成する (§110)。

(3) (S) $\check{a}hnl =_{Df} Sim'Ae$

(F) A 子さんは、次の手順を踏むべきである (§111)。

- (i) Ae が反射的であるという理由で Ae クラスに属する、要素が1つだけのクラスから出発する。
- (ii) 次に、 Ae の関係リストから対を取り出すことで、要素が2つのクラスを形成する。
- (iii) 次に要素が3つのクラスを、というように、以下同様に形成する。
- (iv) 最後に、これらクラスのリスト中の他のクラスに部分クラスとして含まれるクラスをすべて、リストから消去する。

A 子さんは、こうして発見されたクラスに番号を付け、これら番号のすべてとそこに属する要素体験の番号を $\check{a}hnl$ の目録に登録する。

かくして A 子さんは、構成される個々のクラスや関係がどういう内容（カルナップによれば「意義」）をもつかわからなくても、純粹に形式的な作業を行なうことによって、構成の各ステップをこなせることになる。

1.4.2 物理的対象

以上のようなやり方で、自己心理的対象種が構成される。1.3.2 節で述べたように、それに続くのは、物理的対象の構成である。これは、次のような手順を踏む。

- (1) まず、物理的空間を構成し、それをもとに視物を構成する (§§124–128)。
- (2) 次に、重要な視物である私の身体を構成し (§129)、それをもとに自己心理的領域を補完する (§§129–132)。
- (3) さらに、知覚世界を構成し (§§133–135)、物理学的世界を構成する (§136)。
- (4) 最後に、他者心理的対象の構成に必要な物理的対象について論じる (§§137f.)。

各ステップは、自己心理的な対象の場合のように 4 つの言語で表現されてはいない。特に、記号言語による正式な構成はまったくなされず、主に日常言語で構成の大枠を示したり、そのいみするところを実在論的言語で述べなおしたりする程度である。ここでは、以上の 4 つのステップ各々をごく手短かに見ておくことにする。

(1) 物理的空間と視物について。まず、世界点 (Weltpunkt) からなる n 次元実数空間を考える。物理的空間 (der physische Raum) は、各世界点に対して、自己心理的な色の質を割りあてることによって構成される (§125)。カルナップはこうした割りあてを「帰属 (Zuschreibung)」と呼び、帰属が満たすべき 12 の条件を挙げている。それらは、形式的な条件の日常言語におけるパラフレーズ (§126) と、それら条件の実在論的言語における表現 (§127) の 2 通りの仕方で与えられる。12 の条件すべてを挙げている余裕はないが、基本的なアイデアだけ示せば以下のとおりである。

実在論的言語で語ると、やろうとしていることはごく単純である。(i) 視点 (Ausblickpunkt) からの視線 (Ausblicklinien) の先にある外部世界の点には、その視点に対応する視覚上の色質が帰属される。しかし、(ii) 外部世界には、私の視点から見られていない点もちろんある。それらについては推定をなすほかない。たとえば、(iii) かつて見られた外部世界の点はその前後を通じて存在し、(iv) ほぼ同じ色を保ち続けると仮定する。また、外部世界の点の運動については、(v) 隣り合って観察された外部世界の 2 点は、見られていないときにも互いに隣り合うと仮定されるべきである、などというように、4 つほど推定の規則が立てられる。

これを形式的な条件として語ると、次のようになる。(i) 視点は世界点の連続曲線を ($n-1$ 個の空間座標の各々が時間座標の連続関数になるような仕方で) 形成する。ある視

点の視線とは、その視点と（ほぼ）同じ時間座標をもった世界点のあるクラス（その時間座標におけるある空間断面）である。時間的により後の体験は、より大きな時間座標をもつ視点に、といったぐあいに、体験と視点は一対一に対応づけられる。そして、視覚上の色質を、対応する視点の視線の世界点に帰属させる。これら世界点を「見られた色点」と呼ぶ。(ii) 見られていない色点については、次のような推定を行なう。(iii) 見られていない色点には、見られた色点の世界線（Weltlinien）を形成するように色が帰属される。つまり、ちょうど1つの世界点が多時間座標の各値に属するような連続曲線を形成するべく、帰属される。(iv) 世界線の点の色が可能な限り小さな変化率を示すように、見られていない色点への色の帰属はなされる。また、たとえば、(v) 近接する見られた色点の1つ以上の対を通る2本の世界線は、他の場合も近接すべきである、というように、世界線のとりかたについて4つほど推定がなされる。

以上のような条件を満たす形で帰属がなされた上で、ある長い時間区間の間、世界線の束の近接性がほぼ一定であるなら（つまり、外部世界の点がずっと隣り合っているなら）、対応する世界点のクラスは「視物（Sehding）」と呼ばれる (§128)。要は物として単位をなしているということである。また、12の条件すべてを満たす実数空間は少なくとも4次元空間でなければならないことも示される (§125)。

このような物理的世界の構成にあたって重要なことの1つは、世界点への色の帰属が一意的ではない (§125) ということだ。それはもちろん、見られていない色点の帰属については推定を行なうほかないからである。

(2) 私の身体と自己心理的領域の補完について。こうして視物が構成された後に、視物の特殊例として「私の身体（mein Leib）」が構成される。この構成は、視点への恒常的な近さや、触覚および筋運動感覚などを頼りに行なわれる (§129)。さらに、私の身体の触覚を用いて、先の視覚の帰属と類比的に、今度は触覚の帰属を行なう。つまり、触れられた触点と触れられていない触点を構成する (§130)。ここから、「触視物（Tast-Sehding）」が構成される。私の身体が触視物として構成されると、それらの形態や相互の位置から、感覚器官も構成できる。感覚器官を頼りに、あらゆる種類の感覚の標示が可能になる (§131)。

(3) 知覚世界と物理学の世界について。感覚をすべて区別できるようになると、それらの質クラスを世界点に帰属できるようになり (§133)、「知覚物（Wahrnehmungsding）」が構成される。そして、帰属の済んだ時空世界全体を「知覚世界」と呼ぶ (§134)。次のステップは、この知覚世界と物理学的世界（die physikalische Welt）との対応づけ（Zuordnung）である。知覚世界においては4次元実数空間に質が帰属されたが、この物理学的世界では、4次元実数空間に物理学的状態量（physikalische Zustandgrößen）が、つまり質ではなく量が帰属される。まずは知覚世界と物理学的世界との間で世界点を一対一に対応させ、その上で、質と状態量を対応させることになる。しかし、知覚世界の不明瞭さから、この対応づけは一対多にしかなされえないという (§136)。

(4) 他者心理的対象の構成に向けて。かくして、物理的対象の領域全体が構成される。その下位分類として、生物、生物学的対象、人間（特に「他の人間」）が構成される (§137)。

1.4.3 他者心理的対象と精神的対象

次は他者心理的対象と精神的対象であった。その構成の概略は以下の通りである。

- (1) まず、物理的な物としてすでに構成された他の身体におけるある種類の出来事をもとに、他者心理的対象を構成する (§140)。
- (2) 次に、他の人間におけるある種の出来事を記号生成として把握し、この助けをもとに他者の世界が構成される (§§141–145)。
- (3) 私の世界と他者の世界の間には特定の対応づけが成り立つので、間主観的世界をそこから構成する (§§146–149)。
- (4) 最後に、心理的対象をもとに、最高階の対象、すなわち精神的対象 (§§150f.) と価値 (§152) の構成が可能になる。

これらに関しても、物理的対象の場合と同様、大枠が示されるだけである。以下では、(1)–(4) それぞれのステップをごく簡単に見ておく。

(1) 他者心理的対象の構成。1.2節で見たように、心理的対象と物理的対象の間には表現関係が成り立つ。これは、ある身振りがある心理的出来事の表現である、というような関係だった。他の人間の身体はすでに構成されているので、まずはこの表現関係を利用して、他の人間に心理的出来事を帰属していく (§140)。

(2) 他者の世界の構成。さらに、他の人間が示す記号生成 (Zeichengebung) という物理的出来事 (§141)、そのうちでも特に報告 (Angabe) を手がかりにする (§142)。報告とは、文、すなわち事態を表す記号³²を生成することである。他の人間による報告関係、つまり彼女の発した文とそれの表す事態との関係が定められれば、彼女にどのような心理的出来事が生起しているかだけでなく、彼女が世界をどう把握しているかも定められる。(1) と (2) はいわば、先に Er を用いて行なわれたあらゆる構成を、表現関係と報告関係をもとに、他の人間 M に相対的に、 Er_M を用いた形で反復することをいみする。これを「 M の世界」、または「 M の構成体系」と呼ぶ（ただしそれは、これまでの構成体系の部分体系にすぎないが） (§145)。

(3) 間主観的世界の構成。すると、構成体系全体 S と M の構成体系 S_M の間にはある程度の類比が成り立つが、たとえば身体は人によって異なるから、「私の身体」である ml と ml_M は一致しないなど、物理的対象の構成では類比は完全には成り立たない。しかし、 S の物理学的世界と S_M の物理学的世界との間には、前者の世界点の間の関係が、それらに対応する後者での世界点の間の関係と同一になる、という仕方で、一対一の対応づけが

成り立つはずである。これを「間主観的対応づけ (die intersubjektive Zuordnung)」と呼ぶ (§146)。間主観的対応づけは、M だけでなく N、P など、他のあらゆる人間の世界についても行なえるので、一般化することができる。かくして、間主観的に対応づけられた対象たちからなる間主観的世界が生成する (§148)。

(4) 精神的対象と価値の構成。いよいよ最後の構成ステップである。まず、その構成に他の精神的対象の構成を前提しない 1 次的な精神的対象を構成する。その際、1.2 節で示した発現関係を用いる。たとえば、ある社会的慣習を心理的傾向性から構成する、というようなやり方である (§150)。残りの精神的対象は 1 次的な精神的対象をもとに構成される (§151)。最後に、倫理的、美的、宗教的、生物学的、などなどのさまざまな価値は、価値体験という心理的对象から構成する (§153)。

1.4.4 基礎的関係の消去

これで構成は終わる。しかし、カルナップは最後に、構成の「後始末」とでも言うべき驚愕のパートを用意する。これまでの構成がすべてうまくいっているのならば、科学の扱う対象はすべて、基礎的関係からの構成であり、科学の命題はすべて、基礎的関係だけに関わる命題になるのだった。しかし、カルナップが言うには、これでは科学の命題は純粋な構造命題であるというテーゼと調和しない。つまり、この状態では、1.2 節で見た強い構造主義に抵触するというのである。そのため、基礎的関係も科学的命題から消去されねばならない、という (§153)。その作業が構成の最後の後始末として残されることになる。

しかし、いったいどうやるというのだろうか。これを行なうためにまず、次の点に注目する。すなわち、 Er ではない基礎的関係をもとに体系を構築した場合には、構成の形式がだいぶ異なるはずだ。万が一最初のほうで同じ形式の構成が行なわれたとしても、必ずどこかのステップで異なる形式の構成が登場するはずである。よって、十分高い階層の対象の構成形式を見れば、それによって何を基礎的関係としてとったかがわかるはずであり、そのことをもって基礎的関係の標示とすればよい、という (§153)。

以上のことは、基礎的関係が体験可能なものであることを前提している。しかし、体験可能性を度外視してしまえば、純粋に形式的に、次のような操作を行なうことが可能はずである (§154)。まず、基礎的要素の集合に関して、自身の上への一対一の写像変換を行なう。そのうえで、変換後の基礎的関係は、もともと基礎的関係が成り立っていた要素を変換した要素どうしの間で成り立つものとする。たとえば、 a 、 b 、 c 、 d の 4 つの要素しかない単純な例を考え、 a を c に、 b を d に、 c を b に、 d を a に変換したとする。もともと、 $\langle a, b \rangle$ 、 $\langle a, c \rangle$ 、 $\langle b, d \rangle$ 、 $\langle c, a \rangle$ という関係が成り立っていたとすると、変換後に成り立つ関係は、これら関係の要素を変換後の要素に置き換えた、 $\langle c, d \rangle$ 、 $\langle c, b \rangle$ 、 $\langle d, a \rangle$ 、 $\langle b, c \rangle$ である。すると、変換の前後を通じて基礎的関係の構造は変わらないので、この新たな基礎

的關係によって、古い基礎的關係で行なったのとまったく同じ構成を行なうことができるはずである。しかし、この關係は、体験可能性をまったく保証しておらず、単に、もともとの要素を勝手に変換した要素どうしの間で成り立っているにすぎない。我々の構成体系で言えば、もともと基礎的關係が成り立つ要素体験は類似性回顧の連関に立っていたのだが、変換後に基礎的關係に立つ要素体験どうしは、経験においてどのような結びつきをもつか、その連関の意義がまったく不明である。よって、その基礎的關係をもとに次々構成されていく対象も、どういう意義の対象であるかがまったく不明であることになろう。したがって、体験可能性を度外視すると、構造をまったく同じくし、そのために後の構成もすべて同一になってしまうような基礎的關係が無数に存在することになり、先に述べた手段で望みの基礎的關係を標示することはできなくなってしまうだろう。

そこでカルナップは、体験可能で「自然な」關係を「**基盤をもつ關係** (fundierte Relationen)」と呼んで、基礎的關係のもつ条件に入れこむことにする (§154)。この有基盤性は、定義不可能だが不可欠の概念、しかも、論理学の (!) 基礎概念であるという。この概念を前提すれば基礎的關係は消去的に定義できるとされ、§155 ではその定義が試みられている。

1.5 哲学的問題への応用——『構築』第 V 部

以上で構成体系の構築の概略が終わり、最後は、そうした構築の可能性によって、哲学的問題に対してどのような示唆が得られるのかが論じられる。それら哲学的問題には、大きく分けて本質問題と実在問題の 2 種類がある。こうした問題は、ある問いの立て方に従えば構成理論の観点でも十分に論じられる問題であるが、別の問いの立て方では、ただの形而上学的な問題になってしまうという。したがって、問いの立て方の区別を行なったうえで、どのような問いには答えなくてよくて、答えうる問いには構成理論でどのように解答を与えることができるのかを論じることになる。

1.5.1 本質問題

本質問題 (Wesensprobleme) は、対象・概念の本質を問うものである。その問いには構成的なものと同形而上学的なものを区別できるという (§161)。前者は、当該対象が基礎的対象からどのように導出されるか、という問いであるが、後者は、対象はそれ自体でどのようなものなのか、という問いである。「それ自体で」というのは、他の対象との關係をいっさい考えずに、それら単独で自立的に存在するものとして、といういみである。そうしたいみで対象の本質を問うことが形而上学的であり、構成理論的な観点から見て認められないのは、対象がどういうものであるかは、他の対象との關係から構成されてはじ

めて正確に理解されうるものであり、そうした構成に反映されない対象のあり方についての問いは客観的ないみをもちえないからだ。

本質問題の例は、志向的關係 (intentionale Beziehung) の本質や因果性の本質を問うようなものである。前者の關係は、構成理論的に言うと、ある要素 (つまり体験) が実在種対象 (1.5.2 節で後述) の構成形式をもった秩序に属する、という關係である。これは、ある要素が、特定の構造をもった關係の組織体に属する、という一般的關係の一例であるという (§164)。つまり、ある要素と、それを包括する何かとの間の一般的關係だという。これをふまえれば、たとえば、ある植物が植物体系を指す (hinweisen)、ある色調が色立体を指す、ある人物がその家族を指す、などのようにも言えるであろう。他方、因果性とは、知覚世界の法則性であるという (§165)。知覚世界とは世界点に質を帰属した世界であった (1.4.6 節) から、因果法則とは、2つの世界点の領域の間で、帰属される質どうしが満たすべき法則のことであることになる。こうした種類の法則には、因果法則の他に、経過法則や近接性法則があり、それぞれ、2つの領域が互いに続く場合と近接する場合に満たすべき事柄を示している。因果法則は、時間的近接性をもった経過法則だとされる。

本質問題のうちでも特に論争を呼ぶのが、心身關係の本質を問う心身問題である。構成理論的には、心身問題の基本的状況においては、要素体験の成分の並行的過程が生じているにすぎないという (§168)。つまり、一方では物理的対象の構成に用いられない成分の系列 (たとえば、外部からは音が鳴っていない状態でメロディーを単に想像する際の聴覚的成分の系列) があり、他方ではそれに並行して、物理的対象の構成に用いられる成分の系列 (たとえば、メロディーを想像している際の脳状態を機器で観察する視覚的成分の系列) がある、ということにすぎない。科学的にはそこまでのことしか言えず、このような結果を解釈したり基礎づけたりしようとするのは、例によって形而上学の仕事だという (§169)。たとえば、両者がともに物理的対象の構成に用いられる成分系列の並行的過程は、物理的な物自体の措定によって形而上学的に説明されるし、両者がともに心理的対象の構成に用いられる成分系列の並行的過程は、心理的実在の措定によって形而上学的に説明される。

1.5.2 実在問題

実在問題 (Wirklichkeitsprobleme) は、何が実在するのか、どういう条件を満たせば何かが実在すると言えるのか、という問題である。この問題にも、構成的なものと同形而上学的なものが区別される。

構成的な実在問題は、経験的な実在概念 (empirischen Wirklichkeitsbegriff) を扱うものである。これは、構成体系のうちでどういうものとして構成されたかに基づいた実在性の概念である。経験的な実在性の基準は、それぞれの対象種に応じて立てられうる。たと

えば、物理的対象の実在性と非実在性は次のように定められる (§170)。

- 物理的対象が実在的 (wirklich) である \iff 結合した世界線束上に置かれ、物理学的な時空世界の 4 次元体系全体に位置づけられうるような、物理学的な点のクラスとして構成される。
- 物理的対象が非実在的である \iff 世界点の 4 次元順序ではあるが、上記の 4 次元体系全体の部分領域ではない。

たとえば、幻覚、嘘、自身の空想などは後者の事例に入る。ただし、それぞれ非実在性の由来が違っていて、幻覚は視物が視知覚によって構成される場合であり、嘘は他の人間の報告をもとに構成がなされる場合であり、空想は、体験にも他人の報告にも依存せずに、構成が物理的な物を自由に形成する場合だという。他の対象種については、次のように基準が立てられる (§171)。

- 自己心理的対象が実在的である \iff 結合し、時間的に順序づけられた自己心理的対象の体系のうちに位置づけられうる。
- 他者心理的対象が実在的である \iff 実在的な物理的対象である他の人間に帰属されうる。
- 精神的対象が実在的である \iff その具現 (1.2 節参照) が実在的な心理的対象に属する。

以上を比較総合すると、次のような条件が実在的なものの標示になるという (§171)。

- (1) 実在的対象はどれも、包括的かつ法則的な体系に属する。
- (2) 実在的対象はどれも、間主観的な対象であるか、そうした対象の構成の直接的起因を与える。
- (3) 実在的対象はどれも、時間順序のうちに位置をもつ。

一方、経験的実在性の問題とは違って、形而上学的な実在問題は認識する意識からの独立性として実在性を捉える (§175)。この種の実在性 (形而上学的な実在性) を何に認めるかで、各種の哲学的立場の違いが生じる。(狭義の) 実在論は、物理的対象と他者心理的対象は実在的であると論じる。主観的観念論は、他者心理的対象は実在的だが、物理的対象は実在的ではないと論じる。独我論は、他者心理的対象の実在性すら拒否する。現象主義³³ は、自己心理的なものの外に実在的なものがあるという点で実在論と同様に論じるが、観念論と同様、この実在性を物理的なものには認めない。この実在性は認識不可能な「物自体」に認められるべきであり、物自体の現れが物理的対象である。

しかし、この種の「認識する意識からの独立性」としての実在性は、構成体系において構成されえないのである (§176)。よって、これを科学が扱うことはできない。だが、重要

なことは、この種の実在性をめぐる問いの手前では、上記の各立場どうしの間で、また、それら立場と構成理論との間で、何ら矛盾するところはない、ということである (§§177f.)。構成理論と实在論は、経験的に実在的な対象に関して多くの点で一致する。たとえば、それらは間主観化可能な限りにおいてのみ認識体系において受け入れられる、体験において表象されない時間にも存続する点で認識されることから独立である、私の願望によってはふるまいが変化しないという点では私から独立である、など。また、構成理論と主観的観念論は、認識対象のあらゆる命題が所与どうしの構造的結びつきについての命題へと変換されうる、という点で一致する。このようにして、カルナップの中立主義が働き、各種の哲学的立場が単に形而上学的だとして排斥されるのではなく、その「科学的」側面を自らの構成理論が救っているのだ、とも主張されるのである。

以上が、『構築』の主な議論である。次章では、これらの議論がどのように解釈され、批判されてきたかを概略する。

第2章

『構築』の解釈と批判

本章では、『構築』がどのように捉えられ、批判されてきたのかをサーヴェイする。これは第II部の議論の前提となる。第II部では、折に触れて本章で触れた各論点に立ち返り、そのいみするところを捉えなおすことになるだろう。

2.1 『構築』研究の流れ

まずは『構築』の受容のされ方の変化を簡単に振り返っておく。大きく分けて、順に、(1) 経験主義的な読解、(2) 新カント派的な読解、(3) 科学的哲学としての読解、という変遷がある。(1)は英米哲学界でのスタンダードな『構築』解釈であり、20世紀を通じてこのような理解のされ方が支配的だったと言える。それに対して(2)と(3)は、20世紀の終盤から現在にかけての20–30年あまりの間によくできあがってきた解釈にすぎない。これは、昨今のカルナップ・ルネサンスの中で、カルナップ哲学を育んだ思想的伝統、つまりは19世紀後半から20世紀初頭にかけてのドイツにおけるカント的伝統のもとに『構築』を理解しようという試みの結果、生じてきた。(2)から(3)への流れは、こうした試みの中で、最初(2)においてこのような伝統の働くところを強調しすぎたのではないか、との認識から、より詳細な文献研究によって、(3)においてはいわば「カント臭」、「ドイツ臭」を薄めていく、という流れになっている。ちなみに、この(2)から(3)への流れは緩やかなものであり、(1)と(2)・(3)との断絶を強調すべきである。

2.1.1 経験主義的な読解

『構築』の最初期の受容はもちろんウィーン学団によるものだが、わりと最近までその解釈を代表していたのはクワインによる解釈である。クワインの『構築』解釈は主に、戦後英米哲学界への影響力がきわめて大きい「経験主義の2つのドグマ」(Quine, 1953/1961)

や「認識論の自然化」(Quine, 1969)に表されている。そしてその解釈は、ある言語哲学上および認識論上のテーゼを『構築』に見ており、その影響力の大きさもあって、いわゆる「広く受け入れられた見方 (the received view)」となった。

クワインによれば、『構築』は「根元的還元主義 (radical reductionism)」と呼ばれる立場 (分析/総合の区別と並んだ「経験主義」の2つのドグマの1つ) をとっている。それはすなわち、「有意味な言明はどれも、直接経験についての (真あるいは偽である) 1つの言明に翻訳可能である」(Quine, 1953/1961, p. 38) とする立場である。そしてクワインは、こうした立場を理由に、『構築』がイギリス古典経験主義の流れを引くようなプログラムであると見なす。どの観念も感覚印象に発生するか、そこから発生する観念の合成である、という経験主義的立場の継承だというのである。こうした経験主義的立場はラッセルの『外部世界に関する我々の知識』(Russell, 1914) に受け継がれていたが、『構築』はそれをさらに発展させたものだという (Quine, 1969, pp. 73f.)。この流れの中に位置づけられた『構築』は、感覚経験という確実な証拠をもとに外部世界を構築し、その確実性を確立して、それについての信念を正当化するプログラムだということになる³⁴。しかし、クワインによればこのプログラムはうまくいかない。なぜうまくいかないのかについては2.2.1節で論じることしよう。

2.1.2 新カント派的な読解

以上のような経験主義的『構築』理解に対して、近年は批判が加えられるようになった。特に1980年代以降は『構築』ならびにそれ以外のカルナップ文献についての歴史的研究が進展し、カルナップ哲学を育んだ知的伝統のもとに『構築』を定位させ、そのうえでプログラムの意義を正確に捉えなおそうという動きが出てきた。この伝統というのはつまるところ、カント復興の伝統、新カント派の伝統である。この伝統のもとに『構築』を置くことが正しいとしたら、当然、『構築』がイギリス経験主義のテーマをそのまま引き継いでいるはずはないだろう。こうした新たな捉え方のもとの、『構築』のテーマをクワイン的理解とはまったく異なる理解でもって見定めようとする代表的研究者が、フリードマン (Friedman, 1987/1999; 1992/1999)、リチャードソン (Richardson, 1998) である³⁵。

フリードマンによると、『構築』が経験主義的でないことは、次のような点から言えるという。まず、(1) 経験主義的な捉え方によると、物体を感覚経験から構築することが『構築』の第一の目標であるかようになってしまう。しかし、実際本論の第1章で見たとおり、『構築』の主な作業は物理的世界を構築する前の自己心理的対象領域内部での構築作業であり、それ以降は素描にとどまっている。こうしたことから、物体の構築 (外部世界はどうやって知られるのか) よりも、心理的対象領域内部でどう構築されるかのほうが『構築』にとっては重要だという (Friedman, 1987/1999, p. 91; 1992/1999, pp. 118f.)。さ

らに、(2) 経験主義的把握によると、外部世界はいかにして確実に知られるか、それについての信念はいかにして正当化されるのか、といった点が認識論の主要テーマとなる³⁶。しかし、確実性や正当化などの論点は『構築』ではいっさい問題とされていないのである (Friedman, 1992/1999, pp. 119f.)。また、(3) 経験主義的把握によると、『構築』が現象主義的体系を築こうとしているのは、それが現象主義にコミットしているからだ、ということになるだろう。しかし、1.3.2 節で論じたように、カルナップは実際には、現象主義的な体系³⁷の他に、唯物論的体系もありうると見なしている。そして、第1章で幾度か確認したように、カルナップはさまざまな哲学説に関して中立主義の立場に立つことを標榜しているのであり、こうした複数の体系の構築可能性の強調も、そのような立場の表れであると言える (Friedman, 1987/1999, pp. 92ff.)。

では、経験主義的テーマが『構築』のカルナップにとって重要ではないとしたら、『構築』の主要テーマとはいったい何なのだろうか。フリードマンやリチャードソンによると、それは客観的認識はいかに可能か、という問題である (Friedman, 1987/1999, p. 98; Friedman, 1992/1999, pp. 125f.; Richardson, 1998, p. 2)。体験は主観的であるのに、そこからいかにして客観的認識が可能になるのか、という問題こそが、『構築』にとってもっとも重要だったというのである。こうした見方によって、前パラグラフ(1)の論点に説明がつく。すなわち、(1) 自己心理的対象領域のうちにさまざまな対象を構築することに躍起になっているのは、こうした主観的領域にすら客観的構造を定められることを示すのが、カルナップにとってきわめて重要であるからである。また、(2) についても、次のような点を指摘できる。確実性を論点とした場合には、体験という確実な基礎のもとにその他の対象の認識の確実性を得ることが課題となり、出発点はそれをもとに構成されたものよりも認識論的に価値が高いことになるだろう。しかし、客観性を論点とすれば、逆に、出発点はいかにも頼りなく、構成によって客観性という認識論的に重要な価値をもっていき、ということになるだろう。さらに、(3) についても、客観的な認識の可能性は、現象主義的体系だけでなく他の種類の体系構築、たとえば唯物論的な体系構築においても示すことができるため、現象主義的体系を特権化するわけではない、と言える³⁸。

フリードマンやリチャードソンによれば、客観的認識という『構築』のテーマは、経験主義ではなく新カント派に由来する。とりわけ、純粋に構造的な標示という概念によって客観的認識を説明しようという点は、新カント派的な伝統の影響力の強さを物語っている。この着想は、客観的認識にとっては形式が不可欠だというカント的な発想に出自をもつわけだが、形式というのが直観の形式ではなく、論理形式で十分、とした点が、とりわけ新カント派的な発想の影響の色濃さを示しているという (Friedman, 1992/1999, pp. 98f.)。この点については第3章で詳しく論じることになるだろう。

以上のような『構築』の主題の解明、特に『構築』への新カント派の影響力の大きさの強調という点は、フリードマン以降の『構築』研究者の間では半ば共通認識のようなもの

となっている。問題は、この新カント派の影響の内実である。とりわけ、(i) 新カント派といってもどの新カント派なのか、また、(ii) その影響力はどの程度なのか、といった点が問題となる。これらの点については各論者によって見解が異なる。そして、先にも述べたように、特に近年は、より詳細な文献研究をもとにして、その影響力の大きさを減じる方向へ向かっている。(ii) はカルナップの独自性を測るよいポイントとなるだろうから、こうした方向性は、カルナップの独自性をよりはっきりと強調する流れだと言えるだろう。

フリードマンは、少なくとも上述の90年代の2論文では、(i) の点について明確な区別を設けて論じているとは言えない。ただし、Friedman, 1992/1999の後記(Friedman, 1999, pp. 152–162)において、同論文で(i)に関しルーズであった部分を改めている。同論文では西南学派とマルブルク学派の違いを捉えそこねていた、とこの後記に記している。その違いとは、実在的なものと非実在的なもの(「存在(Sein)」と「成立(Gelten)」、ないし「実在的(real)」と「妥当(gültig)」)の二元性を、西南学派は認めるがマルブルク学派はそうではない、という点である。カルナップ自身はこれらの区別を例によって中立の立場から無効化する(§42)ため、この点でマルブルク学派に近い、ということになる。

(ii) の点については、先に述べたように認識の客観性というテーマ自体には新カント派の強い影響を認めるものの、以下の点においては新カント派から離れ、カルナップ自身による中立主義的な試みの方向性へ向かっていると診断している(Friedman, 1992/1999, pp. 132–140)。まず、1.1節で確認した「实在論的語り」と「観念論的語り」の間での中立性という論点において、「観念論的語り」とは実際には新カント派の立場のことを指しているのであり、このことは少なくとも、カルナップ自身の自覚としては新カント派へコミットしないでいたいことを示している。さらに、1.5.2節で論じたように、实在問題に対するカルナップの態度は、实在論、主観的観念論、現象主義の間で中立的である。そして、この場合の「現象主義」とは(今日の用法と違って)カント主義的な立場を表しているのである³⁹から、このこともまた、新カント派にコミットしないという態度の表明だと言える。また、1.3.5節で導入し、1.4.1節で軽く触れた虚構的構築の言語は、フリードマンによると新カント派の言語のことである。そして、この言語における表現は補助的な役割をもつにすぎないのであって、構成体系の本体は記号言語である。この点もまた、新カント派から距離をとって中立的であろうとしていることを示しているという。特にこの点によって、新カント派のもとでは不可欠であった「超越論的な思考主体」というものが不必要になるという。虚構的構築にはこうした主体の「虚構」が必要だとしても、記号言語による構成にはそうしたものが現れる必要はないのである。

リチャードソンは、(i) の点に関しては、バウフ、ナトルプ、そしてとりわけカッシーラーの影響力の大きさを強調している(Richardson, 1998, Chap. 5)。リチャードソンは、総合的ア・プリオリな判断の可能性というカント的テーマが、19世紀後半以降の論理

学、数学、物理学の発展を経て、どのような類の改訂を要求されたか、といった点を論じたうえで、新カント派、中でもカッシーラーによる総合的ア・プリアリの新たな捉え方に、『構築』の着想の原型を見ようとしている。カッシーラーは、総合的ア・プリアリな判断における直観の役割に代わる働きを、数学や物理学における関数的概念に見てとった。こうした客観的概念によって、伝統的論理学の与える判断内容を超え出た総合的な客観的判断が、純粋数学の領域においても、経験的領域においても可能になるという。そして認識論においては、このような仕方での知識獲得を定式化する論理学（「客観的認識の論理学」）が中心的役割を演じるのであり、存在論的な問いは論理学の問いへ従属しなければならない。ここから、存在論的な中立性が唱えられる。『構築』は、こうしたカッシーラーの考えを基本的に受け継いでいるという。とりわけ、客観性概念の重視、論理学の中心性、存在論的中立性などの点においてである（pp. 138, 183）。他方、『構築』の独自性は、カッシーラーとは異なって論理主義をとること、論理学、数学、物理学におけるテクニカルな手段、そして、中立性をさらに先へ推し進めた末の超越論的観念論の拒否、などの点にあるという（p. 138）。リチャードソンによる(ii)の点の評価は、以上のようなものである。

リチャードソンの著書の筋立ては、以上のような新カント派由来の要素と新カント派的でない要素との混在が『構築』内に緊張関係をもたらし、その後のカルナップの構文論期を誘発している、というものである。大枠においては客観的判断の解明という新カント派的なテーマを維持したまま、その解決にあたって記号論理学の新たな方法論を用い、それに由来する着想をもちこんだことで、新カント派由来の客観性の把握（知識獲得における間主観性としての客観性）と形式論理学に依拠した客観性の把握（純粋に構造的な標示に託される客観性）が、それぞれ、経験科学としての認識論と形式科学としての認識論という、いずれをとっても実現困難な認識論のプログラムを生んでしまったという（Chap. 8）。

2.1.3 科学的哲学としての読解

以上のように、フリードマンとリチャードソンは、『構築』に対する新カント派の伝統のインパクトの大きさを強調しつつも、カルナップの中立主義の実現理念・方法を、その伝統からの離反として捉えている。その後、2000年代以降の研究では、新カント派の影響力はより小さく、中立主義の立場はより重要性を帯びたものとして描かれることが多い。ここではその代表的な例として、ケイラス（Carus, 2007）とピンコック（Pincock, 2005）をとりあげたい。

ケイラスは、手稿や書簡をも含めたカルナップの公刊・未刊文献の網羅的研究をもとに、18世紀以降の啓蒙主義 vs ロマン主義の思想的対立軸のうちで独自の立場を示すものとして、カルナップ哲学を描こうとしている。

ケイラスもまた、カント的伝統から話を始めている。彼によれば、カントの「コペルニクス革命」に関しては、啓蒙主義とロマン主義による正反対の理解が可能であり、それぞれの理解がその後のドイツ哲学の2種類の伝統を形作っているという（Carus, 2007, Chap. 2）。啓蒙主義的理解に従うと、「コペルニクス革命」は科学的・数学的プロジェクトの一環と見なされるが、ロマン主義的理解によれば、それは自然の有機的・擬人的理解への回帰である。前者の伝統では、純粋数学はいかにして可能かという問いに対する答えとしての、ア・プリオリな総合判断の分析、つまり、時間と空間に関する公理を与える直観の働きと、公理から定理への推論における悟性の働きの分析が重視される。後者の伝統では、物自体の原理的な不可知性が強調され、世界についての知識の一部ではないが、この知識の正しい理解にとって本質的であるような概念枠組みの働きが重視される。前者を代表するのは、ヘルムホルツや彼に影響を受けたアヴェナリウス、ファイヒンガー、ランゲら初期の科学的新カント派の面々であり、後者を代表するのはドイツ観念論者や歴史主義者である。他方、新カント派のうちでもマールブルク学派は、両者の伝統を橋渡ししようとしている（そしておそらく西南学派は後者の伝統により近い）。

このうち、ヘルムホルツの見解では、「コペルニクス革命」は次のことをいみしていると解される。すなわち、我々は対象（「物自体」）を直接捉えることはできず、そうした対象の「記号（Zeichen）」としての感覚的な質が、神経系によって生成されるにすぎない。そして、時間的・空間的対象の我々による認識はこの質的素材に制約される。しかし、以下の点で、ヘルムホルツの考えはカントの考えからはっきり離れていく。質的素材の制約があるとはいえ、時間的・空間的対象の認識に至るには多くの規約的選択が可能であることが、当時の幾何学や力学の成果によって明らかになってきた。たとえば、非ユークリッド的な空間もユークリッド的な空間と同様に可能であり、しかも直観不可能ではない。したがって、時間や空間はカントの考えたように直観の純粋な形式ではなく、科学が扱い、発見していく対象なのである。これはつまり、経験の構造はカントが考えたほど経験のうちに「組みこまれている」わけではなく、総合的ア・プリオリな知識などない、ということである。

これに対してマールブルク学派は、啓蒙主義的な伝統を継承して、ヘルムホルツの指摘するような科学的発見のインパクトを重視しつつも、総合的ア・プリオリな知識はないとは考えず、カント的枠組みを保持したまま知性の働きを強化するという道をとった。つまり、時間や空間は直観の純粋な形式ではなくして、悟性のカテゴリーだと考えた。かくして、認識においては知性による構成という側面が強調され、知覚の役割はマージナルなものとなる。形相的自然は質料的自然による制約を離れて、純粋思考に経験的内容を与える働きを担うことになる。この考えのもとでは、哲学とは思考の働きを「超越論的」に解明する分野であり、科学に先行し、科学とは独立の身分をもつと捉えられる。この点でマールブルク学派は観念論的であり、ロマン主義的なカント理解を継承していると言える。

いう。

さて、カルナップはどうかと言うと、彼の場合、啓蒙主義的な傾向のほうがより強いということである⁴⁰。つまり、前節の(i)の点(どの新カント派なのか)で言うと、彼はマールブルク学派よりヘルムホルツらの初期の科学的新カント派に近い立場を継承しているのだという。これはフリードマンやリチャードソンとははっきり異なる捉え方である。ケイラスが初期カルナップをこのようにヘルムホルツの系譜に連ねるのは、カルナップは最初期から一貫して、主観的感覚経験(「直接者(das Unmittelbare)」)とそれに対する理論的扱い(「合理的添加(rationale Zutaten)」)とをはっきり分け、それぞれにはそれぞれの認識上の役割があるとしたうえで、相互の関係を問うていたからである(pp. 122f.)。マールブルク学派の考えでは、前者の認識上の役割は大きく減じられていた⁴¹。理論科学はいかにして可能か(感覚経験から普遍法則へ至ることはいかにして可能か)、そして、科学の理論的言明はいかにして主観的経験と接触をもつのか、という初期カルナップの理論-観察間をめぐるテーマは、科学的新カント派という背景があってこそ出てきたものだというのである(pp. 122f.)。

以上のようにカルナップの受け継いだ伝統を捉えた場合、彼の独自性はどの点にあるのだろうか。これは、今述べたようなテーマの解明方法にある。主観的経験から物理的世界を構築する際、1920年代前半にはフッサールに着想を得た現象学的な考察やハイヒンガーの影響を受けた「虚構」の想定⁴²を試みていたが、1920年代半ば以降、記号論理学的な構造的標示の考えに移行していく。これは、記号論理学に構造主義の具体的な手段を見出そうというアイデアであり、このアイデアにこそカルナップの独自性がある(p. 148)。したがって、ケイラスもまた、伝統的な認識論の問題に形式論理学の手段を用いた点にカルナップの独自性を見ていることになる。

しかし、こうしたカルナップの展開は、カント的な枠組みの力が弱く、科学によりいっそう忠実に寄り添おうとするヘルムホルツ的伝統からすれば、科学の資源をフルにいかすという点において自然なものではあったろう。ケイラスによれば、この展開は、ラッセルの『外部世界に関する我々の知識』(Russell, 1914)をカルナップが読んだことに起因するのであり、とりわけ論理学の役割についてカルナップは、マールブルク学派よりラッセルのほうに近い立場をとっていたという(pp. 143f.)。マールブルク学派によれば論理学は対象生成の機能をもつのであるが、ラッセルによれば、論理学は世界のあり方の可能性を示すものの、世界がどうであるかを示しはしない。それを示すのは科学の仕事である。カルナップもまた、あくまで科学とは独立ではなく、科学の活動を明晰化し、「再構築する」ような仕事として哲学を見ていたのであり、構造主義的な視点はそうした見方から出てきたものだということになるだろう。

ピンコックもまた、『構築』の「科学的哲学」としての側面を強調している(彼によれば、『構築』の「控えめな(reserved)読み」を提示している)。彼の読みで重要なのは、

認識論的でない体系の可能性、特に、1.3.2節で指摘した「唯物論的」体系の可能性である。この体系は、物理的対象を基底にとって心理的対象や精神的対象を構築する体系であり、認識論的な問題から自由である。したがって、認識論的体系と違って、フリードマンやリチャードソンの言う新カント派的な認識論の影響を逃れている。実際、カルナップは最初期から物理学的概念どうしの結びつきを物理学的概念からの構築によって定義しようとしていたのであり、こうした試みは唯物論的体系の下部レベルの構築と見なせる (Pincock, 2005, p. 531)。よって、ピンコックに従えば、カルナップにとって唯物論的体系の構築は「ただの可能性」ではなく、真剣な考察の対象であったということになるだろう⁴³。カルナップにとって最重要なのは知識の相互関係を明晰にし、統合することであって（ケイラス風に言えばその「啓蒙主義的」精神なのであり）、認識論的な知識の統合だけが唯一の統合の仕方ではない。

2.2 『構築』への批判

以上のように、それぞれの解釈者によって『構築』の示す姿は異なる。しかし、どの解釈者にとっても共通了解となっている事柄はある。それは、『構築』が失敗した試みである、という点である。だが、それがどういう失敗であるのかについては、解釈者によって見解が異なる。それがどういう種類の失敗であるかを示すことによって、たとえばクワインやグッドマンのように自らの代案を示し、自らの哲学を展開することができるし、フリードマン以降の解釈者の場合にそうであるように、カルナップ自身の後の展開の内発的な動因を探ることもできる。以下では、『構築』に対して提示された批判のうち、特に有名であり、なおかつテクニカルな争点をもった批判を3つ取り上げる。クワイン、グッドマン、フリードマンによる批判である。

2.2.1 クワインの批判

クワインの批判は、この中でももっともよく知られたものだろう。彼の批判は、物理的対象の構成に対して向けられる。1.4.2節で見たように、視物の構成にあたっては、世界点に対する色の質の帰属が行なわれる。この帰属は一意的ではない。したがって、ここでの構成は、対象の感覚経験への一意的還元理念に反している、とクワインは批判する (Quine, 1953/1961, p. 40; 1969, pp. 76f.)。これは彼にとってみれば根元的還元主義がまさに失敗する地点である。こうして失敗する根元的還元主義はドグマにすぎないのである。経験主義は、分析／総合の区別というもう1つのドグマとともに還元主義のドグマを棄て去り、全体論へと歩みを進めなければならない、ということになるだろう。

2.2.2 グッドマンの批判

グッドマンの批判は、クワインの批判よりは構成においてずっと手前の地点、すなわち、自己心理的対象の構成の段階に向けられる。グッドマンによれば、1.3.3.1節で論じた類似性円による成分分析の手法は、2つの大きな問題を抱える⁴⁴。

1つ目は「仲よし問題 (problem of companionship)」と呼ばれる問題である (Goodman, 1951, pp. 116f.)。これは、ある成分が必ず他の成分とともに現れているときに生じる。たとえば図 2-1 のように、 a から f までの「物」があり、それらが各々の「成分」として黒、白、グレー（斜線で表す）の3色の1色以上をもつとしよう。

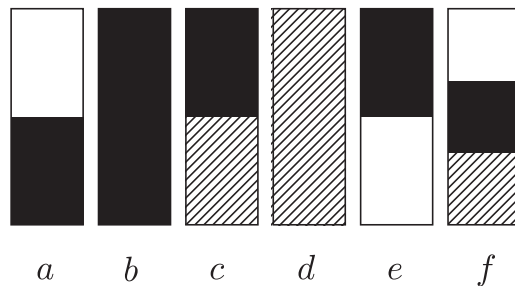


図 2-1 仲よし問題の例

このとき、親色性の関係記述は次のようになるだろう。

$$\begin{aligned} &\{ \langle a, a \rangle, \langle a, b \rangle, \langle a, c \rangle, \langle a, e \rangle, \langle a, f \rangle, \\ &\langle b, a \rangle, \langle b, b \rangle, \langle b, c \rangle, \langle b, e \rangle, \langle b, f \rangle, \\ &\langle c, a \rangle, \langle c, b \rangle, \langle c, c \rangle, \langle c, d \rangle, \langle c, e \rangle, \langle c, f \rangle, \\ &\langle d, c \rangle, \langle d, d \rangle, \langle d, f \rangle, \\ &\langle e, a \rangle, \langle e, b \rangle, \langle e, c \rangle, \langle e, e \rangle, \langle e, f \rangle, \\ &\langle f, a \rangle, \langle f, b \rangle, \langle f, c \rangle, \langle f, d \rangle, \langle f, e \rangle, \langle f, f \rangle \} \end{aligned}$$

グラフで示せば次のようになる。

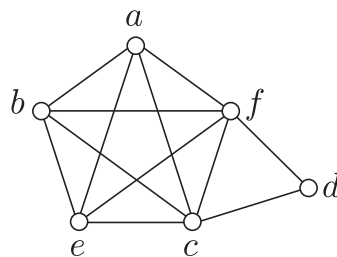


図 2-2 仲よし問題のグラフ

さて、1.3.3.1節と同様にして、この関係記述をもとに、次を満たすクラスとして色クラス

を抽出しよう。(1) ある色クラスのどの2つの要素も互いに親色性関係に立ち、(2) 色クラスは(1)を満たすクラスのうち最大のものである。すると、黒とグレーのクラスは、それぞれ $\{a, b, c, e, f\}$ 、 $\{c, d, f\}$ として抽出できるが、白のクラスは取り出せない。というのも、白の色クラスは $\{a, e, f\}$ であるはずだが、(2)の要件のせいで $\{a, b, c, e, f\}$ から b と c を除外することはできない。これは、白が必ず黒とともに現れているためである。

もう1つは「不揃い団体問題 (problem of imperfect community)」である (Goodman, 1951, pp. 117f.)。これは、成分を共有していないものたちのクラスが成分として取り出されてしまう、という問題である。たとえば、図2-3のような6つの「物」たちがあると

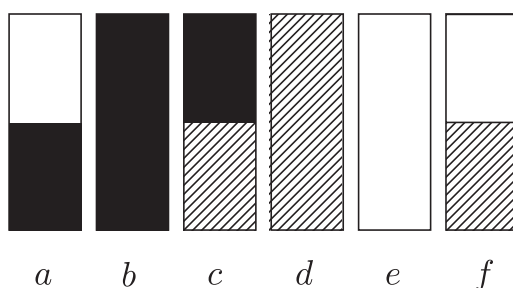


図2-3 不揃い団体問題の例

このとき、親色性の関係記述は次のようになるだろう。

$$\begin{aligned} &\{ \langle a, a \rangle, \langle a, b \rangle, \langle a, c \rangle, \langle a, e \rangle, \langle a, f \rangle, \\ &\quad \langle b, a \rangle, \langle b, b \rangle, \langle b, c \rangle, \\ &\quad \langle c, a \rangle, \langle c, b \rangle, \langle c, c \rangle, \langle c, d \rangle, \langle c, f \rangle, \\ &\quad \langle d, c \rangle, \langle d, d \rangle, \langle d, f \rangle, \\ &\quad \langle e, a \rangle, \langle e, e \rangle, \langle e, f \rangle, \\ &\quad \langle f, a \rangle, \langle f, c \rangle, \langle f, d \rangle, \langle f, e \rangle, \langle f, f \rangle \} \end{aligned}$$

グラフで示せば次のようになる。

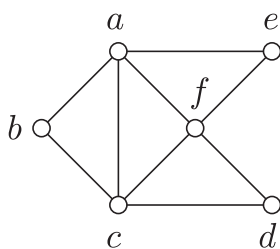


図2-4 不揃い団体問題のグラフ

さて、この関係記述から先の(1)と(2)を満たすクラスを調べると、 $\{a, c, f\}$ は色クラスになる。しかし、図2-3を見ればわかるとおり、これらに共通の色などない。

グッドマンは以上のテクニカルな問題を解決する自らの体系を提示している。この点については第4章で詳しく論じることとする。

2.2.3 フリードマンの批判

フリードマンの批判は、『構築』の構成体系の描写においては最後に現れる部分に対して向けられる。それは1.4.4節で触れた基礎的関係の消去の手続きである。2.1.2節で見たように、フリードマンの『構築』観によれば、客観的認識の解明こそがもっとも重要な課題であり、それは純粋に構造的な標示によって達成されるはずである。この『構築』観のもとでは、『構築』は科学のあらゆる概念を純粋に構造的に標示する使命を帯びているのであり、基礎的関係をも純粋に構造的に標示することは構成の必須項目である (Friedman, 1987/1999, p. 100)。しかし、フリードマンによれば、基礎的関係の構造的標示はうまくいっていないという (pp. 103f.)。それは、この標示が、体験可能な「基盤をもつ」関係に基礎的関係を制限する、という手法に依存しているためである。この制限は実質的に、「自然な」関係を原始的観念として想定するということになる。しかし、この「自然な」関係というのは、(構造的標示が排除するはずの) 直示的關係でなくしてどういう関係なのであろうか。もし、結局のところ直示的關係を想定するほかないのだとしたら、純粋に構造的な標示のプログラムは完遂されずに終わる。あるいはまた、もし「基盤をもつ」というのが直示的關係ではなくしてカルナップが言うように本当に論理的な関係なのだとしても、次のような問題が残る。客観的認識にとっては論理的な構造だけが問題だということになり、経験の役割はそこに見出されなくなってしまふ。すると、経験的知識と論理的・数学的知識の違いはいったい何なのだろうか、という問題が生じることになる⁴⁵。いずれにしても、基礎的関係の構造的標示は問題を抱えることになるだろう⁴⁶。このフリードマンの批判については、第5章で詳しく検討する。

第II部

『構築』の实在論と反实在論

さて、材料は揃った。それを元手に以下で見定めたいのは、实在論 vs 反实在論の問題について『構築』がどのような立場をとっているのかである。第2章で概観したような『構築』解釈の歴史を踏まえた上で、とりわけこのテーマについて実情を正しく見極めたい。そのためには、实在論 vs 反实在論における争点を『構築』のうちにどう読みこむかが重要となる。とりわけ、この論争テーマにおける『構築』の立場の特異性と一般性の両者を明らかにするためにも、他の立場との比較検討を行なうことにしたい。

第3章では『構築』の实在論と反实在論の一般的な特徴づけを正確に与えることを試みる。第4章では、第3章で明らかにされた立場を『現象の構造』におけるグッドマンの立場と比較し、『構築』の立場の特異性と問題点を炙り出したい。最終章である第5章では、パトナムの形而上学的实在論批判を参考に、『構築』の特異性と問題点をさらに特定していく。

第3章

『構築』のさまざまな実在論／反実在論

まず本章では、『構築』解釈史を踏まえた上で、実在論 vs 反実在論のテーマに関して『構築』がどのような立場をとっているかを大まかに確認したい。

この作業が重要であるのは、次のような複雑な事情があるためである。まず、一方で現代分析哲学の実在論 vs 反実在論という議論文脈においては、いまだにクワイン流の経験主義的解釈が支配的であり、昨今の新たな解釈の成果を踏まえた立場が『構築』に帰されていない、という状況がある。他方でカルナップ研究の文脈においては、実在論 vs 反実在論に対して『構築』がどのような立場をとっているかに関して、十分な検討がなされているとは言いがたい。おそらく、このように十分な検討がなされていないのは、それを見定めるのがそれほど簡単なことではないからである。というのも、『構築』のどの面を評価するかに応じて、この議論文脈における立場がさまざまに（場合によっては正反対のものに）定められうるからである。それは、『構築』が自覚的には中立の立場をとったうえで、実のところさまざまな立場に「いい顔をしている」せいでもある。

本章では、以上の事情を踏まえて、実在論 vs 反実在論に関する『構築』のさまざまな側面を正確に捉えたい。まず、3.1 節では分析哲学の伝統的な解釈を簡単に確認する。第 I 部での議論からも明らかなおおりに、これは現在では維持できない解釈である。3.2 節以降は、第 I 部までの議論を踏まえた仕方で新たな解釈を模索する。3.2 節では、『構築』がオフィシャルに標榜している立場である中立主義の立場を検討する。特に、中立性が何と何の間の中立性であると考えられているかを詳細に検討し、そこに潜むアンバランスさを指摘する。3.3 節以降では、このアンバランスさの由来を辿ることによって、中立性が本当に保たれているのかを批判的に吟味する。3.3 節では、このアンバランスさの一因に、構成体系内にイミテーションとして生かされた観念論のアイデアがあることを明らかにする。しかし、これは体系の内部にせいぜいイミテーションとして生かされているアイデ

アにすぎない。続く3.4節では、構成体系内部ではなく、構成体系をメタ的に考察する視点、すなわち構成理論の視点のうちに生かされている、観念論と実在論のアイデアを炙り出す。これらのアイデアがどう生かされているかという点の吟味こそが、『構築』の実在論と反実在論を見きわめる上でもっとも重要である。最後の3.5節では、3.4節で明らかにした立場を現代的な観点から捉えなおす。最終的には、カルナップ自身が思っているほど『構築』は「中立的」ではないことが明らかになるだろう。

3.1 経験主義的反実在論——分析哲学の伝統的解釈

最初に、現代分析哲学の実在論 vs 反実在論の文脈では『構築』にどのような立場が帰されているかを確認したい。そのためにまず、現代の実在論 vs 反実在論の論争においてどのような点が争点となるかを整理しておくことにする。

まず、対象についての実在論については、次の3つのテーゼのすべてが必要である⁴⁷。

- (1) その対象のあり方は我々人間の認識活動とは独立に定まっている（独立性テーゼ）。
- (2) その対象に関する言明は文字どおりに真である（意味論テーゼ）。
- (3) その対象に関する言明の真理は我々人間が知りうる（認識テーゼ）。

特に科学理論が扱う対象についてこれら3つのテーゼを認める立場を「科学実在論」と言う。

また、対象についての実在論とは別に、マイケル・ダメットが重要なテーマとして扱った真理についての実在論がある。これは意味論的実在論とも言われる立場で、当該言明の真理条件と検証可能性条件とは別物だと考える立場である。つまり、ある言明についての検証が不可能だ（我々には知ることができない）としても真理は存在しうる、という立場である。

以上の整理を踏まえた上で、現代分析哲学において『構築』にどのような立場が見定められているかを確認しておこう。この文脈では、いまだに2.1.1節で見たようなクワイン流の経験主義的解釈がベースになっている。言語哲学、認識論、存在論上のテーマの結びつきから、『構築』の立場は次のように定められる。

論理実証主義の代表格として『構築』が取り上げられるとき、まずもってその言語哲学上の立場が最重要とされる。それは検証原理（verification principle）と呼ばれる原理を奉じる立場（検証主義）で、この原理をもって有意味な言明はどのような言明かという問いに答えようとしているのだという。検証原理によると、有意味な言明とは、その真偽を経験的に確かめられうる（検証が可能な）言明だという。そして、形而上学の言明はこの原理に反しているのだから無意味なおしゃべりでしかなく、ハイデガーは有害無益なおしゃべりをしているにすぎない、というわけである。

さらに、この検証主義は、還元主義の形態をとる点に特徴がある。つまり、ある種類の特権的な言明があり、あらゆる言明の真偽は、それら特権的言明の真偽へ還元されることによって確かめられるのだという。この特権的言明とは具体的には、感覚的所与に関する言明である。そして、それらが特権的であるのは、認識論上もっとも確実にその真偽を確かめられうるからである⁴⁸。

こうした還元主義的検証主義は、次のようないみで、存在論的には反実在論の立場に立つとされる。まず、意味論的な点で言えば、真理条件を検証条件と一致させることによって、証拠超越的な真理の概念を、したがって、実在論的な真理の概念を拒否している。そのため、『構築』は意味論的反実在論の立場に立つ。また、科学的実在論に対立する点で言えば、理論的言明の真理を「特権的」言明の真理に還元することによって説明することから、理論的言明は「文字どおりに」真であるとは言えなくなる。科学的実在論の意味論テーゼを拒否する、ということである。こうして『構築』は、科学的反実在論の立場に立つ。他方で『構築』は、独立性テーゼに関しては科学的実在論と同じ側に立って擁護する。このテーゼを守るという点では、それを拒否する観念論（カルナップの用語では「主観的観念論」（1.5.2節））と対立するという⁴⁹。

このような旧来の『構築』観ベースの反実在論がいまだに『構築』に見定められている最大の理由は、近年のカルナップ研究をもってしても、この文脈で『構築』がどのような立場をとっているのか見極めるのがなかなか難しいからである。そのことは、次のように、論者によってまったく別種の見方が示されていることからわかる。まず、フリードマンは中立的な立場を強調している。

『構築』のカルナップは、実在論と観念論の間の伝統的な形而上学的論争にはまったく無関心である。逆に彼は、相当な創意工夫と哲学的想像力を働かせて、これらの立場のうちでも正しく、論争を招かないと自らの見なす事柄を捉えるような——つまり、それらが適切な境界を超えない限りで——それらの合理的再構築を練り上げているのである。そしてとりわけ、両者に共通の「中立的基盤」を捉えることによって、構成体系は、それらの疑う余地のない意義と有用性を「話法」として説明しつつも、実りのない形而上学的論争の可能性をいっさい消滅させるのである。(Friedman, 2007, p. 150)

それに対して、ケイラスはカルナップを実在論者として特徴づけている。

マイケル・ダメットの言ういみでマールブルク学派は「反実在論的」であり——言説領域中の対象について排中律を拒否し——フレーゲは「実在論的」である。この点では、若きカルナップはフレーゲ的だった。(Carus, 2007, p. 101)

逆にコッファは、『構築』に反実在論を見ているようだ。

実在論者にとってみると、そうした実在言明へ至るあらゆる道筋を越えたところに、それら言明に内容を与える何かが存在する。こうした何かをカルナップは認めない。[カルナップにとってみれば、] 実在言明は、実在論者であれば単に確証に関わるもの、ないしその真理へのルートにすぎないと見なすであろう状況によって、完全に決定されているのである。(Coffa, 1991, p. 237)

このように『構築』には、論者により文脈により、実在論、反実在論、中立主義の完全に異なる立場が帰されている。以下では、このような状況を整理し、カルナップの立場を正確に定めることを試みる。結論から先に述べておけば、上記3つの見方はどれもそれ相応のもっともらしさをもっている。それらを適切に位置づければ、どれも『構築』の何らかの側面として見ることができる、ということである。しかし、もっと重要なことは、これらのうちでも『構築』に帰すべきもっとも根本的な立場がある、ということだ。

3.2 中立主義—オフィシャルな構成理論の哲学

カルナップのオフィシャルな見解では、彼自身は実在論 vs 反実在論の論争において中立の立場である。先のフリードマンの引用は、カルナップ自身によって申し立てられたこの立場を、そのまま好意的にカルナップに帰している。まず本節では、この「中立」とはどのようないみで言われているかを明らかにしておきたい。

オフィシャルな見解において、中立性は次のような観点・立場の間に関して言い立てられている。まず、フリードマンの指摘する(2.1.2節)ような中立性、すなわち、(a)「実在論的語り」vs「観念論的語り」(対象 vs 概念、端的な認識 vs 思考における生成)の点での中立性(1.1節)、(b) 実在論的言語と虚構的構築の言語の間での中立性(1.3.5節)、(c) 形而上学的問題としての実在問題に対するさまざまな立場の間での中立性(1.5.2節)である。また、これもまたフリードマンが指摘しているところではあるが、ピンコックが強調した点として、(d) 認識論的体系 vs 唯物論的体系の間での中立性(1.3.2節)という論点もある。

以上を大雑把に括れば、実在論 vs 観念論(特に新カント派的な観念論)という形での対立にこそ、カルナップは自覚的に関わっていたと言える。これは時代背景として当然と言えば当然である。すると、ここでの実在論争上のテーマとは、実在論が実在すると言う存在者のあり方は人間の認識から独立して決まっているのかという、独立性テーゼをめぐるものであることになるだろう。この点は1.5.2節で確認したカルナップ自身による実在問題の説明からも明らかである。

するとカルナップは、独立性テーゼに関して中立の立場をとろうとしていたことになる。しかし、(a)-(d)のそれぞれにおいて、「中立」の内実は異なる。フリードマンの指摘

する (a)–(c) の点は、次のようなことからくる中立性だと考えられる。すなわち、構成体系は客観的であり、客観的であることは構成体系にすべて尽くされているのだから、それ以外の「哲学のおしゃべり」は主観的であるにすぎず、科学的な価値をもたない。それに対して (d) は、体系外の哲学的主張からの中立性だけを言っているのではなく、体系選択の間での中立性をも述べている。ただし、この場合も体系構築の客観性が前提となっており、きちんとした構成が行なわれている限りは、現象主義的体系だろうが唯物論的体系だろうがかまわない、ということである。

さらに、次の点を指摘したい。すなわち、中立の立場を向けると言われている対立項どうしは、一見して不釣り合いな2つの項として並んでいる場合がある、という点だ。

たとえば、(b) の点ではいったい何と何が対立しているのか。实在論的言語というのは、「实在論的」と銘打たれていながら、実のところ普通の日常言語的な言い回しであり、特段哲学的な立場を代表するような言葉使いにはなっていない。これは科学でも普通に使うような表現への置き換えにすぎないのである。他方で虚構的構築の言語のほうは、極端に人為的な状況に認識主体を放りこみ、その中で構成とパラレルな操作を行なわせる、という状況を説明するものであり、きわめて強い哲学的バイアスのかかった翻訳になっている。

また、これに関わることだが、实在論的言語への翻訳が普通のいみで「翻訳」と呼べるものであるのに対して、虚構的構築の言語への翻訳はそういう翻訳にはなっていない。前者の場合、記号言語で表現された定義に対して、その定義の意図が伝わる表現で置き換え、いわばその「意中の解釈」を日常言語で言い直している。これは、ただのパラフレーズでは使えない（たとえば、後に定義されるために厳密には当該の段階では使えない）インフォーマルな表現を導入する、といういみにおいて、別の表現を導入する、という色合いが強い。ただし、こうした表現を導入することによって、本来は構成された後に初めて存在すると言えるような存在者について、その存在をあらかじめ想定することになるので、「实在論的」と言ってよいような観点を導入することにもなる。他方で後者の場合、構成を架空の主体に行なわせるための指令を与えているのであって、同じ内容を別の言い方で「言い換えた」だけとは言いがたい。これは内容を固定したまま別の表現によって表すというよりは、ある特殊な状況を設定して、構成の内容に特殊な解釈を加えているのである。これはただの「言い回し」の問題ではなく、したがって、これをただの別の「言語」への翻訳と言うのは不正確である。

さらに、次のようなことも言える。实在論的言語を用いることが仮に何らかのいみで「实在論」をとることにつながりやすいのだとしても、その場合の「实在論」とは、構成のどの段階についてその言語を用いるかによって立場がまったく異なってくる。たとえば、自己心理的対象について实在論的言語を用いるなら、それは自己心理的対象についての实在論であり、これは唯物論を排除する。物理的対象について用いるなら、それは物理的対象についての实在論であり、これは現象主義を排除する。他方で、虚構的構築の言語の場

合、それを構成のどの段階について用いようとも、結局のところは新カント派的な解釈を代表しているにすぎない。このアンバランスさは (a) についても同様に言える。

さらにもう1つ、実在論的言語は唯物論的体系における定義の翻訳にも使えるだろうが、虚構的構築の言語が使えるとは思われない、という違いがある。これはもちろん、前者はただの言い換えだが後者はそうではない、という点に関わっている。虚構的構築の言語は、自らの要素体験間の類似性回顧の関係だけを前提にして、後は指令に従って認識を行なう、という個人的認識の再構築を目標としている。つまり、虚構的構築の言語は認識論的体系の翻訳に特化された言語である、ということである。

このことから考えられるのは、唯物論的体系においては、(a) や (b) のような認識論的違いに関する中立性は特に示されないのではないのか、ということである。他方で、(c) の中立性は体系の違いに関わらず捉えられそうである。何が実在的で何が実在的でないかは、唯物論的体系でも示されうるだろう⁵⁰。このことは次の点と関わっているだろう。すなわち、(c) がそれについて中立的だと言っている対立軸は、(a) や (b) の場合の実在論 vs 観念論ではなく、むしろ (a) や (b) の場合の「実在論」の内部での細かい対立である。それは、主観的観念、独我論、現象主義、そして狭義の実在論（物理的対象と他者心理的対象についての実在論）の間の対立である。

さらに、(c) の中立性が (a) や (b) と根本的に異なるのは、構成体系に示される実在性とそうでない実在性を分けている、という点である。(a) や (b) の中立性を主張する場合は、哲学的立場の違いは構成体系の読みの部分に出るにすぎない、というスタンスだった。他方、(c) の場合、一方に構成体系における構成に示される哲学的概念があり、他方にそうではない形而上学的概念がある、ということになっている。これはたとえば、志向的關係や因果関係などの哲学的概念についても、構成的に解明されるものと形而上学的なものが区別される（1.5.1 節）のと同様である。このような (a)・(b) と (c) の違いは、次のようなさらなる違いをも生んでいる。(a)・(b) の場合（特に (b) の場合）、構成体系外に哲学的立場に語りの場を与えている（そうした立場のいわば「再現」を積極的にしている）のに対して、(c) の場合、構成体系から外れる哲学的主張については端的に排斥している。

以上をまとめると、次のように言える。まず、認識論的体系であれ唯物論的体系であれ、およそ構成体系一般について言えることは、個々の構成について、構成されてはじめてその存在に言及できるような存在者の存在をあらかじめ想定するような言い換えが可能であり、そのような言い換えは実在論的な語り方に対応している、ということである。それに対して、認識論的体系についてのみ、その構成手続きをきわめて特殊な状況下で説明することが許されている唯一の哲学的言語がある。それは新カント派的な虚構的構築の言語である。また、前者の語り方を実体化して形而上学的な実在性の観念を練り上げようとする立場に対しては、構成体系に示されうるような実在性の概念をぶつけ、それらを排除する。

このようにカルナップの中立主義は、奇妙な、あまり安定しないバランスの上に申し立てられている。そこで以下で問いたいのは、次の点である。なぜこのような妙なバランスになってしまっているのか。そして、この妙なバランスのせいで、中立主義は徹底できなくなってしまうてはいないのか。これら問いに答えるためには、中立主義のアイデアがどういう経緯で生み出されてきたかを考える必要がある。

3.3 観念論——認識論的構成体系の哲学

まず、中立性の (b) の論点、すなわち、实在論的言語と虚構的構築の言語の間での中立性、という点から考察したい。前節で述べたようないみで虚構的構築の言語が特権的な地位を占めているのは、フリードマン以降の解釈者たちが主張するように、『構築』のプログラムがそもそも、新カント派的な認識論から出発しているからであると考えられる。虚構的構築の言語が示そうとするのは、主観的でしかない体験から出発しながらも、形式的な規則にだけ従うことによって、我々はいかにして客観的な認識に到達するのか、という点であった。よって、この言語への翻訳によって示したいことは、主観的体験から客観的認識へという新カント派的なテーマだと言える。カルナップは、構成的言語における定義がそうしたテーマにも役立つ、ということ、この言語において示そうとしている。

『構築』の認識論的体系において、どのような出発点がどういう観点で選ばれ、その後の対象はどういう順序で並ぶとされているか、といった点に関しては、この言語で翻訳されるようなテーマを見るのがふさわしい。認識論的体系では、認識上の優先性を反映するように構成が行なわれるということだった。認識上の優先性を反映しているとは、1.3.2 節で見たように、認識における順序（標識の関係）を反映している、ということである。では、認識の順序を保存する仕方で還元を行なうことには、どういういみがあるのか。ここで思い起こすべきは、還元や構成がどういう手段として用いられていたかである。カルナップは、対象規定から主観的要素を徹底的に排除するため、純粹に構造的な標示を構成に課している（1.2 節）。とりわけ認識論的な体系においては、認識の順序から言って、自己心理的对象から出発することになるわけだが、その場合、とりわけ次の点において、構造的標示の手法は重要である。まず、この構成手段によって、自己心理的对象という主観的な対象から出発しても、客観的な性質（構造）を取り出すことが保証される（1.3.3 節）。さらに、その客観的性質をもとに、最終的には間主観的な世界へと到達できる（1.4.3 節）。このようにして、主観的对象から出発して間主観的世界へと至るという認識の過程が客観的に示されることになるわけである。この場合、基底である自己心理的对象は確実であるというポジティブな評価を受けるのではなく、主観的というむしろネガティブな評価をもって出発点に置かれている。新カント派的な『構築』観では、このような主観性から客観性への移行が還元・構成のキモだと見なされる（2.1.2 節）。

こうして、認識論的体系においては新カント派的認識論のエッセンスが捉えられる。そして、対象は構成されるものだという種類の観念論のエッセンスもまた、ここで捉えられることになる。その際、構造的標示の働きが重要になる。特に認識論的体系においては、構造的標示は、1.3.3節で述べたようないみでの客観性の獲得手段だと見なされている。すなわち、自己心理的对象という対象種に特有の主観性を逃れ、客観性を獲得するということである。この点は虚構的構築の言語において語られるストーリーと一致する。この言語においては、被験者にしかわからない類似性回顧のリストから出発しつつも、それらの形式的性質にだけ基づく指令が体系構築者によって彼女に与えられ、彼女がそれらをこなすことによって客観的な認識が得られるというのである。

3.4 実在論＋観念論——構成理論の哲学

では、実在論のほうはどのようなのだろうか。実在論とはどこを共有し、実在論のどこを切り捨てるのか。

先に観念論との比較において、純粋に構造的な標示によって対象の主観性は乗り越えられると述べた。しかし、もともと構造主義が「主観的」として切り捨てていたのは、このような類の主観性ではない。たとえば、弱い構造主義であれば性質や連関の具体的内容が、強い構造主義であれば直示が主観的であるとされ、それぞれ構造と標示によって置き換えられるべきだとされていた(1.2節)。実は、構造主義本来のこの側面こそが、実在論についての上記の問いと関わっている。

まずは強い構造主義の論点から考えてみよう。直示よりも標示が、そして標示の中でも構造的な標示が、そして構造的な標示の中でも純粋に構造的な標示が優れていると見なされるのは、そちらのほうは客観的だからである。この並びからいくと、ただの直示はもっとも主観的であることになる。しかしこの主観性は、表される対象の種類に由来する主観性ではない。この主観性は、対象を同定する手段の主観性であり、同定される対象が主観的であるかどうかには本来関わりがない。

直示と標示の区別はラッセルの見知りによる知識と記述による知識の区別に着想を得たものであろうが、その内実は両者においてかなり異なる。ラッセルの場合、ある対象についての記述による知識は、記述理論の分析によって、判断の要素としてその対象自身を含まないとされるのに対し、当の対象の見知りによる知識はそれを含む(Russell, 1917, pp. 231f.)。したがって当然、見知りによる知識のほうはその対象についての知識として重要である。他方、カルナップの場合、逆に、直示より標示のほうが重要である。

また、ラッセルの場合、意味の一元論を維持して、いかにして単称名の意味をその指示する対象として説明できるかが大事になる。アキレス腱は指示対象の存在しない単称名の問題だが、それが生じる余地のある確定記述については(また、最終的には通常の固有

名も) 記述理論によって不完全記号として処理する。上記のような見知りによる知識と記述による知識の違いは、こうした言語哲学的考察と合致している。他方、カルナップの場合、ある表現の指示 (Bedeutung) をいかにして規定するかが肝腎である。彼の場合、表現の指示が存在することは前提としたうえで、そこへ至るルートをどうやって与えるかがポイントとなっている。これは、直示だけによることもあれば、標示によることもある。しかし、前者は主観的であてにならないので、後者を重視し、また、後者のうちでも直示的要素を排除することを目指す。

カルナップの場合、表現の意味とは何か、あるいは、表現の意味を知ることとは何か、といった点よりも、対象をどういう表現で規定できるか、といった点のほうが重要である。彼にとっては後者のほうが大事であるために、指示と意義の概念についてフレーゲとはまったく違った規定が与えられ、しかも、そのせいでさまざまなところに混乱が生じることになった。カルナップの言う表現の意義は、その表現の心理的内容のことであった (1.3.1 節)。しかし、より正確に言うならば、これは表現の指示のもたらず心理的内容のことだと考えたほうがしっくりくる。カルナップは、構造に対比される語として「素材 (Material)」という語を用いる (§§16, 66)。我々によって認識される対象には、客観的な構造とは別に主観的な素材がある、という区別を行なうためである。このとき念頭に置かれているのは構造記述とそうではない記述 (たとえば通常の連関記述や性質記述) (1.2 節) であり、前者は構造を、後者は素材を規定していると見なされている。こうした言い回しから、認識対象を知覚した際に想起される主観的内容を通常の記述は記し、認識対象の客観的構造を構造記述は記す、ということが示唆される。そして、通常の連関記述では「連関的内容的意義 (inhaltlicher Sinn)」が用いられるという説明の仕方 (§11) からすると、この意義なる概念は、認識対象によって喚起される心理的内容と捉えるのがよいように思われる。さらに、通常の連関記述や性質記述の場合、グラフや集合による構造記述とは違って、連関や性質に内部をもたない個々の語が割りあてられているだけである。このような語の割りあては単に心理的内容によってしか認識対象 (この場合、連関や性質) を規定できていないことに対応しており、他方、構造記述のほうは、構造によって認識対象を規定できていることが示されている。かくして、対象をどういう表現で規定するかによって、対象をその意義によって規定したか構造によって規定したかが表されている、と考えられる。

この観察が正しいとしたら、対象規定には意義によるルートと構造によるルートがあることになる。そして、前者は (広いいみでの) 直示に、後者は純粹に構造的な標示にあたるものと考えられる。すると、標示から直示的要素を排除して純粹に構造的な標示に到達するという作業は、次のようなことにあたるものと言い換えられうる。標示は直示と異なり、記述を用いて対象を規定する。このうち、構造記述ではない記述、すなわち、性質記述や通常の連関記述によって対象を規定する場合、性質や連関の「内容的意義」が規定に

用いられる。たとえば、「日本で人口最大の都市」という確定記述によって標示を行なう場合、「都市」の意義を用いることになる。他方で、この例の「日本」のように、対象を表す表現に関しても、単にその意義が用いられている。こうした場合、これらの性質や対象が狭義の直示によって規定されることが含意されるわけではないものの、それら性質や対象との単なる主観的な心理的結びつきしか示していない点で、「直示的要素が残っている」と言ってよいだろう。たとえば次のような言い回しは、この点を示唆している。

構造ではなく素材 (Materialen) に属するもの、すなわち、具体的に直示されることはすべて、結局のところ主観的である。(§16)

このように、カルナップの純粋に構造的な標示の考え方とは、ただの主観的な規定を排除していくもので、それは言語的には、心理的内容以外に対象規定の方法を示唆しない表現を構造記述に置き換えることをいみする。この作業は、構成体系の構築においては実在論的言語から構成の形式言語への変換をいみしている。2.3 節で確認したように、構成は基本的に、経験科学が見出した事態どうしの関係をもとにするのであるから、経験科学においてどのような関係が発見されているかを見定めねばならない。この作業のうちでは、たとえば心理的对象の構成にあたっては心理学的な言語実践が参照される。また、物理的对象なら物理学の言語実践が、精神的対象なら精神科学の言語実践が、というように、当該科学における言語実践が参照される。しかし、こうした言語実践はいまだ対象との心理的結びつきしか示唆しない表現に溢れている。構成体系を構築するというのは、こうした表現に溢れた実在論的言語の語り方を参照にして事態の成立条件を探り、それをもとに構造記述を見つけて、構成の形式言語で対象規定のための表現を厳密に行なう、という仕事なのである。

こうして純粋に構造的な標示のアイデアは、一方では観念論のアイデアを生かしつつ、他方では実在論的な対象規定の手段を乗り越える。しかし、このように言ってしまうと、カルナップの中立の立場は崩れ、観念論を支持して実在論は棄却しているようにも思える。だが、実際にはそうではない。というのも、すでに論じたように、もともと観念論的なアイデアのもとで乗り越えられるべきとされていた主観性と、実在論的立場の難点として棄て去られるべき主観性とは、同じ種類の主観性ではないからだ。カルナップは、主観性から客観性を獲得するための方法として形式による構成を選ぶという点では観念論と一致する。しかし、構成理論のうちで見た場合、観念論の言っている主観性とは対象の種類が主観的であるということにすぎない。他方でカルナップ自身が排除すべきと見なす主観性とは、対象を規定する手段の主観性なのである。

この違いをわかりやすくするのは、純粋に構造的な標示のアイデアは、認識論的体系の構築に特化されたものではない、という点である。どんな体系であれ対象規定は必要であり、その際、実在論的言語による規定に代わる客観的な規定手段として純粋に構造的な標

示が要請されるのである。これは、虚構的構築の言語と違って実在論的言語への翻訳が唯物論的体系でも可能だ、という3.2節の論点に関わる。認識論的体系は、客観的な対象規定が、主観的感覚から客観的認識へ、という元来の新カント派的な認識論を実現する順序を守って行なわれている点で、特異なのである。こうして、カルナップの純粹に構造的な標示のアイデアは、形式による構成という点では観念論とアイデアを共有しつつも、3.2節の(d)認識論的体系 vs 唯物論的体系の間での中立性を主張する、という点で特に、観念論から離れていくのである。また、紛らわしいが、同節(a)の「実在論的語り」vs「観念論的語り」の対立軸における「観念論的語り」は、手段についての語りだと考える必要がある。この対立軸もまた、(b)実在論的言語 vs 虚構的構築の言語の対立軸とは違って、認識論的体系にだけ特異な対立軸ではないからである。

では、実在論のほうはどうなのだろうか。実在論は単に棄却されているのではないのか。確かに、今まで出てきた論点においては、実在論は擁護されていない。しかし、実在論において主観的だとされているのは単に、その対象規定の手段にすぎない、という見方も可能である。カルナップが相手にしている実在論とは本来、独立性テーゼを認めるかどうかを争っていたのではないのか。つまり、どうやって認識するかではなくて、何が存在するのか、という点を争っていたのではないのか。この重要な論争テーマにおいて、カルナップは実在論に大きく譲歩していると思われる。

カルナップの方法は、次の点で存在論的に両義的である。一方で、主観的对象からの構成においては、対象（というか関係）のもつ構造をもとに、さまざまな対象が構成されていく。この構成を字義通りにとれば、出発点の対象だけが存在し、他の対象はそれらからの構成にすぎない、と主張されうる。他方で、主観的手段を客観的手段に置き換えるといういみにおいては、実在論的言語による表現はすべて出発点の対象から構造だけに従って定義を行なった表現に置き換えられる。これは向きとしては還元をいみしているが、単に手段を得るための還元であるので、実在論的言語で表現されていたそれぞれの対象が感覚的对象へと還元されてしまうわけではない。『構築』の還元主義はしたがって、根本においては手段の還元主義と捉えるべきである。

この両義性は、次のように考えれば一応無害である。基礎的对象の領域を前提すると、構成体系において実際に構成されているのは、基礎的对象のクラス、そのクラス、そのまたクラス、というように、タイプの階層を上昇していくクラスたちであり、このタイプの階層さえ認めれば、基礎的对象の領域の存在者以外は認められない。他方で、対象規定の手段として構成体系を見た場合、対象を規定するために用いられる表現が構成的言語における定義の表現なのであり、それらを通じて、単に基礎的関係の構成ではないような各対象そのものが規定されている。先に述べたとおり、カルナップが主に関心をもっているのは、対象を規定する表現を探ることである。そして、客観的な規定には純粹に構造的な標示の表現が必要とされる。ところで、純粹に構造的な標示というのは、対象そのものでは

なく、その形式を指示としていると考えることができる。その指示こそが、基礎的關係から構成されたあるクラスである。そして、このクラスを通じて、規定しなかった対象が規定されるのである。3.2節の(d)の中立性、つまり、現象主義的体系と唯物論的体系の間での中立性もこうした点から説明できる。両体系を認めても存在論的に齟齬が生じないのは、各体系は対象を規定する手段を与えているにすぎない、と考えられるからではないだろうか。

このように、純粋に構造的な標示のアイデアは、新カント派的なアイデアをもちつつも、同時に次の点できわめて実在論的でもある。科学において扱われるどんな対象であれ、まずはその対象が構成に先立って存在することは前提とされ、構成においては、それに至るまでのルートがちゃんとしているかどうかだけを問うている。もっと言えば、カルナップのこの立場は、爆発的実在論につながりうる。ペガサスであれ幻覚の対象であれ、それらは精神的対象や自己心理的対象としては「存在」していることになるだろう。この爆発にブレーキをかけるのが、先に論じた構成体系に示される実在性の概念（経験的な実在性概念）である。これによって、構成体系で構成されたもののうちでも、実在的なものとそうでないものが区別できる⁵¹。いわば、その対象を規定するルートの種類によって区別を行なうということである。

3.5 実在論＋反実在論——現代的論争での位置どり

以上からわかるのは、『構築』は少なくとも独立性テーゼをめぐるでは実在論に大きく譲歩しているのではないか、ということである。では、3.1節に挙げた他のテーゼをめぐるではどうなのだろうか。『構築』の立場を、現代的な観点からさらにはっきりさせておこう。現代的な実在論 vs 反実在論の論争において、『構築』の立場にはどのような位置づけを与えられるだろうか。どのへんに『構築』の独自性があるのか。また、どのへんにこれまでの『構築』理解の誤りはあったのか。

まず確認しておきたいのは、3.1節にまとめた経験主義的反実在論は『構築』に認められるのか、という点である。純粋に構造的な標示のアイデアが新カント派由来であることを繰り返し指摘していることからわかるとおり、従来の経験主義的な解釈を『構築』に施すことが不可能なのは明白である。たとえば、認識論的体系における「認識論上の優先性」を「認識論的に確実」と見なすことはできない。第1章での概略からもわかるとおり、実際に『構築』には、確実性に関する議論はいっさい現れない⁵²。先述のとおり、「認識論上優先的」であるとは、認識の順序のことを言っているにすぎない。そして、この順序でいくと、出発点はむしろネガティブな評価を受けるのである。

したがって、経験主義的な読みに基づいた反実在論（意味論的反実在論や科学的反実在論）を『構築』に帰すことはできない。しかし、経験主義的な根拠とは別の根拠に基づい

て、意味論的反実在論や科学的反実在論を『構築』がとっているかどうかは興味ある話題であろう。

『構築』が独立性テーゼをとっていることは先に述べた。したがって、科学的実在論の1つのテーゼは支持していることになるだろう（何しろ、科学の扱うあらゆる対象の独立性は認めてよいのだから）。では、科学的実在論の他のテーゼ、つまり、意味論テーゼと認識テーゼはどうだろうか。3.1節でも述べたとおり、従来の解釈では『構築』は意味論テーゼを拒否するものとされる。この解釈はむしろ経験主義に基づくものだから不当である。だが、3.4節での解釈に基づいた場合にはどうなのか。

意味論テーゼの言いたいところを吟味してみよう。通常、還元主義的な経験主義者が意味論テーゼを拒否すると言う場合、彼らは理論言明の真理を観察言明の真理へと還元するために、彼らのもとでは、理論言明はそれが本来述べている事柄に従って真なのではなく、観察言明の真理によって間接的に真になるにすぎない、ということがいみされている。理論言明を真にするもの（truthmaker）には理論名辞の表す理論的对象は含まれず、それを真にするものは観察言明の表す事態にすぎない、ということである。このように、意味論テーゼで意図されているのは、理論言明を真にするものは理論言明中の表現が表す事態である、ということだ。

このテーゼに対して『構築』のカルナップはどのような態度をとっているだろうか。『構築』も還元・構成を行なう以上は、すべての言明は「文字どおりに真」でありうる、とは言えないように思われる。言明に現れる名辞はすべて、基礎的对象についての名辞へと還元されるので、あらゆる言明の真理は基礎的对象についての言明の真理に還元されるのではないか。すると、『構築』もまた意味論テーゼを放棄していると言えるのではないか。

ところで、前節で論じたように、こうした還元は対象規定の手段の提示と見なすことができる。還元は対象へと至る手段を示しているとするれば、こうした真理の還元は一種の検証条件を定めていると見なせるだろう。すると、『構築』は意味論テーゼを放棄しており、しかも『構築』の還元は検証条件の提示となっているのだろうか。これらの点が正しいとしたら、還元主義的経験主義と『構築』の立場の間に違いが見えない。というよりむしろ、親和性すら見てとれるだろう。

しかし、こうした親和性は見かけ上のものであり、以上の考え方は『構築』の立場に関して誤った定式化を含んでいる。『構築』の場合、還元は対象規定の手段の提示である。そのことのいみは、前節で論じたように、自存的な対象たちからなる世界は前提されたうえで、それら対象へと至る手段を提示している、ということである。もちろん、還元主義的経験主義の場合でも独立性テーゼが成り立っているとすれば⁵³、経験主義のもとでもそうした世界は前提となりうる。しかし、還元主義的経験主義の場合、それら対象の多く（特に理論的对象）は直接経験の間の関係の言い換えにすぎないため、結局のところ、それら対象についての言明の真理条件とはそれらの検証条件にすぎない、ということになる。

直接経験できない対象については、経験とリンクさせることによってはじめて真偽が問えるわけである。この場合、まず世界があって、そこへ至るルートが確保される、という仕方にはなっていない。他方、『構築』の場合、こうした仕方で還元が行なわれる。『構築』の場合、還元はこうしたルートを、しかも、その客観的なルートを確保するのである。そして、その客観的なルートとは、構造に従ったルートなのだった。また、こうしたルートの確保は、経験主義の場合のように理論的对象だけについて問題になるのではなく、あらゆる対象について問題になる。

さて、ここできわめて重要なのは、次の点である。すなわち、前節でも述べたように、還元は単にルートを示しているだけとも言える、ということだ。還元においては対象そのものが別の対象に還元されてしまうのではなく、単に対象規定の客観的な手段が還元によって示されるにすぎない。1.3.2節で確認したように、構成においてはまず、実在論的言語で表される「事態」なるもの間の関係を定める必要があった。構成とはその関係の形式的な条件を定めることであり、これこそが客観的な対象規定なのである。この事態の把握から構成への流れは、対象の主観的規定を参照したうえで、客観的な規定へと移行していく過程である。そして、この移行において前提されているのは、どちらの規定でも同じ対象が扱われつづけている、ということである。対象そのものが還元されるわけではない、というのはこういうことをいみしている。

この移行過程において示唆される1つの見方は、次のものである。実在論的言語は、事態の個々の要素に対応する表現をもつ。それら表現はいわば、事態の要素に「貼りついて」いる。このような貼りつきは、規定の手段が主観的であることの表れである。しかし他方で、実在論的言語においては個々の表現に対応的な仕方でそれを真にする事態が示されているとも言える。その事態へと至るルートを構成的言語が確保しているにすぎない。実在論的言語で表される事態をヒントとして構成へ至る過程において、客観的に取り出されない対象は「見捨てられて」いくことだろう。しかしそれはあくまで、その対象へ至るルートが客観的に確保されないから構成されえないだけであって、もしかしたら存在しているという可能性は残されている。

以上のことから、次のように言えるのではないだろうか。実在論的言語は、意味論テーゼを維持するような真理条件を与えている。他方、構成的言語は、真理条件ではなく、言明の検証条件を与えている、と。すると、一見『構築』は意味論テーゼを放棄しているように見えて、実はそれを維持しているのではないか、という見方ができる。また、さらに重要なことには、このように真理条件と検証条件が別物として捉えられることから、意味論的な実在論も維持していると考えられるのではないだろうか⁵⁴。

この考えの筋道が正しければ、『構築』の立場は実はさまざまな点で大きく実在論に傾いていると言えるだろう。しかし、『構築』は認識論において反実在論的な側面をもっている。それは、現代的概念整理で言えば認識テーゼに関わる論点である。『構築』におい

ては、純粹に構造的に標示されえないものは客観的に認識されない、ということになっている。したがって、科学の扱うあらゆる対象について認識テーゼを擁護するわけではない。ただし、このテーゼの放棄はある種類の対象について全面的に言い立てられるわけではない、という点に注意が必要である。たとえば、物理学の理論的言明のすべてについて、それらの真理は認識可能ではない、などということは決して言わない。どんな種類の対象であっても、個別の対象について、構成できれば認識できるのであり、構成できなければ認識できない、ということになる。

カルナップの立場は、このように、分析哲学の伝統において見定められている立場とはずいぶん違った立場だと言える。考えられているよりははるかに大きく実在論に傾いている。次章以降では、このような『構築』の立場の特殊性と一般性、問題点を考えるために、2つの比較対象事例を取り上げる。グッドマンの『現象の構造』（第4章）とパトナムの形而上学的実在論批判（第5章）である。前者は『構築』のプロジェクトを引き継ぐものでありながら、『構築』よりはるかに強く反実在論的な側面をもっている。こうした実在論に関するスタンスの違いがどのようなプロジェクトの見方の違いをもたらしているか、また、プロジェクトに生じる問題に対する対処方法の違いをもたらしているかを検討する。パトナムの議論は形而上学的実在論を批判するものであるが、『構築』に対する批判にもなっていると考えられる。この議論の検討を通じて、『構築』の実在論／反実在論の立場が抱える問題点を明らかにしたい。

第4章

『構築』と『現象の構造』

『構築』のプログラムを批判的に継承し、『構築』のそれとは異なる新たな体系を構築したことで知られるのが、ネルソン・グッドマンの『現象の構造』(*The Structure of Appearance*) (Goodman, 1951)⁵⁵である。これは、カルナップの活躍した時代に『構築』プログラムを受け継いだ真剣な体系構築の試みとしては、ほぼ唯一のものと言ってよい⁵⁶。しかし、それにもかかわらず、非常に根本的な点で、グッドマンのプログラムとカルナップのそれは異なっている。そして、その「根本的な点」とは、これまでに本論文が『構築』の主要な特徴と見なしてきた点に大きく関わっている。したがって、本論文のテーマにとって、『現象の構造』と『構築』の違いをここで正確に捉えることは非常に重要である。それによって、『構築』の特徴がさらに明確に理解されるはずである。そこで本章では、この違いをはっきりさせることを試みたい。

本章の構成は以下のとおりである。まず、『現象の構造』がどういうプロジェクトかを見定めるいみも込めて、4.1節と4.2節では、『構築』と比較した場合の『現象の構造』の特徴を明らかにしておく。『構築』と『現象の構造』の相違点は主に4つにまとめられるが、4.1節ではそのうち3つの相違点を論じる。続く4.2節では残りの1つの相違点を論じる。最後の相違点が本論文の主題にとってもっとも重要である。4.3節では、最後の相違点が実在論 vs 反実在論というテーマに関する立場の違いに起因するものであることを確認する。この作業を通じて、『現象の構造』と比して『構築』の立場がいかに強く実在論的かが明らかになるだろう。また、対象規定という課題の達成を体系構築に委ねる、という『構築』のプロジェクトの特異性も浮き彫りになる。

4.1 『構築』 vs 『現象の構造』

『現象の構造』は、そのタイトルからもわかるとおり、心的現象 (appearance) がもつ構造を探究する書物である。あるいはより正確に言えば、心的現象のみの構造を探究する

書物である。この点にすでに『構築』との違いが現れている。というのも、『構築』は『現象の論理的構築』ではなくして『世界の論理的構築』であるからだ。つまり『構築』は、あらゆる対象を1つの構成体系のうちに定義し、そうすることによって、対象領域が1つであることを示そうとしていたのである。グッドマンは初めから、このような試みは断念している。

物理的对象全体ないしその断面を現前 (presentation) から構築することは、実質的に、現実的現前だけでなく「可能的」現前をも取りこむことを意味する。[...] これによって別の問題群に巻き込まれる。この問題群は、近年熱心に研究されてきたが、ほとんど成功を見ていない。しかしながら、物理的对象ないしその断面を現前から（もしくは逆に、現前を物理的对象から）構築する問題は、本書の域外にある。(SA, p. 94)

ここで「近年熱心に研究されてきたが、ほとんど成功を見ていない」ことの例として挙げられているのは、カルナップの「テスト可能性と意味」(Carnap, 1936-37)とグッドマン自身による「反事実的条件法の問題」(Goodman, 1947)である。要するに、現象から物理的对象を構築しようとする、帰納法の場合と同じように、現実に生じていないことへといかにして「投射」を行なうべきかという面倒な問題に巻き込まれる、ということである。1.4.2節で論じたように、この「投射」は実際に、自己心理的对象から物理的对象を構成する際、『構築』でも行なわれている。そして、この点こそクワインが噛みついた点である、ということは、2.2.2節で論じたとおりである。グッドマンはあらかじめこの厄介なプロセスは扱わないことに決めている。

以上は、(1) 体系の扱うべき範囲に関する違いである。これとは別に、『構築』と『現象の構造』の主だった違いには、(2) 体系構築で用いられる道具立ての違い、(3) 体系の論理外原始項の違い、(4) 体系で行なわれる定義の精確性についての立場の違いがある。これらのうち、『構築』の实在論と反实在論を『現象の構造』のそれと比較する、という我々の目下の論点にとってもっとも重要なのは、(4)である。したがって、この点に関しては後に節を改めて論じることにして、まずは(2)と(3)を順に明らかにしておこう。(2)と(3)も我々の論点に無関係ではない。

4.1.1 プラトニズム vs 唯名論

(2)と(3)は比較的良好に指摘される違いである。(2)の道具立ての点は、『構築』で言う「構成体系の階層形式の問題」(1.3.1節)に関わる。『構築』では、階層形式はクラスと関係だとされていた。それに対して『現象の構造』では、クラスや関係は認められず、個体だけが許される。体系構築には集合論(「クラス計算」)は用いられず、メレオロジー

(「**個体計算** (individual calculus)」) が用いられることになる (SA, Chap. 2)。これは、形式的な存在者としては個体どうしの演算による個体の生成だけを許し、クラスや関係のような階層を認めないということであるから、正確に言うと、『構築』のような階層形式は『現象の構造』には存在しない、ということを含みする。このことを簡単に確認しておこう。

個体計算は、個体どうしの重複 (overlap) 関係を表す「 \circ 」だけを原始項とする (SA, p. 34)。これは、個体どうしが共通の内容 (content) をもつ場合に成り立つとされる関係である。この原始関係を用いれば、個体どうしの他の演算を定義できる。たとえば、「 \sim は…の部分である」に対応する「 $<$ 」は、次のように定義される (SA, p. 34)。

$$x < y =_{\text{Df}} \forall z (z \circ x \rightarrow z \circ y)$$

つまり、 x と重複するどんな個体も y と重複する場合には、 x は y の部分であるということだ。重複しない2つの個体は次のように「 \setminus 」によって定義され、「互いに離散的 (discrete) である」と言われる (SA, p. 34)。

$$x \setminus y =_{\text{Df}} \neg x \circ y$$

また、部分関係を使えば、個体どうしの積も定義できる (SA, p. 35)。

$$xy =_{\text{Df}} \iota z (\forall w (w < z \leftrightarrow (w < x \wedge w < y)))$$

すなわち、2つの個体の積とは、ちょうど両者どちらの部分でもあるような個体のことである。さらに、個体どうしの和は次のように定義される (SA, p. 36)。

$$x + y =_{\text{Df}} \iota z (\forall w (w \circ z \leftrightarrow (w \circ x \vee w \circ y)))$$

すなわち、2つの個体の和とは、両者の少なくとも1つと重複する個体たちにちょうど重複する個体である。

この個体どうしの和は、個体計算における生成関係である。つまり、原子 (atom) ⁵⁷ としての個体を最初にとった場合、それら原子以外の新たな存在者は和をとることによって形成されるのであり、かつ、その新たな存在者もまた個体である。そのため、個体計算においては個体以外の存在者は生成されない。たとえば、ある2つの個体 a と b をとるとする。このとき、上記の和の定義により、 $a + b$ を生成することは必ず可能であり、なおかつ、それは一意である。つまり、2つの個体から生成する個体は必ず存在し、なおかつそれは1つしかない。これはクラス形成とは異なる。個体 a と b からなるクラスはそれ自身、個体ではない。そして、そうしたクラスの形成は、一意に定まらない。 a と b からなるクラスは、 $\{a, b\}$ の他にも $\{a, \{a, b\}\}$ 、 $\{\{a, b\}\}$ など、無数に存在する。他方、 $a + b$ に a を足しても b を足しても、 $a + b$ 以外にはならない。

このような個体計算を用いるのは、グッドマンの唯名論に起因する処置である。つまり、個体以外の存在者の存在にはコミットしない、という立場から、個体計算が選択されている。しかし、グッドマンの唯名論はそれ以上のことをいみしていないことに注意が必要である。つまり、まず、(i) 個体しか存在しないと主張したり、クラスなる存在者の存在を否定したりしているのではなく、個体以外の存在者の存在にコミットしないでやれる範囲のことだけやる、ということがいみされているにすぎない (SA, p. 26)。また、(ii) この「個体」なるものがいかなる存在者であるかについては何の規定もない (SA, p. 28)。何が個体であるかは、当該体系の解釈に委ねられることになる。

通常、伝統的な実在論争の文脈で登場する「唯名論」とは、普遍者や抽象的対象の存在を否定する立場である。たとえば、特殊者だけを存在者として認め、赤さや高潔さなどの普遍者の存在を否定するいみでの唯名論や、具体的対象だけを認め、数や形状などの抽象的対象の存在を否定するいみでの唯名論などは、「唯名論」の語で指される典型的な立場であると思われる。しかし、グッドマンの唯名論は、(i) の点からわかるとおり、普遍者や抽象的対象の存在を否定するものではないし、そればかりか、(ii) の点からすると、普遍者や抽象的対象を個体と見なす可能性すら否定するものではない。実際、以下で見るように、『現象の構造』の体系は抽象的対象を個体と見なすような体系である⁵⁸。このように、グッドマンの唯名論とは、体系構築において許されるべき形式的道具立てに関する立場であるにすぎない。

また、この立場は、いかがわしい存在者を認めたくないから、というオッカムの剃刀的な発想だけに由来するものではない。彼は、体系の単純性を正確に測定するための手法を提案している (SA, Chap. 3)。そして、その測定に従うと、個体計算はクラス計算よりも優れていることが判明する。個体計算を選択する理由の1つは、この単純性にある。したがって、単に存在論的な考察からそれを選択しているというのではなく、ここでは体系の優劣に関する客観的な視点がまずあって、それに従って個体計算を選ぶ、という根拠づけの関係になっているわけである。したがって、グッドマンの言う唯名論とは、哲学者個人個人によって自身の存在論的教条に基づいて選びとられ、哲学者個人個人に帰される立場というよりは、第一義的には、個人の立場からはいったん切り離されて、体系で用いられる形式的道具立ての点から個々の体系について帰される特徴であるにすぎない⁵⁹ (Cohnitz and Rossberg, 2006, p. 87)。そうした体系を選ぶ際に、第二義的ないみで、その体系を選んだ個人に対して「唯名論」の名が帰されるのである。したがって、まとめて言うと、この唯名論は、体系構築において許されるべき形式的道具立ての点から、まずは体系に対して帰される特徴にすぎないのである⁶⁰。ちなみに、唯名論に対して、個体以外にクラスを認め、クラス計算を用いる立場は「プラトニズム」と呼ばれる (SA, p. 25)。この用法に従えば、『構築』の体系はプラトニスティックな体系である⁶¹。

こうして規定される特徴をもった唯名論をグッドマンがとるのは、先に述べたとおり、

まずはそれが単純性に優れているからである。それに加えて、次節で見るように、現象についての体系構築の実際においては、個体計算を使えばクラス計算の場合に生じてしまうような問題を回避できる、とされている。つまり、個体計算には体系構築上、実質的な利点がある、ということである。より具体的に言えば、グッドマンが『構築』における困難と見なす問題が個体計算によって回避できる、ということが示される。かくして、唯名論的体系を選ぶ動機はさらに強くなる。

こうしてグッドマンの『現象の構造』は、用いる形式的道具立てに関して『構築』とははっきり立場が分かれることになった。プラトニスティックな体系をとる⁶²『構築』は、クラスが体系の「階層」形式なのであり、体系構築によってクラスの階層が積み重なっていく。そして1.3.1節で見たように、基礎的对象への還元によって対象領域の統一性が示される一方で、この体系内でのクラスの階層（対象圏域）は、心理的对象、物理的对象、精神的対象というような存在者がそれぞれ自存的に階層をなして存在することを表す、と考えられている⁶³。しかし、『現象の構造』においてはもはやこのような階層は存在しない。しかも、先に(1)の点（体系の扱うべき範囲の違い）として確認したとおり、『現象の構造』の場合、「対象領域の統一性」は端から体系構築の目標の外にある。したがって、『現象の構造』には、科学が扱う領域を統一的に示そうという野心もなければ、個々の科学が扱う領域の違いや領域内部での存在者の違いなどを体系中に反映させようという下心もない。『構築』と対比して(1)と(2)の点から窺える『現象の構造』の特徴は、ある限定された領域のうちで存在者を1種類へと還元する、ということである。

4.1.2 特殊主義 vs 「实在論」

(3)の論理外原始項の点は、『構築』で言うところの「構成体系の基底の問題」(1.3.3節)にあたる。それによると、『構築』の基礎的要素は全体的な体験としての要素体験であり、基礎的關係はそれらの間の類似性回顧になるのだった。そして、その基礎的關係をもとに、質クラス、感覚クラス、などなどというように、要素体験の準成分を構成していくのだった。これに対して、グッドマンは逆に、色、位置、時間などのさまざまなカテゴリーの感覚的質を「集める」ことによって、個々の具体的体験を構成しようとする。つまり、基礎的要素は体験ではなく感覚的質であり、それらから構成されるものが個々の体験である。質は抽象的对象であり、体験は具体的対象である。そのため、グッドマンは体験から質へ、という順序での構成の問題を「抽象化の問題 (problem of abstraction)」、質から体験へ、という順序での構成の問題を「具体化の問題 (problem of concretion)」と呼んでいる (SA, pp. 106f.)。『現象の構造』は具体化の問題を、『構築』は抽象化の問題を扱っていることになる。

より具体的には、グッドマンが基礎的要素にとる感覚的質は「クオリア (qualia)」と

呼ばれる。そして、基礎的關係は、クオリアどうしが⁶⁴「ともにある」という關係、すなわちクオリア間の共在 (togetherness) 關係である (SA, Chap. 6)。クオリアは、視覚、聴覚など、さまざまな感覺領域 (sense realm) に属する。そして、それら感覺領域の各々には、その領域に応じたカテゴリーが存在する。たとえば、視覚的領域のクオリアには、色、位置、時間の3つのカテゴリーがあるとされる (SA, p. 138)。そして、これら当該感覺領域の全カテゴリーの各々から1つずつクオリアを含んでいる存在者を、「具體者 (concretum)」と呼ぶ (SA, p. 145)。こうした具體者をまずは構成しなければならない。かくして、グッドマンの体系においては、たとえば視覚的領域で言えば、色、位置、時間の3つのクオリアが「ともにあること」、すなわち共在するという關係から、クオリアどうしが組み合わされ、個々の具體者たちが形成されることになる。

以上のように、グッドマンは「唯名論」をとりながらも、体系の基底としては抽象的対象であるクオリアを選んでいる。他方、『構築』は具体的対象を体系の基底として選んでいる。グッドマンは、前者のような体系を「實在論的 (realistic) 体系」、後者の体系を「特殊主義的 (particularistic) 体系」と呼んで区別している (SA, p. 104)。これに従えば、グッドマンは唯名論的かつ實在論的 (!) 体系を選択しているということである⁶⁵。『構築』のようなプラトニスティックかつ特殊主義的体系ではなく、唯名論的かつ「實在論的」体系を選んだのは、当然、そのほうが体系構築がうまくいくと考えたからである。その最たる例が、『構築』に生じた不揃い団体の問題と仲よし問題の解決である。

まず、不揃い団体の問題から考えてみたい。『構築』のように、体験から質を構成するという抽象化のプロセスでは、実際には質を形成しない体験たち（「不揃い団体」）を1つの質を形成するかのように束ねてしまうことが問題なのだった。これと類比的に考えると、質から体験を生成するという具体化の順序の場合、この「不揃い団体」は、実際には1つの体験を形成しない質たちであるのに体験を形成するかのようにまとめられてしまった質たち、ということになる。たとえば次のような事例が考えられる⁶⁶。視覚的領域のクオリアの3つのカテゴリー、時間、位置、色のそれぞれに属する個体（クオリア）を t_1 、 p_1 、 c_1 としよう。これらについて、 t_1 と p_1 は共在し、 p_1 と c_1 も共在し、 t_1 と c_1 も共在とする。つまり、時間 t_1 に場所 p_1 があり、色 c_1 は時間 t_1 に現れ、しかも色 c_1 は場所 p_1 に現れる。これらはしたがって、互いに共在關係にある。では、このような共在關係にある対象どうしをまとめれば必ず体験が形成されるだろうか。そんなことはない。こうした t_1 、 p_1 、 c_1 から体験が構成されるとは限らない。それらが「不揃い団体」を形成してしまう可能性もある。たとえば、 t_1 と p_1 には色 c_2 が共在し、 c_1 は t_1 に場所 p_2 で現れ、 c_1 は p_1 に時間 t_2 に現れるような場合である。図 4-1 は、そのような状況を描いている。

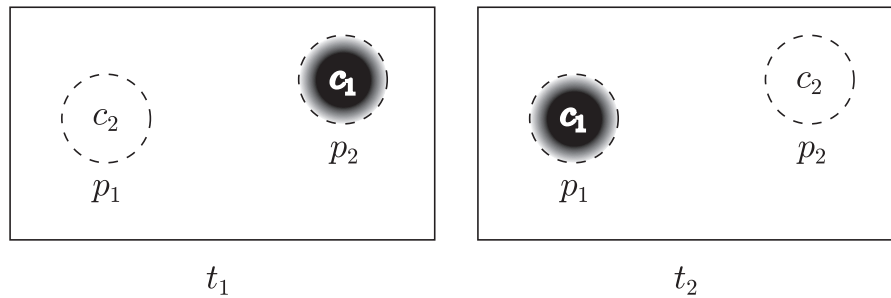


図 4-1 具体化における不揃い団体の例

こうした状況を回避するためには、たとえば、具体者が構成されるための条件として、 t_1 における p_1 に、 c_1 が共在する、というようなことを組み入れねばならないだろう。こうしておけば、上記の例では、 t_1 における p_1 （左図の p_1 ）には c_1 は共在していないのだから、具体者が構成されることはない。したがって、単に互いに共在関係にあるクオリアどうしから具体者を構成するのではなく、今のようにカテゴリーが3つある視覚的領域であれば、2つのカテゴリーのクオリアを（何らかのいみで）「集めた」存在者が、残りの1つのカテゴリーのクオリアと共在する、という場合に限って具体者を構成すればよい。そして、この「集めた」に具体的ないみを与えるものこそが、個体計算である。すなわち、個体計算における個体の和をもって「集めた」とすればよい。共在関係を「 W 」と書くとすると、今の例では、

$$W(t_1, p_1) \wedge W(t_1, c_1) \wedge W(p_1, c_1)$$

を要請する（これは満たされていた）のではなく、

$$(4-1) W(t_1, p_1 + c_1)$$

を要請しなければならなかった（これは満たされていない）のである。

したがって『現象の構造』では、このような考え方に従って、個体計算を用いた基底の選択と基底からの構成が行なわれることになる。しかし、それを見るためにはまず、これまで『構築』の言い回しを継承して多少ルーズに使ってきた概念区分を、改めておく必要がある。特に、「基底」、つまり、「基礎的要素」と「基礎的關係」について、いくらか修正しておく点がある。『構築』においては、基礎的要素は基礎的關係の入力項として定義された (§109)。つまり、要素体験とは、類似性回顧という関係に立つものたちのことである。しかし、唯名論的な『現象の構造』の場合、まず、狭義の「関係 (Relation)」、すなわち、連関の外延としての「関係」は認められない。共在「関係」 W は、より正確に言うならば、「原始項 (primitive term)」、とりわけ「原始述語 (primitive predicate)」である (SA, p. 45)。この原始述語の適用する個体が（『構築』風に言えば）「基礎的要素」ということになる。このいみでの「基礎的要素」にあたる用語は、『現象の構造』においては

「基礎的単位 (basic unit)」である。しかし、先の例 (式 (4-1) の $p_1 + c_1$) からわかる通り、個体計算においては、この基礎的単位は何らかの個体の和である可能性がある。つまり、それにはさらに部分がありうるということだ。このような部分のうち、他の個体を部分にもたないものを「最小の基礎的単位 (minimal basic unit)」と呼ぶ。そして、たいていの体系では、この最小の基礎的単位が体系の「原子 (atom)」ないし「原子的個体 (atomic individual)」になる⁶⁷ (SA, p. 85)。

以上の区別を踏まえた上で、『現象の構造』の体系の基底を見ていくことにしよう。原始述語「 W 」は、具体者のどの2つの離散的部分の間にも成り立つようなものとして導入される⁶⁸。この述語の適用される基礎的単位とは何であろうか。まず、クオリアこそが最小の基礎的単位であり、体系の原子である。そして、基礎的単位は、クオリアやクオリアの和としての個体である。クオリアどうしの和のうち、特に「複合者 (complex)」と呼ばれるものが重要である。これは次のように定義される (SA, p. 150)。

ある個体が複合者である \iff その離散的部分のどの2つも、互いに関係 W に立つ。

これに従うと、先の例において $t_1 + p_1 + c_1$ は、その離散的部分のうち、たとえば t_1 と $p_1 + c_1$ が関係 W に立たないので、複合者であるとは言えない。こうして、不揃い団体の問題を回避する仕方では具体者が定義できる。具体者とは、どの個体にも関係 W に立たない複合者のことである (SA, p. 150)。

実は、『構築』のように特殊主義をとる体系の不揃い団体の問題も、同様の手段によって解決することができる (SA, pp. 151f.)。つまり、クラス計算ではなく個体計算を用いることにして、クオリアだけでなく、それらの和たちも基礎的単位に含められるようにしたのと同様に、要素体験だけでなく、要素体験のある種の和たちも基礎的単位に含められるように、原始述語を改訂するのである。その基本的アイデアは、次のようなものである。まず、複合者に似た役割を演じる存在者として、「質の広がり (quality stretch)」を考える。これは、そのすべてが質を共有するような要素体験の和である。そして、複合者のうちで最大のものを具体者としたのと同様に、この質の広がりの中で最大のものを質全体と見なす。こうした戦略をとるためには、質全体のどの2つの離散的部分の間にも成り立つ類似性関係 L を、新たな原始述語とすればよい。

すると、『現象の構造』のように「实在論的」体系をとろうが、『構築』のように特殊主義的な体系をとろうが、体系が唯名論的さえあれば、不揃い団体の問題は解決することになる。これはつまり、この問題の解決にあたっては個体計算こそが必要不可欠だ、ということであろうか。実は、そうではない。クラス計算を用いたとしても、似たような仕方では問題は解決できる。すなわち、「实在論的」体系の場合、具体者や複合者をクオリアの和ではなくクラスとして解釈し、共在関係を、具体者の2つの分離した部分クラスの間で成

り立つ原始述語とすればよい (SA, p. 153)。グッドマンがこの方針を棄て、自らの唯名論的なアプローチをとるのは、先にも論じた体系の単純性の点で、クラス間のこの関係を原始述語にとるよりも、「o」と「W」を原始述語にとったほうが優れているからである。

かくして、不揃い団体の問題だけ見るならば、唯名論をとることに積極的な理由はあるとはいえ、「实在論的」体系をとるか特殊主義的な体系をとるかは好みの問題にすぎないことになる。しかし、グッドマンが『構築』に指摘したもう1つの問題、すなわち仲よし問題については事情が異なる。この場合は、「实在論的」体系に明らかなアドヴァンテージがある。というのも、「实在論的」体系では、仲よし問題は生じない (SA, p. 152) からだ。まず、この場合に仲よし問題がどのようなものになるかを考えよう。『構築』の特殊主義的体系の仲よし問題とは、2つの区別されるべき質のうち、一方が現れる要素体験のクラスが、他方が現れる要素体験のクラスに含まれてしまう、という問題なのだった。グッドマンの体系の場合にこれと類比的に考えると、仲よし問題とは、2つの区別されるべき具体者のうち、一方がもつ質たちすべてを、他方がもってしまっている、という問題になるだろう。しかし、先述のとおり、具体者がもつべきクオリアのカテゴリーの数はあらかじめ感覚領域ごとに決まっているのだから、2つの異なる具体者がクオリアをいくつか共有することはあっても、一方がもつクオリアのすべてを他方がもつ、などということはいえぬのである。他方、質が現れる要素体験の数に制限はないから、一方の質が現れる要素体験のすべてにおいて他方の質が現れる、ということはある。かくして、この問題に関しては、「实在論的」体系を選ぶことに積極的な理由があることになる。

4.2 共外延性 vs 同型性

最後に、(4)の定義の精確性 (accuracy) の問題に関する違いを確認しておきたい。この問題は、どのような場合に定義項は被定義項を精確に定義していると言えるのか、という問題である。1.1節で論じたとおり、『構築』における「構成的定義」とは、定義項と被定義項の間の全面的変換可能性を規則のもとに提示することであった。さらに1.3.1節で見たように、『構築』では外延性テーゼがとられ、この変換可能性においては定義項と被定義項の間の共外延性（「広がり」の等しさ）さえ成り立っていればよい、と考えられていたのだ。これは同義性よりも弱い関係で十分、とする立場だった。これに対してグッドマンは、共外延性すら強すぎると主張する。彼によると、定義項と被定義項の間には、それよりもっと弱い同型性 (isomorphism) さえ成り立てば十分である (SA, Chap. 1)。この対立点は、本論文の論点にとってはもっとも重要な対立点なので、詳しく論じることとする。

4.2.1 共外延性の問題点

まず、なぜグッドマンは共外延性では強すぎると考えているのかを見ておこう。定義項と被定義項が外延的に等しいとしたら、被定義項を定義項で変換した際、どんな場合にも変換前と後で真理値は不変であるはずだ。しかし、それには明らかな反例があるという (SA, pp. 5f.)。たとえば、体積のある極限クラス (これを「p クラス」と呼ぶ) として幾何学的点を定義するというホワイトヘッドのやり方を考えてみよう⁶⁹。この場合、文

(4-2) 点と体積の p クラスは同一である。

は真であるとされるだろう。他方で、交わる線の対として点を定義するという別のやり方を考えると、

(4-3) 点と交わる線の対は同一である。

は真であるとされるだろう。ここで、どちらの定義も精確であり、その精確性が共外延性によって測られるとするなら、点と体積の p クラスは共外延的であり、点と交わる線の対も共外延的であり、したがって、(共外延性の推移性により) 体積の p クラスと交わる線の対も共外延的であろう。しかし、明らかにこれは正しくない。というのも、体積の p クラスは無限の要素をもつ (極限クラスなので) が、交わる線の対は 2 つの要素しかもたない (交わる線は 2 本である) からである。

したがって、少なくとも (4-2) や (4-3) のような種類の文 (おそらくは定義「自体」に関わる文) を変換対象から除外した上で、全面的変換可能性を要請するほかないだろう。これに対しては、そもそも除外すべき種類の文をどうやって原理的に規定するのかという問題がある。さらには、その問題をクリアしたとしても、明らかに全面的変換可能性が要請されるべき種類の文 (「普通の」文) において、先と同様の問題が生じてしまう (SA, pp. 7f.)。たとえば、

(4-4) 多くの点が体積 A のうちにある。

における「点」を「体積の p クラス」で置き換えると、

(4-5) 多くの体積の p クラスが体積 A のうちにある。

が得られる。しかし、体積の p クラスは無限の要素をもつものだから、明らかにある体積のうちにはない。よって、変換の結果、真である (4-4) は偽である (4-5) になってしまった。

これを防ぐには、ただの変換可能性ではなく、翻訳可能性が要請されねばならない (SA, p. 8)。つまり、被定義項だけでなく、体系的に置き換えられるべき他のすべての名辞

((4-5) ならば「体積」) が置き換えられた上で、真理値が保存されることが要請されねばならない。だが、これについても2つの問題がある (SA, p. 9)。1つは、(体系において置き換えられるべき名辞はすべて置き換えねばならないのだから、) 完全な定義体系を手にしないう限り、どの定義をとっても、その精確性を定められないということになってしまう、という問題である。もう1つは、結局のところ、(4-2) や (4-3) のような種類の文を除外することが不可欠であることに変わりはない、ということである。たとえば、

(4-6) どの点も体積の p クラスである。

は、ホワイトヘッドの体系に翻訳されると、

どの体積の p クラスも体積の p クラスである。

のような自明の理になる。しかし、線が基礎的単位であり、点は線の g クラスで定義され、体積は点の r クラスで定義されるような体系に (4-6) を翻訳すると、

どの線の g クラスも線の g クラスの r クラスの p クラスである。

が得られてしまう。これはタイプ理論では無意味であるし、直感的には偽である。それゆえ、2つの完全に適法な体系的定義のうちの1つは、我々のテストをパスしない。

したがって、以上から言えることはまず、(i) 定義の精確性に共外延性は必要ないということ、また、(ii) 定義の精確性を測るには体系的な翻訳が必要であるということ、さらに、(iii) 体系的に翻訳した際に、定義「自体」に関わる特殊な文ではなく、通常我々が関心をもつような文について真理値が保存される、ということである。これらの点を踏まえた上で、グッドマンが定義の精確性の条件として提示するのが、同型性である。

4.2.2 同型性へ

グッドマンは、適格な定義が満たすべき条件を次のようにまとめている。

体系のすべての定義項の集合は、すべての被定義項の集合と外延的に同型でなければならない。 (SA, p. 10)

つまり、定義項の外延と被定義項の外延の間に同型写像が成り立たなければならない、ということである⁷⁰。

このような要請によって、前節の最後に挙げた (i)–(iii) の点が満たされることを、グッドマンの用いる例を通じて明らかにすることとしよう。次のような図を扱う体系を構築したいとする。

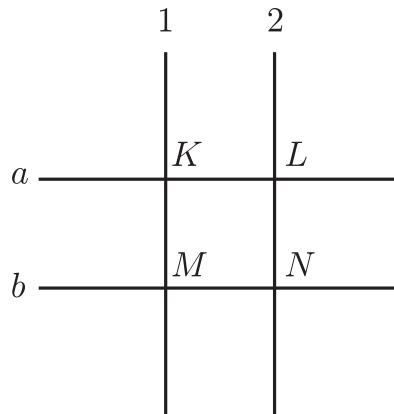


図 4-2 サンプル体系のユニヴァース

未定義の原始項は、次のような線の対のクラス、つまり、交線の対のクラスを取り出すものとする。

- (I) $\{\{a, 1\},$
 $\{a, 2\},$
 $\{b, 1\},$
 $\{b, 2\}\}$

この対のクラスをとり出すことがわかった関数を「点」の体系的な定義項として採用すると、点のクラス

- (II) $\{K,$
 $L,$
 $M,$
 $N\}$

は、線の対のクラス (I) として定義される。明らかに、定義項クラス (I) は被定義項クラス (II) と同型である。

しかし、クラス (I) は多くの置き換えによって得られるから、次のことがわかる。つまり、交線のクラスとしての点のクラスの定義は、どれか所与の点をどれか所与の交線として定義するわけではない。特定の対応関係を決定するという問題は未決である。通常に対応関係を表そうとしても、他の定義がなければ、体系のうちに表現は得られない。

では、他の定義として何を考えたらいいか。図中の点の間で「反時計回りに隣にある」という関係を考えよう。つまり、次のクラス

- (III) $\{\langle K, L\rangle,$
 $\langle L, N\rangle,$

$$\langle N, M \rangle,$$

$$\langle M, K \rangle\}$$

からなる関係を定義したい。そのために、次のクラス

$$(IV) \{ \langle \{a, 1\}, \{a, 2\} \rangle,$$

$$\langle \{a, 2\}, \{b, 2\} \rangle,$$

$$\langle \{b, 2\}, \{b, 1\} \rangle,$$

$$\langle \{b, 1\}, \{a, 1\} \rangle \}$$

を外延とするような原始項を用いるとしよう。これによって、同型性の条件を満たし、なおかつ先の (I) による定義を満たす対応づけは、(III) の各行を (IV) の各行に上から順に対応させるもの、(III) の上から順の各行を (IV) の 4 番目の行、1 番目の行、2 番目の行、3 番目の行にそれぞれ対応させるもの、同様にしてあと 2 種類、すべて合計しても 4 種類に限られることになる。

これをさらに 1 種類に絞るには、「すぐ上にある」という関係を用いればよい。つまり、

$$(V) \{ \langle K, M \rangle,$$

$$\langle L, N \rangle \}$$

からなる関係を定義することを考える。その定義に、次のクラス

$$(VI) \{ \langle \{a, 1\}, \{b, 1\} \rangle,$$

$$\langle \{a, 2\}, \{b, 2\} \rangle \}$$

を外延とする原始項を用いることにしよう。すると、(V) の各行を (VI) の各行に上から順に対応させる置き換えだけが同型性を満たす。こうして、置き換えは 1 つに定まった。これらの置き換えを満たすべく原始項を選んだ体系を体系 A と呼ぶことにしよう。

体系 A はもっとも「自然な」ものであろう。しかし、同型性を満たす体系は他にもありうる。たとえば、「反時計回りに隣にある」という関係は、(IV) ではなく、次のクラスとしても定義できた。

$$(VII) \{ \langle \{a, 1\}, \{b, 2\} \rangle,$$

$$\langle \{b, 2\}, \{a, 2\} \rangle,$$

$$\langle \{a, 2\}, \{b, 1\} \rangle,$$

$$\langle \{b, 1\}, \{a, 1\} \rangle \}$$

さらに、「すぐ上にある」を次のクラス

$$(VIII) \{ \langle \{a, 1\}, \{b, 1\} \rangle,$$

$$\langle \{b, 2\}, \{a, 2\} \rangle$$

として定義すると、(III) と (VII) を順番どおりに対応させる置き換えが、体系を全体として満足する唯一の置き換えとなる。この置き換えを用いる体系を体系 B としよう。

これら体系 A と B は、同型性を満たすような2つの体系である。これら2つの体系によって、前節最後に挙げた3つの点を確認できる。

まず、(i) 定義の精確性に共外延性は必要ないという点について。たとえば、「 L 」は体系 A では「 $\{a, 2\}$ 」に、体系 B では「 $\{b, 2\}$ 」に対応させられるのであり、両体系で定義される点は外延が一致しない。

次に、(ii) 定義の精確性を測るには体系的な翻訳が必要であるという点について。たとえば、「 $b \in L$ 」という文を考えてみよう。体系 A ではこれは真ではないが、体系 B では真になる。なぜならばこの文は、体系 A に従った翻訳では「 $b \in \{a, 1\}$ 」に、体系 B に従った翻訳では「 $b \in \{b, 2\}$ 」になるからである。しかし、図 4-2 を見るに、 b は明らかに L を通っていない。したがって、この文が真になるのはおかしいのではないか、という批判が生じるかもしれない。これに対しては、メンバーシップ関係は線が点を通るという関係に対応しておらず、通るという関係もまた体系的に解釈されねばならない、と答えられる。つまり、通るという関係は前体系的には

$$\begin{aligned} \text{(XIV)} \quad & \{ \langle a, K \rangle, \langle b, N \rangle, \\ & \langle 1, K \rangle, \langle 2, N \rangle, \\ & \langle a, L \rangle, \langle b, M \rangle, \\ & \langle 2, L \rangle, \langle 1, M \rangle \} \end{aligned}$$

からなるが、これは体系 B では次のクラスによって定義されねばならない。

$$\begin{aligned} \text{(XV)} \quad & \{ \langle a, \{a, 1\} \rangle, \langle b, \{a, 2\} \rangle, \\ & \langle 1, \{a, 1\} \rangle, \langle 2, \{a, 2\} \rangle, \\ & \langle a, \{b, 2\} \rangle, \langle b, \{b, 1\} \rangle, \\ & \langle 2, \{b, 2\} \rangle, \langle 1, \{b, 1\} \rangle \} \end{aligned}$$

つまり、この体系での「 b は L を通る」の翻訳は「 $b \in L$ 」ではなく「 $\langle b, \{b, 2\} \rangle \in \text{(XV)}$ 」である (SA, pp. 18f.)。このように、定義の精確性を調べる際には、前体系的な項をすべて体系的に置き換えねばならない。

以上の例から、(iii) 体系的に翻訳した際に、定義「自体」に関わる特殊な文ではなく、通常我々が関心をもつような文について真理値が保存される、という点についても、いくらか明らかになるだろう。たとえば、今確認したとおり、「 b は L を通る」のような文の真理値は、体系 A でも体系 B でも保存されうるが、他方で、「 L は $\{a, 2\}$ と同一である」

は、体系 A のもとでは「 $\{a, 2\} = \{a, 2\}$ 」という真なる文になるが、体系 B のもとでは「 $\{b, 2\} = \{a, 2\}$ 」という偽なる文になる。このようにして、先の (i)–(iii) の点は、同型性を定義の精確性の条件と見なすことによって十分に説明されると考えられる。

4.3 実在論 vs 反実在論

以上のような『構築』と『現象の構造』の 4 つの違いのうち、以下では最後の (4) の違いを主題的に論じることにする。他の 3 つの違いについても、最後の違いに関わる論点に限って触れることにする。

4.3.1 定義と対象規定

グッドマンによれば、『構築』は外延性テーゼをとっているが、共外延性は定義の精確性にとって強すぎる。したがって、グッドマンの議論が正しいとすれば、『構築』の定義の基準は適切でない、ということになるだろう。

しかし、カルナップは外延性テーゼをとっていたとは言え、構造的標示という特殊な手段を用いていた。この手段は、同型性を保つ仕方で定義を行なう (1.2 節) という点で、グッドマンのやり方とほとんど同じである。実際、前節の例において、グッドマンが用いた 3 つの関係を原始項とすれば、4 つの点を構造的に標示することができる。すなわち、(I) を取り出す関係が「 $I(x, y)$ 」(x と y は交わる)、(IV) を取り出す関係が「 $C(x, y)$ 」(x は反時計回りに y の隣にある)、(VI) を取り出す関係が「 $A(x, y)$ 」(x は y のすぐ上にある) だとすると、以下のように定義できるのである。

$$(4-7) K =_{\text{Df}} \{s, t \mid I(s, t) \wedge \exists u \exists v (I(u, v) \wedge \forall x \forall y ((x = \{s, t\} \wedge y = \{u, v\}) \rightarrow (C(y, x) \wedge A(x, y))))\}$$

$$(4-8) L =_{\text{Df}} \{s, t \mid I(s, t) \wedge \exists u \exists v (I(u, v) \wedge \forall x \forall y ((x = \{s, t\} \wedge y = \{u, v\}) \rightarrow (C(x, y) \wedge A(x, y))))\}$$

$$(4-9) M =_{\text{Df}} \{s, t \mid I(s, t) \wedge \exists u \exists v (I(u, v) \wedge \forall x \forall y ((x = \{s, t\} \wedge y = \{u, v\}) \rightarrow (C(x, y) \wedge A(y, x))))\}$$

$$(4-10) N =_{\text{Df}} \{s, t \mid I(s, t) \wedge \exists u \exists v (I(u, v) \wedge \forall x \forall y ((x = \{s, t\} \wedge y = \{u, v\}) \rightarrow (C(y, x) \wedge A(y, x))))\}$$

しかし、これらの構造的標示は本当に「標示」になっているだろうか。つまり、それぞれはクラスを一意的に規定できているだろうか。もし、3 つの関係を意図されたとおりに「自然に」とれば、 $K = \{a, 1\}$ 、 $L = \{a, 2\}$ 、 $M = \{b, 1\}$ 、 $N = \{b, 2\}$ のようになって体系 A が得られるだろう。しかし、もし $I(x, y)$ と $A(x, y)$ が「不自然な」関係になるよう

な解釈を与えれば、 $K = \{a, 1\}$ 、 $L = \{b, 2\}$ 、 $M = \{b, 1\}$ 、 $N = \{a, 2\}$ となる体系 B を得ることもできる。したがって、クラスは一意に規定できておらず、構造的標示は成功していないと言える。

しかし、これは通常のいみにおいて構造的標示が失敗した例ではない。一意的に規定できないとしたら、それはふつう、関係が足りないといういみでの失敗である。たとえ「自然な」解釈に限定するとしても、たとえば「 $A(x, y)$ 」が欠けている状態だったら、それぞれの点を規定することはできない。しかし、上記の失敗は、「オーケー、規定できるだけの関係は整えた」と言った後、「意地の悪い」関係の解釈をされてしまって1つに定まらなくなってしまった、といういみでの失敗である。

カルナップにとっては、体系 B ではなく体系 A を取り出すためにこそ、上記(4-7)-(4-10)の定義は行なわれるはずだ。3.4節で論じたように、カルナップの方法とは、实在論的言語で規定される対象とそれらの間の関係をもとに、構成的言語で構造的標示を行なうというものだった。このとき、实在論的言語で規定される対象と構造的に標示される対象は同じ対象であることが前提されており、その前提のもと、規定の仕方を客観的にする、ということが試みられる。このいみでやはり、カルナップは共外延性を定義の精確性の基準と考えていると言える。定義項と被定義項が共外延的であるということを前提にしたうえで、同型性を保つという条件をさらに加えているのである。

すると、グッドマンの例はカルナップの方法がうまくいかないことを示しているように思われる。他方でグッドマンは、何か困ったことが生じるといういみで体系の複数性の論点を提出してはいない。定義の精確性には同型性で十分であり、それだけを要求することによってこんな例も扱えてむしろ有用だ、と言っているのである。このような両者の立場の違いはどこに起因するのだろうか。

グッドマンの場合、客観的な対象規定の手段として構造や同型性を用いようとしているのではない。対象規定は単に解釈の問題である。それぞれの体系の記号には定まった解釈があると想定される (SA, p. 3)。それがなければ、体系 A と体系 B はそもそも区別できない。それぞれの体系的ないし前体系的言語には定まった解釈があると前提すべきである。そのうえで、体系間ないし前体系と体系の間の翻訳関係として同型写像をとり、定義の精確性を問うているのである。したがって、カルナップの場合と違って、対象規定と定義の問題は別である。

このような違いは、記号言語による体系構築がどのようないみをもっているかという点の捉え方の違いに結びついている。『構築』のカルナップは、フレーゲやラッセルの論理主義に賛同し、その精神のもとで経験的对象の論理的構成を行なおうとしていた。『構築』の構成体系の構築は、フレーゲやラッセルが遂行した数学的概念の論理的概念への還元と同種の還元を、経験的对象について行なおうという試みである。抽象の原理に着想を得た準分析の手法を用いて、対象どうしの論理的关系をもとに経験的对象を構成していくこと

が試みられた。しかし、こうした構成・還元には、同時に新カント派的な課題の遂行という役割までもが担わされていた。論理的関係から対象を構成するという体系的な定義は、ただの対象の構成ではなく、この観点においては、客観的な認識を得る過程でもあると見なされる。そのように見なされうるのは、認識に客観性をもたらすものこそが、論理的関係の形式性であると考えられたためである。かくして、定義を行なうことはすなわち認識論的に客観的な対象規定を行なうことにほかならない、とされる。もちろん、実在論的言語という前体系的言語においても対象規定はなされていると考えられるが、それはあくまで主観的な対象規定なのである。

他方でグッドマンの場合、各体系の記号にはそれぞれの解釈があらかじめ与えられるものと見なされる。ここで指示はとりあえず確定していると見なされるのであって、体系構築以前にはきちんと定まっていなかった指示関係が体系構築によってはじめて客観的に定まるのではない。もちろん、体系構築は解釈を与える作業を含む。しかしそれは、あらかじめ古い解釈の与えられていた被定義項について、新たな体系が新たな解釈を定義項として与える、という作業であり、同じものをもっとしっかり規定する、ということなのではない。グッドマンのこの考えの先には、次のような多元主義的な存在論がある (Goodman, 1978, pp. 109–116)。それぞれの体系は世界の1つのヴァージョンであり、体系構築とは世界制作の方法である。体系と独立に定まっている「唯一の世界 (the world)」があって、それをさまざまな体系が記述するのではない。

『構築』と『現象の構造』における体系構築の道具立ての違いも、体系構築をどのようなものと見なすかの違いに関わっている。グッドマンにとっては体系構築における道具立てとして何を選ぶかは、体系の単純性や経済性を考慮したうえで決まることであった。そのうえで個体計算を選択している。他方で、フレーゲやラッセルの伝統を引き受けようとする『構築』期のカルナップにとってみれば、クラス理論を用いることはほとんど当然の手段であったろう。そしてまた、先にも述べたように、このクラスの階層こそが対象圏域の階層に相当すると考えられ、カルナップの認識論的・存在論的中立主義を達成するにふさわしい道具立てだとも見なされていたのである。

4.3.2 『構築』の技術的問題への反応

加えて、以上のような両者の発想の違いを捉えることによって、次のような両者の見解の対立がなぜ生じているのかも明らかになる。グッドマンが論じるところによれば、『構築』と『現象の構造』において選択される論理外原始項の違いは、グッドマンが『構築』の難点として挙げる2つの問題に対する対処力の違いを生んでいた。これら2つの問題の存在にカルナップは気づかなかったわけではない。彼は、少なくとも仲よし問題についてははっきりと言及している。この問題の存在を指摘した後、次のように論じている。

異なる色の分布に体系的な結びつきがない場合、色クラスに関する2番目の性質が欠けるという好ましからざる状態が生じる確率は、物の色の平均数が少なくなればなるほど、物の総数が増えれば増えるほど、減じる。(§70)

ここで「色クラスに関する2番目の性質」というのは1.3.3.1節で述べた(2)の性質のことである。本来色クラスになるべきクラスがそれを欠くというのは、色クラスになってほしいのに、別の色クラスの部分クラスになってしまうので互いに親色な要素を集めた最大のクラスにならず、色クラスとして定義できない、ということである。これはつまり、仲よし問題が生じてしまうということだ。カルナップによれば、こうした状況は「好ましくない」ものであって、もし、体系的な結びつきがあって、そのように一方が他方の部分クラスになってしまうという状況に何らかの事情があるのでない限りは、次のように言える。つまり、物の色の平均数が減ったり物の数が増えたりするという(サンプルとは違った)現実の条件が整えば、こうした好ましからざる状況が生じることもおそくないだろう、ということだ。要するに仲よし問題は現実には生じないだろうから気にしなくてよい、ということである。

この考えについて、グッドマンは次のように批判する(SA, p. 117)。体系外にそのような想定を勝手にもちこんではならない。何が構成されて何が構成されないかは、あくまで体系内の基準で決定できなければならない。また、そもそも想定自体が疑わしい。第1に、要素体験に置き換えて考えた場合、各々の体験の質の平均数が現実には減るなどということはありそうにない。第2に、「体系的な結びつきを除外する限り」という条件は循環的である。この結びつきが、好ましくない状況になる2つの質の恒常的な共起にすぎないのなら、体系的結びつきの排除とは、単に好ましくない状況は生じそうにない、ということにすぎない。他方で、ただの恒常的な共起ではなくて非常によく似た色が体系的な結びつきをもつという状況を除外しようというのなら、好ましくない状況がもっとも生じそうな事例だけを好き勝手に考察から除外しているにすぎない。

このようなグッドマンの批判に対しては、カルナップ研究者たちが再反論している。リチャードソンは、準分析と通常分析の違いを強調する(Richardson, 1998, pp. 61-64)。通常分析であれば、もともとある対象の成分が何であるかはあらかじめわかっているから、これをきちんと復元できるように分析を行わなければならない。したがって、グッドマンが指摘する2つの問題を回避しようとする仕方で分析を行わなければならないだろう。他方で準分析の場合、成分が客観的にはわからない状態から関係の構造だけに従ってその成分(むしろ準成分)を同定しなければならない。この場合、もし「好ましくない」状況が生じて、通常考えられている対象が取り出せなかったり、本来意図されていたものとは異なる対象が取り出されるのだとしても、それはむしろ、構造的な標示という客観的な手段によって規定されるものは実はそういうものだったのだ、ということ

示しているにすぎない。たとえば2.2.2節の図2-2の例のように、あらかじめ図があって通常の場合であれば、結果として $\{a, c, f\}$ が色クラスになったら問題である。しかし、単に関係記述が与えられているだけの状態で $\{a, c, f\}$ が色クラスとして分析されるとしたら、それは、経験がそのような構造をもっている以上、客観的にはそのように規定されるほかない、ということを示しているにすぎない。経験科学の外的視点は単に作業仮説にすぎないのであり、本来、構築の正しさをチェックする外的視点は存在しないはずである。「好ましくない」状況は生じないだろう、というのももちろん、作業仮説にすぎない⁷¹。

このような再反論は、技術的問題に対するカルナップとグッドマンの態度の違いの裏に、何らかの根本的な立場の違いが存在することを示唆している。しかし、その違いというのが上述のような体系構築に対する2人の立場の違いであることは、こうした再反論においてきちんと捉えられていない。グッドマンの側では、前体系的な解釈をもとにして定義を行なうことが体系構築の眼目であった。そのため、被定義項の側でどういうことが成り立っていると考えるべきかはある程度定まっているはずで、そこで成り立つ関係を少なくとも同型対応をとる仕方で再現することは必須となっている。『構築』の2つの困難はこれを破る可能性を示唆するから問題だというのである。他方でカルナップの側では、客観的に定まっていない経験的対象を体系構築によって客観的に規定する、ということが求められているのであり、客観的手段によって規定できないものは切り出しようがないのだから棄てるしかない、ということになる。

ただ、上記の再反論は確かにグッドマンの立場の弱点を突いている。グッドマンのようにあらかじめ解釈が定まっているとする立場では、特に前体系的解釈について問題が生じられると思われる。体系の体をなしていないようなシンボル使用に対してどうやってあらかじめ解釈を施し、それをもとに同型対応をとるのだろうか。グッドマンがサンプルに出すような前体系的解釈がはっきり定まる例は別としても、現象主義的体系のように前体系的な秩序のはっきりしない体系に関しては、少なくともこの点について説明が必要だと思われる。

しかし、だからと言ってももちろん、カルナップの側に問題はないということにはならない。第1に、グッドマンは2つの問題を解決するような手段を提示しているのだから、実際にそれらを体系構築においてクリアすることは可能である。こうしてもともと区別しなかったことを区別する方向にもっていくことのほうが、区別できなくなったらそれはそれで仕方がない、と最後は経験に委ねるよりも、体系構築の場面ではまともな態度だと思われる。区別しようとしていた事柄はただの「作業仮定」にすぎないのだとしても、それを棄てるよりは残せるほうがよいのではないか。

第2に、これに関わることだが、体系構築に際して何を優先して何を棄てるべきなのか、はっきりした基準が必要だと思われる。グッドマンの場合、少なくとも前体系的に解

釈された項に関しては、それらと同型な項で定義を行なわなければならない。他方でカルナップの場合、定義項と被定義項の共外延性を守らなければならない、とされている。これはいっそう強い条件のはずである。しかし、共外延性が成り立つべきとされる対象はどれなのか、つまり、どの対象が定義されるべきであり、どの対象が定義されなくてもよいのか、といった点については、構造的に標示が可能かどうかという基準しか設けられていない。これはある程度の恣意性をもたらす。というのも、どのような関係を基礎的關係に選ぶか、いくつの基礎的關係を設けるのか、また、どのような体系構築の形式的道具立てを用いるかによって、構造的に標示しうるものは異なるはずだからである。

実際、カルナップは構成体系の構築を規約を設ける仕事だと見なしている (§179)。ただし、もちろん、経験のうちで何が成り立つか（たとえば、物の色はどういうふうに対象の間に分配されているか、など）は定まっているのであって、それを規約によって変えることはできない。しかし、それら成り立つ事実のうちでどれを重視し、どれを基底にとるか、などのことは、体系構築者が選択できる。そして、最終的にどの対象を区別し、区別しなくていいのかなども選択できることになる。これらのいみで体系構築は規約的である。

他方、グッドマンのアイデアにおいても、規約性は生じうる。ただし、そのいみは『構築』と異なる。グッドマンの場合、もともと区別されていた項どうしは少なくとも区別できなければならない。こうしたグッドマンの要請について、「神の視点」に立ってものを言っている、と批判する⁷²のは誤っている。グッドマンにとってみれば、前体系的に解釈された項を区別すべし、というのは、何ら神の視点に立って「唯一の实在世界」を覗きこんだ末の要請なのではない。というのも、それは単に我々が制作済みの世界の中ですでに区別しているものを区別しろ、と言っているにすぎないからだ。どのヴァージョン（体系構築の前であれ後であれ）も我々の制作の結果である点は違いのないのである。他方でカルナップの場合は対照的に、「唯一の实在世界」を前提したうえで、人間にとって規定可能な対象を限定しているのである。そうであるからこそ、この世界（全面的には我々が知りえないかもしれないこの世界）のうちで、我々のほうで区別すべきことに規約性が生じるのである。

グッドマンの規約性はこうしたいみでの規約性ではない。たとえば先の幾何学的点の定義の事例においては、体系 A をとるか体系 B をとるかという点に関し決定不全性が生じる。したがって、どちらをとるかについて規約性が生じる。これは、（どの対象を区別すべきか、ではなく、）区別すべき対象をどの対象として区別するかについての規約性である。そしてそれは、世界の多元性をいみするのである。

さて、以上2つの問題点とは別に、カルナップには第3の問題点がある。技術的問題に対する反応を基づけているカルナップの体系構築の捉え方そのものが、前節で指摘したような困難を招く。グッドマンによる幾何学的点の定義の例は、原始項を固定すれば構造的

に標示ができたと思われる例でも、原始項の解釈次第で標示の一意性が損なわれる可能性を示していたのである。この問題に対してカルナップがとりうる解決策の1つは、原始項すらも構造的に標示して、他の解釈を許さないようにする、という方策である。実際、1.4.4節で見たように、カルナップは基礎的関係の構造的標示を試みている。これがうまくいっているかどうかは次章のテーマとなる。

以上のように、グッドマンと比較した場合、カルナップの体系構築の捉え方は、より実在論的である。グッドマンの場合、体系ごとに異なる世界のヴァージョンがあるのであり、同型性を保った複数のヴァージョンがありうる。これは1つのヴァージョンに対して完全な実在論をとることを不可能にするのであり、反実在論的な考え方である。我々の体系構築によって世界のあり方は変わるのであり、実在論の独立性テーゼに反している。他方でカルナップの場合、体系の複数性は、対象たちを規定する仕方の複数性をいみするにすぎない。世界はあくまで1つであり、それは規定に先立って存在している。規定は、世界の構造的性質を利用して行なわれるものなのである。

第5章

『構築』と形而上学的实在論

前章までで明らかになったカルナップの实在に関する立場は、どこまでもっともらしいのであろうか。前章では、グッドマンの批判を検討することによって、『構築』のいくつかの問題点も明らかになった。とりわけ、グッドマンが共外延性を基準とした定義に代えて提示している、同型性を基準とした定義というアイデアは、カルナップの定義のやり方に対する大きな挑戦となっていた。本章では、このグッドマンの定義の例に似た別の論証を導入し、カルナップの立場の妥当性を評価したい。その論証とは、パトナムによるモデル論的論証である。この論証をもちだすのは、次のような事情があるからである。まず、パトナムがこの論証によって批判する立場、つまり形而上学的实在論は、『構築』と同じ出発点をもっている。そしてまた、パトナムの論証が暴き出す形而上学的实在論の問題点は、『構築』にとっても類似の理由で問題点となりうる。したがって、もしこの論証がうまくいっているとしたら、同時に『構築』の問題点をも明らかにするものとなるだろう。実際この論証は、フリードマンの『構築』批判（2.2.3節）とも関わる議論であり、实在をめぐる『構築』の立場を評価する際の重要なとっかかりとなるはずだ。そしてまた、現代的な实在論 vs 反实在論の論争のうちに『構築』を位置づけるためのよい手がかりとなるだろう。

本章の構成は以下のとおりである。まず、5.1節はパトナムのモデル論的論証の骨組みを吟味する。この論証に対する批判や、批判に対するパトナムの側からの再批判も検討する。次に、5.2節ではこの論証が『構築』に対する批判にもなりうることを示す。そして、特に『構築』の实在をめぐる立場のどのような点が問題となりうるかを検討する。

5.1 パトナムのモデル論的論証

パトナムは時期によって实在論に対する態度を変えている。「転向」後の内省的实在論期のパトナムは、形而上学的实在論 (metaphysical realism) と呼ばれる (かつての自分

もっていた) 立場に対する批判を行なっている。パトナムの言う形而上学的实在論とは次のような立場のことである。

この見方においては、世界は心から独立の対象のある固定された総体からなっている。「世界のあり方」についての真で完全な記述がちょうど1つ存在する。真理は、語または思想記号と外在的な事物や事物の集合との間のある種の対応関係を含む。(Putnam, 1981, p. 49)

この立場はしたがって、次の3つの見解を含んでいると言える⁷³。

- (1) 世界は心から独立の対象の確定的全体からなる(心からの独立性テーゼ)。
- (2) 世界のあり方の真で完全な記述はちょうど1つだけある(真なる記述の唯一性テーゼ)。
- (3) 真理は語/思想記号と世界の事物・事物の集合の間の対応関係を含む(真理の対応説)。

パトナムはこれらを主張する形而上学的实在論を批判して、「モデル論的論証」と呼ばれる議論を展開している。これは次のようなアイデアに基づくものである。(3)より、真理は記号と世界との対応関係によって捉えられる。この対応関係は、(1)より、記号と、記号とは独立に定まっている世界との間の関係であり、しかも(2)より、この対応関係は一意に定まるはずである。ところで、(3)で言われるような対応関係は、モデル論の考えによって明晰にすることができる。しかし、モデル論で成立する定理を参照すると、対応関係は一意に定まらないことが示される。よって、形而上学的实在論は維持可能ではない。

この論証は全部で3種類ある。それぞれが、入れ換え定理、レーヴェンハイム-スコレムの定理、完全性定理というモデル論上の定理に基づくものである。前者はPutnam, 1981で、後二者はPutnam, 1983で用いられている。ここでは、『構築』との関係上もっとも重要で、かつ、多くの論者がもっとも重要だと見なす⁷⁴、入れ換え定理に基づいた論証、すなわち入れ換え論法(permutation argument, argument from permutation)を扱うことにする。

5.1.1 入れ換え論法

入れ換え論法のアイデア自体はごくシンプルである。示そうとするのは、文の真理条件だけが与えられた場合、文の部分表現の指示は確定しない、という点である(Putnam, 1981, pp. 32f.)。

文「猫がマットの上にいる」を考え、この文の真理条件を与えることとしよう。パトナムは、真理条件を各可能世界での真理値割りあてによって同定する。この文はもちろん、

猫がマットの上にいる可能世界で真になる。そして通常の解釈のもとでは、「猫」は猫を指示し、「マット」はマットを指示する。

しかし、この文の真理条件を変えないまま（つまり、猫がマットの上にいる可能世界で真になるとしたまま）、これとはまったく別の新たな解釈を与えることができる。まず、すべての可能世界を3つの種類に分けてみる。

- (a) ある猫があるマットの上において、あるチェリーがある木の上にある。
- (b) ある猫があるマットの上にいるが、どのチェリーも木の上にはない。
- (c) その他。

そして、現実世界がどれかに応じて、次のように「猫」と「マット」の指示を固定する。

- 現実世界が (a) であるなら、「猫」はチェリーを、「マット」は木を指示する。
- 現実世界が (b) であるなら、「猫」は猫を、「マット」はマットを指示する。
- 現実世界が (c) であるなら、「猫」はチェリーを、「マット」はクオークを指示する。

これは通常の「猫」と「マット」の指示とは異なるが、この解釈のもとでも、「猫がマットの上にいる」は猫がマットの上にいる可能世界で真になる。したがって、文の真理条件を固定しても、文の部分表現の指示は確定しない。

これは、モデル論的定理の一例である。その定理は次のように述べられる⁷⁵。

まず、論理定項「 \neg 」、「 \wedge 」、「 \vee 」、個体定項「 c 」、「 c_1 」、「 c_2 」など、個体変項「 x 」、「 y 」、「 z 」、「 x_1 」、「 x_2 」など、述語定項「 F 」、「 G 」、「 H 」などをもつ1階の言語 L を考える。 L は関数記号はもたないものとする。 L の解釈 I は、 $\langle D_I, Ref_I \rangle$ である。ただし、 D_I は I のドメインであり、対象の空でない集合とする。 Ref_I は I の指示関係であり、 L の各個体定項の指示対象として D_I の要素を、 n 座の述語の外延として D の要素の順序 n 組の集合を割りあてる。また、個体変項に D_I の要素を割りあてる充足関数 s を拡張して、次のような充足関数 \bar{s} を定義する。

- $\bar{s}(x) = s(x)$
- $\bar{s}(c) = Ref_I(c)$

この \bar{s} を用いて、 $\models_I A[s]$ (s が I のもとで L の式 A を充足する) を次のように再帰的に定義する。

- (1) A が原子式 $F^n(t_1, \dots, t_n)$ であるとき、
 $\models_I A[s] \iff \langle \bar{s}(t_1), \dots, \bar{s}(t_n) \rangle \in Ref_I(F^n)$
- (2) A が何らかの式 B に対する $\neg B$ であるとき、
 $\models_I A[s] \iff \not\models_I B[s]$ でない

(3) A が何らかの式 B と C に対する式 $B \wedge C$ であるとき、

$$\models_I A[s] \iff \models_I B[s] \text{ かつ } \models_I C[s]$$

(4) A が何らかの式 B と変項 x に対する式 $\forall x B$ であるとき、

$$\models_I A[s] \iff \text{すべての } d \in D_I \text{ について、} \models_I B[s(x|d)]$$

(ただし、 $s(x|d)$ は、 $s(x|d)(x) = d$ 、 $s(x|d)(y) = s(y)$ ($x \neq y$) となる関数である)

この定義をもとに、文 A が真であること ($\models_I A$) を定義する。

$$\models_I A \iff \text{任意の } s \text{ について } \models_I A[s]$$

また、 π が D_I の入れ換え (D_I から D_I の上への一対一写像) であるとき、 L の解釈 I^* は次のように定義される。

- $D_{I^*} = D_I$
- L の個体定項 c について、 $Ref_{I^*}(c) = \pi(Ref_I(c))$
- L の n 座の述語定項 F^n について、 $Ref_{I^*}(F^n) = \{ \langle \pi(x_1), \dots, \pi(x_n) \rangle \mid \langle x_1, \dots, x_n \rangle \in Ref_I(F^n) \}$

これらの条件のもとで、次の定理が成り立つ。

入れ換え定理。各文 A 、解釈 I について、次が成り立つ⁷⁶。

$$\models_I A \iff \models_{I^*} A$$

この定理は、次のことをいみしている。すなわち、1つの文のモデルになりうる解釈は、それが同型性を保つ仕方と言説領域の対象を置き換えるものでさえあれば無数にある、ということである。したがって、この定理から次が言える。ある言語の文の真理はそれを真にする言語の解釈によって説明される、つまり、文の真理はそのモデルによって説明される、という仕方では真理の対応説を定式化するとしたら、それだけでは指示対象は定まらない。

これは、パトナム自身指摘するように (Putnam, 1981, p. 32)、クワインによる翻訳の不確定性の議論と似た論証になっている。しかし、ここでパトナムが示したいのは、指示というのはどんな立場の人にとってみても不確定的になってしまう、ということではない。彼の議論で示される不確定性は、とりわけ形而上学的实在論者に選択的に不都合に働く、とされているのである (Hale and Wright, 1997, pp. 429f.)。つまり、心から独立である世界を正しく記述する仕方は1つだけあり、しかもその正しさは記号と世界との指示関係に基づく、という説をとった場合、指示関係は定まらない、ということである。これは、言説領域を言語とは独立にまずは用意し、その領域への対応関係によって言語の解釈を説明しようというモデル論的な発想のもとでは、同じ文を真にする解釈が複数ある、と

いうことを根拠とする。

また、この議論は、4.2.2 節で論じたグッドマンの例とも類似している。どちらも、同型性を保つ解釈が複数ありうることを要点としている。ただし、グッドマンの例はあくまで体系間の関係を扱うもので、それぞれの体系がそれぞれの解釈に対応した記号表現をもつ。4.3.1 節で述べたように、それぞれの記号の解釈はあらかじめ定まっていることが前提とされる。そのうえで、新たな解釈は新たな体系の言語によって表現される。したがって、同じ文を真にする複数の解釈が問題になっているのではない。さらに言えば、グッドマンの場合、複数の解釈がありうるということが誰かにとっての問題であるとはしていない。グッドマンにとってみれば、指示関係ないし意中の解釈を定めることは、形而上学的实在論者の言うようないみでの世界と記号との対応関係から説明されるものではないため、解釈が複数あることがすなわち指示関係が定まらないことをいみするわけではない。彼のもとでは、解釈の複数性は体系の複数性を、したがって、世界の複数性をいみする（もちろん、この考え自体が批判を呼び起こすものではあろうが）。

5.1.2 「ただの追加理論」論法

形而上学的实在論者の側では、この議論に引っかからないようにするには、複数のありうる対応関係から指示関係を定めるべく、何らかの制約を設ける必要がある。そのためにしばしば用いられるのが、指示関係を別の関係へと還元するという方法である⁷⁷。つまり、次のようなぐあい関係 R を見つけるということである。

x が y を指示する $\iff x$ は y に対して R に立つ。

R の代表的な候補は、ある種類の因果関係であろう。

パトナムはこうしたやり方に対して、それも「ただの追加理論 (just more theory)」にすぎず、結局のところは入れ換え論法に引っかかる、と批判している (Putnam, 1981, pp. 45f.; 1983, p. 18)。この因果的理論の理論文に対する解釈を考えたとき、解釈は一意に定まらず、「 R 」がまったく異なる関係 R^* を表すとしても、文の真理条件は変わらない、というのである。

このパトナムの「ただの追加理論」論法に対しては、デイヴィッド・ルイスが次のように批判している (Lewis, 1984/1999, p. 62)。制約 C とは、 C 理論を受け入れることだけによって課されるのではない。それは、意中の解釈が C の説明を真にさせねばならない、という制約ではなく、意中の解釈が C に合致しなければならない、という制約なのである。つまり、解釈によって制約をモデル化すること（制約の言明を真にすること）と、解釈が制約に現実的に合致することとは別であり、理論的制約によって本来目指されているのは前者ではなく後者だ、ということである。

このルイスの見解には賛同者が多く、ヘイルとライトもそれに従っている (Hale and Wright, 1997, pp. 440f.)。たとえば、 C を表現する L の文を S とした場合、解釈 I が C に合致することと、 I が S を真にすることは別のことである。後者の場合、 I が J になったとたん、 S は真であり続けながらも C を表さなくなるかもしれない。もし、他の言語 L^* で C を表現できるとしたら、 S は J のもとで真であるが J は C に合致しないことを表現できるかもしれない。これに対して、パトナムの支持者は、次のように論じるだろう。このことの認識にとっては、その指示が確定的だと言える他の言語 L^* に後退できることが必要十分条件になる。しかし、どんな言語にとっても指示の確定性の問題が生じるのだから、結局はその言語での制約の表現もまた「ただの追加理論」にすぎない。ヘイルとライトはこうした反論に対して、確定的な指示が可能であることを実証するのではなくて、確定的な指示がどうしたらうまく機能するかを説明することが重要なことから、その説明にとってのメタ言語を想定することに問題はない、と見なす。

他方でテイラーは、そのような安定したメタ言語が存在しないことをテクニカルに示し、パトナムの議論を支持しようとしている (Taylor, 2006, pp. 75–84)。いずれにしても、この論争におけるポイントは、意中の解釈を定めるような制約をメタ言語においてきちんと表現できるかどうかにあると言える。

5.2 『構築』とパトナムの論証

以上のパトナムのモデル論的論証は、ある種の实在論的立場に立つと、指示関係を確定することができない、ということを示そうとするものであった。ここで本論文のメインテーマである『構築』の实在論／反实在論に戻ると、カルナップもまた、対象を規定するというテーマを抱えていたのだった。しかし、『構築』にもまた、パトナムの論証にある種似た仕方で、この規定を最終的には果たせないのではないか、という疑問を突きつける批判がある。それは、2.2.3 節で論じたフリードマンの批判である。この批判は『構築』のどのような問題点を突いているのか。そして、その問題点は形而上学的实在論の問題点とどのような共通性をもつのか。『構築』の实在論の特徴をさらに明確にするためにも、以下ではこれらの点を考察したい。

フリードマンの批判の要点は、次のようなものだった。基礎的関係の消去というカルナップの課題は最終的に、経験可能で自然な「基盤をもつ」関係という論理的な原始概念を要請してしまう。これはもともと直示的な対象規定を排除するという課題から出発した構造的標示のプロジェクトに直示的な要素をもちこむことになってしまうか、経験的对象の規定が論理的な概念のみに依拠することになってしまうか、そのいずれかをいみする。これはどちらもまずいのではないか。

この批判のいみするところを、もう少し詳しく考えてみよう。まず、そもそもなぜ基礎

的關係を消去しようなどということカルナップは思いついたのか。それは、構造的標示のプロジェクトが、対象規定における主観性を排除しようという目的をもっていたからである。構造的に標示されていないままの基礎的關係は、主観的にしか同定されていないのであるから、最終的には構造的に標示しなければならない。注意したいのは、それが主観的にしか同定されていないことの意味は、（その關係の成り立つ対象たちの種類とは無關係に）単に構造的に標示されていないことに尽きる、ということである。つまり、基礎的關係は認識の順序の出発点にあり、主観的对象の間の關係であるので主観的である、と言われているのではない。基礎的關係の消去を基づけているのは、もともとの新カント派的な認識論のイミテーションとして言われている主観性の排除（主観的感覚から客観的認識へ）なのではなくて、どんな種類の対象であれ、實在論的言語が想定する対象の存在を前提したうえで、その対象の規定の仕方を客観的に厳密にしていく、といういみでの主観性の排除なのである。つまり、これを消去しようという意図は、独立性テーゼを支持するといういみでの實在論を前提としたうえで、対象の構造に従う仕方で対象を規定する、というアイデアから出てきているのである。たとえば、グッドマンの定義例において構造的標示によっては対象が定まらないこと（4.3.1節）の理由は、『構築』の発想のもとでは、基礎的關係が主観的にしか規定されていないことに求められるかもしれない。この場合も、その關係そのものが主観的なのではなくて、その規定の仕方が主観的だとされるであろう。

しかし、基礎的關係を消去しようとしても、結局のところはグッドマンの例で問題になっていたところへ戻ってきてしまう。というのも、基礎的關係を単に構造的に標示しようとするなら、同じ構造をもった2つの關係は区別できないからである。そこで、「基盤をもつ」關係に關係を制限しようということになる。しかしこの制限は、フリードマンの論じるとおり、問題をもつものなのである。

以上のカルナップの発想と問題点は、形而上学的實在論と発想と問題点を共有する。まず、発想の共通性から考えていこう。すぐさま指摘できる点は、『構築』も形而上学的實在論も独立性テーゼをとっていることである。次に、形而上学的實在論の一部である真理の対応説は、3.5節において『構築』もとっていると見なした意味論テーゼを、より明確に言い表したものだと言える⁷⁸。つまり、意味論テーゼで言われる「文字どおりの真理」は、各語に対応した対象たちからなる事態によって真になる、というように、対応説によってより明確に言い換えることができる。

形而上学的實在論の残り1つのテーゼである記述の唯一性テーゼもまた、『構築』はとっていると考えていいように思われる。それは次の理由による⁷⁹。構成的言語で表されるのは實在論的言語で表された事態への認識のルートなのであって、それら事態そのものではないという考え方が正しいとしたら、實在論的言語による記述を構成的言語の適切な記述によって置き換えた場合、實在論的言語において表された真理条件を構成的言語における検証条件で置き換えているにすぎない。つまり、あくまで真なる記述は實在論的言語に

において与えられるのであって、構成的言語において与えられるのではないのだから、真なる記述はちょうど1つだけある、ということである。

このように、『構築』と形而上学的实在論は实在論の重要なテーゼにおいて一致している。というか、これらテーゼだけ取り出せば、『構築』も形而上学的实在論の一部だと言える。

さらにまた、『構築』も形而上学的实在論も、最終的には指示ないし対象規定が確定しない、という同種の問題を抱える。つまり、指示／対象規定は単に記号と世界との同型性を保つ仕方ではかなされえず、指示／対象規定は一意になされえない、という問題が生じる。そして、この問題を回避するには、単に同型性を保つ仕方ではないように規定されるべく、指示／対象規定のやり方に何らかの制限をかける必要がある。この点でも両者は一致している。

しかし、両者の間には重要な違いがある。出発点から問題へ至るまでの経緯が異なるし、その結果、最終的な制限のかけ方も異なる。カルナップの場合、独立性テーゼの擁護は、中立主義的な精神から实在論の言っていることを汲みとろうという態度に由来するものである。つまり、实在論的な言語において規定されているような対象がとりあえず自存の対象として存在すると前提することから出発する。この言語においては、規定の仕方というのは「端的な認識」である。この言語における規定の仕方は、対象の喚起する知覚的内容を典型例とした、対象の「内容的意義」によるものとなる。ここでは、記号は対象にラベルのように貼りつく。

しかしカルナップは、このような实在論的言語の規定の仕方には問題があると考えてのだった。それは規定の仕方が主観的だからであり、もっと客観的な規定の仕方をいなければならないというのである。形而上学的实在論であれば単に解釈の問題と見なす(4.3.1節で見たように、この点はグッドマンも同様である)部分に関して、認識論的に問題があるからきちんと客観的なルートを確保すべきだ、ということになる。

その際に頼みとなる、主観的内容から客観的形式へ、という発想そのものは、新カント派的である。しかし、感覚経験に対して、我々のもつ形式を適用して対象を「切り出していく」といういみでの反实在論的発想はここではすでに、虚構的構築の言語に反映されるようなイミテーションでしかない。『構築』における客観的な規定はむしろ、实在論的言語において規定されているが、主観的にしか規定されていないような対象について、我々があてがう形式ではなくて、その対象のもつ形式をもとになされていくのである。構造的な標示とは、対象の側で成り立っている構造的性質をもとに対象を規定していく手段なのである。これはつまり、構造的性質に世界に関して知られうることを限定する点では反实在論的だと言えるが、構成が何を観点になされるのか、という点においては、きわめて实在論的な傾向の強いものとなっていることをいみする。我々に知りえるのは世界の側の構造である、というのがカルナップの立場である。しかし、この構造は同時に、世界の側が

もっている論理的構造でもあった。つまり、構成で用いられるのは、フレイゲ-ラッセルの論理主義的な構成体系において構築に用いられるような論理的性質でなければならない、ということであり、具体的にこのアイデアは準分析の手段に結実している。かくして構成体系の構築は、世界の論理的性質を用いた対象規定であることになる。

しかし、結果的にこの規定の手法は、同型性を保つ仕方での対象規定しかできない、という点で、形而上学的実在論と同様の問題を抱えることになる。形而上学的実在論の場合、もちろん、我々に知りえるのは世界の構造にすぎない、と言っているのではない。むしろ、我々の知る知らない、我々の心がそれを捉えるか捉えないかにかかわらず、真理というのは世界と記号との対応関係に存する、と主張しているのである。しかし、その結果、指示関係はただの構造的対応関係になってしまう、という問題が生じる。カルナップの場合は、形而上学的実在論によれば対応関係にすぎない指示関係を定めるルートをなんとか客観的にしようとした結果、そのルートもまた構造的対応関係にすぎなくなってしまう、ということであろう。そのいみではカルナップのほうが「先まで進んでダメになって」、もしくは「先まで進んで同じところに戻ってきてしまっている」。ただしもちろん、カルナップが実在論に関して、パトナムが指摘したような問題（つまり、無数に指示の候補が可能になる、という問題）を見出していたわけではない。カルナップにとって実在論の問題は単純に、対象規定が主観的だということにあった。いずれにしても、カルナップの構造主義と形而上学的実在論は結果として、対象と記号との関係を世界の側での構造的性質にすぎないものとしてしまう、という点で、共通の問題点を抱えている。

形而上学的実在論者がこの問題点に対処するための1つのやり方は、対応関係を制約して指示関係を固定してくれるような性質を見つけることである。解釈に制約をかけるものであれば、因果関係でもよいし、意図やその他の心理的態度でもよい。肝腎なのは、記号への解釈にきちんと制約をかけられるかどうかである。「ただの追加理論」論法に対するルイス流の答え方で区別されるように、制約が記号で表現されることと、記号への解釈に制約がかかることは別のことである。後者が別の記号による制約の表現にすぎないという仕方で常に前者に回収されてしまうのでないかぎり、何らかの仕方で解釈への制限を加えることができるだろう。

「先まで進んでダメになった」『構築』の構造主義は、こうした制限を与える1つのやり方と見ることができる。しかし、その制約すらまたうまく働かないのだから、純粹に構造的な標示にさらなる制約をかける必要が出てくる。ところが、ここで問題は、『構築』の場合、記号とその解釈は区別されていない、ということである。構成的言語における定義は、それそのものが対象規定の表現である。そのため、基礎的關係に制約をかける場合、その制約そのものが定義において表現されることになる。基礎的關係の定義においては、取り出された関係が「基盤をもつ」関係であることが定義項の側に書き加えられるのである。しかもこの制約は、構造的標示のアイデアに沿うものでなければならない。つまり、

それは何らかの論理的性質による制約でなければならない、ということだ。そのため、「基盤をもつ」という関係は、関係が経験可能であることを要請するものであると同時に、論理的な関係でもある、とされたのである。こうした点にこそ、フリードマンの批判は向けられていた。

以上のように、『構築』の構造的標示という手段は、対象の規定を世界の側の構造的性質にだけ依存するものとした結果、形而上学的实在論一般と同種の問題を抱えることになった。しかもその問題の解決策は、このように、形而上学的实在論一般にとってよりも、はるかに乗り越えがたいものとなっている。

本論文で描いた『構築』の实在論+反实在論は、対象の構造によって対象の認識・対象の規定を行なうという独特の手段を導くことになった。これは、構造を定義の観点とする側面においてグッドマンの方法と類似する。しかし、構造的対応をとることによって新たな解釈、新たな世界が得られるとするグッドマンとは違って、カルナップは、構造的対応そのものが、独立して存在する世界から対象を選び出す手段だと見なした。カルナップによるこうした世界の捉え方は、この対応関係に何らかの制約を設ける必要性を示唆する問題を生じる。この制約は、表現と対象の間への介入である必要があり、表現の側に取りこまれてしまってはまずいと思われる。しかし、カルナップの場合、構成体系そのものが表現と対象の間を結ぶ手段（規定手段）だと考えられているために、この制約もまた、構成体系内の表現の側に取りこまれるほかないのだった。かくして、構成体系を用いて対象の構造の点から対象を規定するという方法は、大きな問題を抱えていると言える。

終章 『構築』後の实在論と反实在論

対象規定の問題はその後、30年代以降においては、カルナップにとっての関心事ではなくなった。というよりもそもそも、認識論の問題に哲学が関わるべきではない、というのがその後のカルナップの一貫した態度となっている。しかし、認識論の課題を放棄したカルナップも、構造主義は放棄しなかった。中立主義の理想もまた、カルナップはずっと追いつづけた。しかし、構造主義はその後のカルナップ哲学において、まったく異なる役割を与えられている。そしてその役割の違いは、实在論 vs 反实在論の論争において、初期とはまったく異なる立場にカルナップが辿りついたことをいみしている。一言で言えば、彼の中立主義は初期よりもはるかにうまくいっている。この終章では、本論文の締めくくりとして、この後期の構造主義と中立主義を手短かに検討することにする。それを通じて、カルナップの思想展開にとって構造主義による中立主義の実現がいかに重要なテーマであったかが明らかになるだろう。また、後期への変化を論じることによって、初期思想の特異性がよりはっきりするであろう。

論理実証主義者が实在論 vs 反实在論の論争でとっていた立場として還元主義的経験主義と並んでよく出されるのが、道具主義の立場だろう。しかし、カルナップに限って言えば、還元主義的経験主義を諦めて道具主義へと乗り換えた、というストーリーは成り立たない。そもそも還元主義的経験主義をとっていないことは3.5節で述べたとおりである。そしてまた、後期においては道具主義をとっていたわけでもない。カルナップは、初期においては主に实在論と観念論の間の中立主義を目指していたが、後期においては主に实在論と道具主義の間の中立主義を目指していたのである。

周知のとおり、实在論と道具主義の間で問題になるのは、理論名辞の表す対象の实在性である。实在論者はこれらの対象について対象实在論のテーゼ3つ(3.1節)を擁護し、道具主義者はこのうち意味論テーゼを放棄する。道具主義者によれば、理論名辞を含む言明は、観察言明が表す事態を予測したり説明したりする際に役立つ「道具」にすぎない。だからこれら言明は文字どおりに真ではない、というわけだ。

カルナップはこれらの2つの立場の間で中立主義を主張する。彼の理論名辞の働きに関する研究は1930年代後半にはじまり、1960年代の半ば、晩年になってようやく、『物理学の哲学的基礎』(Carnap, 1966; 1974)に結実する⁸⁰。この研究において重要な転回点となったのは、ラムジー文というアイデアの導入である。このアイデアは、1958年にヘンペルの論文(Hempel, 1958)を通じてカルナップの知るところとなった。カルナップはこのアイデアを導入することによって、理論や理論名辞の役割を中立主義の立場で明らかにすることができると思った。

ラムジー文のアイデアは、すでに1929年にラムジーが得ていた(Ramsey, 1929)。ある理論のラムジー文とは、その理論の理論名辞すべてを変項で置き換え、そのすべてを存在量化した文のことである。具体的には、次のように定式化できる(Carnap, 1966; 1974, pp. 250f.)。まず、「 t_1 」、「 t_2 」、…、「 t_n 」が理論名辞、「 o_1 」、「 o_2 」、…、「 o_m 」が観察名辞であるとする。理論全体は、理論公準(T)と理論と観察とを結びつける対応規則(C)とからなるため、理論名辞と観察名辞の双方をもつ。この理論全体を単純化して、次の1つの文(TC)で表すことにしよう。

$$(TC) \quad TC(t_1, \dots, t_n; o_1, \dots, o_m)$$

「 u_1 」、「 u_2 」、…、「 u_n 」を変項とすると、この理論のラムジー文 $R(TC)$ は、

$$R(TC) \quad \exists u_1 \exists u_2 \dots \exists u_n TC(u_1, \dots, u_n; o_1, \dots, o_m)$$

となる。

(TC)の代わりにラムジー文 $R(TC)$ を用いることによって、理論名辞の表す対象への存在論的コミットメントが不要になる。このラムジー文が真であるとき、各変項につき、それを真にするような何らかの存在者が存在することになるが、それらは当該の理論的対象である必要はなく、どんな存在者であってもよい。単なる数学的対象であればよい。しかも、この文を用いれば、(TC)を用いていたときとまったく同じ観察上の帰結を導くことができるのである。したがって、この文を用いることによって、理論的対象の存在にコミットすることなく、理論が観察上もたらす重要性はすべて保存することができる(経験的十全性は確保される)。そのため、このラムジー文を使えば、道具主義的な理論観を維持することができる。

他方、上記のラムジー文と次のカルナップ文

$$R(TC) \rightarrow (TC)$$

との連言は、もとの(TC)と論理的に等価になる(Carnap, 1958, p. 246)。したがって、实在論的な理論観をとりたいとするなら、ラムジー文に加えてカルナップ文をも認めればよい。

カルナップは、以上の選択肢（ラムジー文のみをとるか、ラムジー文+カルナップ文をとるか）のうち、どちらをとってもかまわない、と考える。どちらを選ぶかは、単にどちらの言語を選ぶかという、言語上の選択にすぎないという（Carnap, 1966; 1974, p. 256）。つまり、それは存在論上の選択なのではない。ちなみにカルナップ自身は実在論的な言語をとるという（Carnap, 1963, p. 963）。それはラムジー文だけだと語り方が煩雑になるからである（Carnap, 1966; 1974, p. 254）。具体的には、存在例化の手続きが面倒になるからである。このように、言語選択は純粋にプラグマティックな理由から行なわれる。

以上のようなカルナップの考察は、次のようないみにおいて、構造主義をもとにした中立主義になっている。理論が少なくとも経験的に十全であるためには、観察名辞の指示対象の他には、何であれラムジー文を満たす構造をもった存在者たちがあればそれでよい。つまり、理論の役割にとって本質的なことは、経験的に十全であるような構造を特定することである。これは道具主義をとるか実在論をとるかという選択に先立つ、中立的な基盤である。この基盤があったうえで、さらに道具主義をとるのか実在論をとるのかは、どちらの言語のほうを使い勝手がよいかという、言語選択上のプラグマティックな問題にすぎない。

このように、後期カルナップにおいても中立主義の理想は追求されつづけ、なおかつ、その中で構造主義が大きな役割を担っている。しかし、中立主義の実現の仕方とその中で構造主義の果たす役割は、『構築』プロジェクトのころとはだいぶ異なっている。

『構築』では、対象の存在が前提されたうえで、そこへ至るルートを定めるのに世界のもつ構造が用いられた。そのために、5.2節で論じたような問題が生じていた。他方、後期においては、理論的对象の存在は前提されていないし、対象へ至るルートが問題にされてもいないし、世界のもつ構造が扱われてもいない。ラムジー文で特定される構造とは、ただの数学的な構造なのであって、世界の中に「発見」される構造なのではない。観察上の予測や説明を豊かにしてくれさえすれば、何でもよいのである。したがって、後期の中立主義は、暗に実在論を起点としてしまっていない。この中立主義は、存在論的により「薄い」ところから出発して、それを「濃く」していくためにはどういう選択肢があるのか、はっきりさせるようにしている。しかも、最終的な選択が何らかの形而上学的議論によるのではなくて、言語に関するプラグマティックな判断によるものだと見なせるようにしているのである。

このような立場へ辿りつくために、『構築』の後、構文論期・意味論期のカルナップ哲学のうちでいかなる革新が必要であったかを詳細に検討するのは、筆者の今後の課題である。また、後期カルナップの中立主義の可能性を現代的論争のうちで真剣に追及することもまた、筆者にとって残された課題である。

注

- ¹ 混乱を招くようだが、さらには実在するもの (Wirkliches) も実在しないもの (Unwirkliches) も「対象」に含まれる。これはある種のマイノグ的存在論になる。詳しくは 3.4 節参照。
- ² 他に言及される名は、キュルペ (Külpe)、ツィーエン (Ziehen)、ドリーシュ (Driesch)、アヴェナリウス (Avenarius)、そしてポアンカレである。
- ³ もちろん、「構成 (Konstitution)」の概念自体はカント由来の伝統的なものではあるが。この点については 2.1 節で論じる。
- ⁴ この点は、先に述べたような、厳密ないみでの還元可能性と構成可能性の違いと関わるのかもしれない。つまり、還元可能であるというのは、せいぜい古い理論家たちが与えたような仕方に変換が可能だということであり、構成可能であるというのは、それよりもっと強い、規則性を伴った仕方での変換が可能だということなのだろう。
- ⁵ この点は、形式的な道具立てを用いて、より厳密には「外延性テーゼ」として規定される。詳しくは 1.3.1 節参照。
- ⁶ この点については、1.4 節参照。また、その意義については 3.3-3.4 節参照。
- ⁷ 「連関」というごちない語を選んでいるのは、「関係」の語を「Relation」の訳語にとっておきたいからである。次節参照。なお、注 15 も参照。
- ⁸ このような聞き慣れない不気味な訳語を選んだことには訳がある。次の注参照。
- ⁹ そのため、英語圏における「Kennzeichnung」の定訳は「definite description」になっている。これはジョージによる『構築』全訳以来の伝統だろうが、この伝統では先の「Beschreibung」も「description」と訳され、これら 2 語の表すところの違いがきわめてわかりづらくなってしまっている。カルナップ自身、「別の目的のために使ってしまった」ので、ラッセルの「description」に対しては「Beschreibung」ではなく、「Kennzeichnung」の語を選んだ、と述べている (§13) にもかかわらず。また、「Kennzeichnung」は「Kennzeichen」の語 (1.3.2 節参照) と密接につながっているが、前者を「definite description」、後者を「indicator」と訳すジョージ以来の伝統では、これら 2 語のつながりもまた見えなくなってしまう。また、正確に言うと、ラッセルの見知りによる知識と記述による知識は、当然のことながら、直示と標示とまったく同じ特徴づけを与えられているわけではない。この点については 3.4 節参照。
- ¹⁰ ここで言っているのは、確定記述の意味には言説の対象領域が暗に含まれている、という論点ではない。対象領域が暗に含まれるという論点は、文脈に可感な確定記述の説明において現れる論点である。たとえば、「クラスで一番背の高い男子」という確定記述の内容理解においては、どのクラスが問題になっているかが暗に知られていなければならない、というように。この場合、問題になっているのは、この確定記述が実際

に指示対象をもつかどうかの判定に先立って、確定記述の部分表現の意味として理解されていなければならない暗黙の事柄がある、ということだろう。それに対して、カルナップが言っているのは、確定記述の部分表現の内容がすべて理解されたうえで、それらをもとに当該確定記述が指示対象をちょうど1つもつかどうかを判定する場面で、現実を参照しなければならない、ということである。これは、確定記述の部分表現が完全に明示的に内容をもつ場合でも問題になる事柄である。よってそれは、文脈に可感かどうかに関わらず、どんな確定記述にとっても問題になる。

¹¹ 以下の例は、Richardson, 1998, pp. 47f. から借りた。

¹² 「鎖 (Kette)」は冪関係 (関係冪の和クラス) のこと。関係冪 R^2 は関係積 $R | R$ 、関係冪 R^3 は関係積 $R^2 | R$ などのように定義される。ただし、関係 P と Q の関係積 $P | Q$ とは、 aPb と bQc が成り立つとき、 a と c の間に成り立つ関係のことである。

¹³ ただし、ことはそれほど単純ではない。還元と構成をめぐる複雑な事情については 3.3–3.4 節で論じる。

¹⁴ physische Gegenstand。ただし、これは対象種としての広義の「物理的对象」である。カルナップは、「対象圏域」(1.3.1 節参照) のいみでは、狭義の物理的对象としての日常的な物体 (カルナップの言い方では「物理的な物 (physische Ding)」 (§18)) を、電磁場のような物理学的対象 (physikalische Gegenstand) と分けて考えている (§31)。

¹⁵ ここでの「関係」は、カルナップ自身の用語では「Beziehung」である。本論文では、特に多座の命題関数について言う「Beziehung」には「連関」という特殊な訳語を採用し、その外延としての「Relation」にあてた「関係」の語と区別するが、その他の文脈での「Beziehung」にはより自然な「関係」の語をあてる。この点については次節を参照のこと。

¹⁶ ただし、カルナップはオーダー (order) の階層は導入しない。つまり、彼の用いるタイプ理論は単純タイプ理論である。この点については Carnap, 1929, §13 参照。

¹⁷ ただし、「 a 、 b 、 c 、…にもつばら関わる命題関数」とは、「その表現が、 a 、 b 、 c 、…の名前だけを非論理的表現とするような命題関数」のことである (§35)。

¹⁸ しかし、このように整理してみると、これを「命題関数」と呼んでいいのかという問題が生じる。というのも、指示の側での成り立ちからして、ここで「命題関数」と呼ばれる関数の値は命題ではなくて真理値であることになってしまうからである。命題関数の着想はラッセル由来であり、指示と意義の区別はフレーゲ由来であるために、このような混乱が生じているのではないか。おそらく、整合的に理解しようとするならば、文字どおりのいみでの命題と命題関数はそれぞれ、文と述語記号の指示ではなく意義だと考え、これら表現の指示はそれぞれ、真理値と、対象から真理値への関数だと考えるほかない。そもそも、「命題」という語は一貫してルーズに用いられており、その身分が判然としない。以上の論理学的概念の規定は、Carnap, 1929, §2 にもある (が、はっきりしてはいない)。以上の論点と関わる注 19 および注 21 も見よ。『構築』における意義なる概念の用いられ方については、3.4 節も参照されたい。

¹⁹ したがって、これらの用語はフレーゲ由来のものではあるが、フレーゲの行なった区別とはまったく異なる。まず、フレーゲとは異なり、意義は言語理解の相関者でもなければ、(客観的ないみでの) 指示の決定の仕方でもなく (飯田 1987, 第 2 章参照)、客観的に考察する価値をもたないとされている。また、次々パラグラフで述べるように、『構築』の外延性テーゼのもとでは、飽和表現と不飽和表現の違い、それらの指示としての対象と概念の違いが、実質的に無化されてしまっている。『構築』の意義なる概念はきわめてルーズに用いられている。これは基本的には、語の意味というよりは対象によって喚起される知覚的内容と捉えるほうが無難だと思われる。フレーゲの意義概念を真に受け継ぐようにこの語が用いられているとしたならば、このようなひどい扱いは受けたくない。意義概念については 3.4 節で論じる。

²⁰ フレーゲの言う「概念」と「概念の値域」、あるいは関数とその抽象とは別物だということである。

- 21 このぐらいの言い方しかできないのには理由がある。カルナップの文字どおりの説明によると、「命題によって個別の事態が表され、命題関数によって一般的事態が表される」らしい (§47、強調原文)。しかし、これが正確に言ってどのようなことなのかははっきりしない。少なくとも今までの指示・意義の理論に事態なる存在者は登場しないのであり、命題や命題関数が事態を「表す (ausdrücken)」ということがどういうことかを指示・意義の理論の枠内で理解しようとする、さまざまに不都合な点が生じてくる。(ここにはウィトゲンシュタインの影響を見るべきかもしれない。その影響があるとすれば、それはフレーゲ的な枠組みを歪めるさらなる要因として働いているように思われる。) そこで、カルナップが言わんとすることを指示・意義の話を手助けに汲みとるならば、おそらくは次のようなことが考えられていると見なされる。構成的言語は實在論的言語が表現することを、別の仕方ではピックアップする。構成的言語において表現される命題関数はそれを満たす対象どうしを結びつけていた。命題は、ある命題関数を満たすある特定の対象たちを結びつける。このような仕方では命題関数のピックアップする対象どうしの結びつきは、實在論的言語において事態として表されるようなものである。以上のような捉え方は、3.4 節で規定する實在論的言語と構成的言語の相互関係についての一般的描像によっても支持されるだろう。
- 22 実際、カルナップは、唯物論的体系を後に展開する構想もあって、『構築』の準備段階では、認識論的体系を構築するプロジェクトを『認識の論理的構築』(*Der logische Aufbau der Erkenntnis*) ないし『認識の論理』(*Erkenntnislogik*) とし、唯物論的体系構築のほうを『世界の論理的構築』(*Der logische Aufbau der Welt*) ないし『實在の論理』(*Wirklichkeitslogik*) とする、という案ももっていたようである。この点については Coffa, 1991, p. 403 を参照。
- 23 第 4 章で見るグッドマンの体系は質を基底にしている。ちなみにカルナップも、1961 年に書かれた『構築』第 2 版の序文では、「今であれば」要素体験ではなく質を基礎的要素にとると宣言している (Carnap, 1928/1961, p. XIX)。
- 24 ただし、ここにファイヒンガーの強い影響を見る研究もある (Carus, 2007, p. 146)。ファイヒンガーの影響については注 42 参照。
- 25 以下の簡潔な具体例を用いた説明は、『構築』§70 をもとにしてグッドマンが『現象の構造』で与えたもの (Goodman, 1951, pp. 114f.) に従う。また、そのグッドマンの説明をさらに噛み砕いた Cohnitz and Rossberg, 2006, pp. 107ff. も参照している。
- 26 ただし、反射的かつ対称的な関係であることから、省略が含まれる。
- 27 ただし、こうしたクラスが望みの「成分」なり「準成分」なりに対応するという保証はない。2.2.2 節参照。
- 28 カルナップは、構成体系についての表現を K 記号で、心理学的分析言語での表現を P 記号で囲うことによって、この違いを明示化している (§75)。たとえば今の条件は次のように表される。

$$\overset{K}{x} \text{ と } y \text{ の間に類似性回顧 (Ähnlichkeitserinnerung) が成り立つ } \underset{P}{x}$$

$$\iff \overset{P}{x} \text{ と } y \text{ は、} x \text{ の回顧表象を } y \text{ と比較することで部分類似だと認識される要素体験である。}$$
- 29 ただし、ここに現れる時間順序は暫定的な時間順序にすぎない。完全な時間順序は物理的物の構成後、物理的出来事の規則性をもとに捉えられる (§§87, 120)。
- 30 カール・メンガーによって定義された次元数の概念を用いるものと考えられる (Carnap, 1929, §33 参照)。
- 31 ちなみに (W) と (R) の違いは、前節で論じた、構成に関わる表現と心理学的分析の言語における表現の違いに対応する。注 28 で導入した記法を用いれば、(W) は K 記号で、(R) は P 記号で囲われるような表現である。
- 32 文の意味は真理値であり、文の意義はただの心理的内容だったのではないか (1.3.1 節)、というツッコミは もちろん有効である。ここにも『構築』の言語哲学のルーズさが表れている。
- 33 ここで「現象主義 (Phänomenalismus)」と呼ばれているのは、おそらくはカントのような立場のことで

ある。紛らわしいが、それに対して、「主観的観念論 (subjektiver Idealismus)」と呼ばれているのは、現在では現象主義と呼ばれるような立場のことである (Friedman, 2007, p. 138 参照)。

- ³⁴ ただし、このような確実性や正当化のタームによる『構築』の理解は、「広く受け入れられた見方」であるのかもしれないが、実際にはクワイン自身によるものとは異なる。クワインによれば、物理的世界の認識を感覚印象の真理によって正当化する、確実なものにするという認識論の「学説的研究 (doctoral studies)」は、ヒュームの見出した困難によって窮境に陥った(「ヒュームの窮境とは人間の窮境である (The Humean predicament is the human predicament)」(Quine, 1969, p. 72)) のだが、それでも、物理的対象を感覚印象によって概念的に定義し解明するという認識論の「概念的な研究 (conceptual studies)」に関しては、ヒューム以降においても『構築』のような仕事に価値が見出されるという。どういう点に価値があるかと言えば、1 つには、科学にとっての証拠は感覚印象しかないのだから、この種の仕事によって我々が何を証拠としているか(たとえその証拠の確実性は欠けているとしても)ははっきりすること、さらにもう 1 つには、世界についての言説 (discourse) は最終的には感覚印象に意味を求められないのだから、この仕事によってそうした言説が何を内容とするか明らかになることである (pp. 74f.)。したがって、この認識論史観によると、ヒューム以降は認識論において確実性を求めるなどという仕事はなされておらず、別のことに焦点が絞られているのである。そしてそれを実現するものこそが根元的還元主義のプログラムだ、ということになるだろう。
- ³⁵ このうち、フリードマンの 2 論文は『構築』の本格的な研究において露払い的な役割を演じ、新カント派的な読みを提示しつつも、まずは経験主義的解釈を排するというネガティブ・プログラムの色彩が濃いものに対して、リチャードソンの著書は、フリードマンらの研究をもとに、新カント派的な読みをさらに綿密に進めるというポジティブ・プログラムの色彩が濃い。
- ³⁶ ただし、注 34 で述べたとおり、クワイン自身はこのようなテーマを『構築』に見てとっていない。
- ³⁷ ただし、彼自身はこの体系のことを「現象主義的体系」とは呼ばず、単に「認識論的体系」と呼ぶだろう。カルナップ自身の「現象主義」の用法については注 33 参照。
- ³⁸ ただし、事柄はそれほど単純ではない。主観性と客観性をめぐる複雑な事情については 3.4 節参照。
- ³⁹ この点については注 33 参照。
- ⁴⁰ カルナップの啓蒙主義は、その源を家庭環境に遡れるほど根深いものであったという。母方の祖父であるフリードリヒ・ヴィルヘルム・デルプフェルト (Friedrich Wilhelm Dörpfeld) は、ヘルバルト派の著名な啓蒙主義的教育思想家であり、早くして父親を失ったカルナップの家庭においては、母親が受け継いだ彼の教育思想の影響が色濃かったようだ (Carus, 2007, pp. 42–50)。しかし、さらにカルナップが独特であるのは、その一方で、学生時代にドイツ青年運動というロマン主義的な運動にも参加していた点である (Carus, 2007, pp. 50–56)。ウィーン学団の面々にはこの運動の参加者はおらず、アメリカに行けばなおのこと社会的な規範が強かったため、カルナップはこの運動に参加して得た精神を周囲の人々と共有できず、後には孤独感を感じたこともあったとのことである。また彼は、60 年代アメリカにおける学生運動にはドイツ青年運動に等しいものを感じたという (Carus, 2007, pp. 36f.)。
- ⁴¹ リチャードソンであれば、この点を次のように説明するだろう。すなわち、客観的経験しか問題にしないカッシーラーらは、その概念的要素として、経験自体がもつ普遍的な最小形式と、経験に対して理論的に課す規約的形式との 2 種類をはっきり分けずに捉えていた (Richardson, 1998, pp. 129f.)。ところが、カルナップは前者を主観的な感覚経験のもつ構造(経験の「事実基底 (Tatbestand)」)とし、後者を物理的空間のもつ客観的計量形式として、これらを論理的手段によってはっきり区別することができた (pp. 147f.)。これによって、新カント派にとって重要であった構造と客観性との結びつきを断ち切って、新カント派と決定的に決別することになった (p. 160)。しかし、ケイラスであれば、「新カント派」と言ってもマールブルク学派以外にもあるのであって、カルナップはもともとそっちの新カント派ではなかったただだ、と言うだろう。

- 42 ケイラスによれば、1.3.5 節で見た「虚構的構築の言語」とは、ファイヒンガーの「虚構」を用いた立場の「再構築」である (pp. 126, 170)。したがって、それはフリードマンの言うように新カント派の立場の再現だとは言っても、マールブルク学派や西南学派ではなくファイヒンガーの立場の再現であり、また同時に、自身の以前の立場の再現でもある。さらに、要素体験は分節化されていない (1.3.3.1 節) という見解にも、ゲシュタルト心理学のみならず、ファイヒンガーの影響が見られるという (p. 146)。
- 43 しかし、おそらくフリードマン、リチャードソン、ケイラスであれば、これら初期の物理学的体系は端的に物理学の概念を明晰にするための体系であって、その体系を用いて他のあらゆる対象を定義することは特に想定されていない、と考えるであろう。
- 44 以下で用いる図解と例は、Cohnitz and Rossberg, 2006, pp. 116ff. に従う。
- 45 リチャードソンもまた、この点を「形式科学としての認識論」(2.1.2 節参照)の問題点と見なしている (Richardson, 1998, pp. 193f.)。
- 46 ただし、フリードマンは後にこの批判のトーンを抑えている。しかし、その理由はあまり説得的なものではない。彼はシュリックの場合と対比して、次のように論じている (Friedman, 1999, pp. 42f.)。直観的経験と概念的知識をはっきり区別したシュリックは、概念的に分節化されていない所与が客観的な概念的知識の認識論的構築の基礎となりうるのはなぜか、という問題を抱えることになった。しかし、カルナップの場合、自己心理的对象のうちに物理的对象と地続きの概念的構築を成し遂げているのであり、シュリックのような問題をクリアしている。したがって、以前フリードマン自身が指摘したようなこれと同種の問題は、実はそれほど深刻なものではない。しかし、フリードマンが以前指摘した問題とは、シュリックの場合に障壁となり、『構築』のカルナップが乗り越えている問題と同じではない。
- 47 Psillos, 1999, p. xviii; Ladyman, 2002, p. 158; 戸田山 2005, 138–139 頁参照。
- 48 以上の『構築』観のわりと最近の例としては、Misak, 1995, Chap. 2 および Psillos, 1999, Chap. 1 参照。
- 49 以上の『構築』観については、Psillos, 1999, Chap. 1 参照。ただし、独立性テーゼの扱いは微妙である。独立性テーゼのいみするところをきつくとって、それを維持するには理論言明についての実在論的な真理観が必要となる (その真理条件は検証などの我々の活動とは無関係に定まっていると見なさなければならない)、と考えるならば、還元主義的検証主義は独立性テーゼすらとれなくなるだろう (Psillos, 1999, p. 14)。すでに述べたように還元主義的検証主義は意味論的反実在論をとるからである。しかし、科学的実在論が意味論的実在論を前提するかどうかは自明ではない。その前提を否定する議論としては、Wright, 1986 参照。
- 50 カルナップはこの点について次のように語っている。「[意識からの独立性という] 2 番目の実在性の概念は、いかなる認識的構成体系においても構成されえない」 (§176)。フリードマンが指摘するように (Friedman, 1987/1999, p. 110)、ここでの「認識的 (erkenntnismäßig)」は「認識論的 (erkenntnistheoretisch)」ということではなく、「認識可能な」といういみであり、「認識的体系」には唯物論的体系も含まれると考えられる。
- 51 このような点において、カルナップの立場はマイノングに近いと言える。実際、この文脈でマイノングの名を挙げている (§172)。
- 52 2.1.3 節で見たように、新カント派の立場を強く読みこむタイプの解釈は、その後批判されてきている。だが、特にこの、認識論的に確実な基礎への還元の否定 (基礎づけ主義の否定) という点に関しては、いまだに大方の賛同を得ているようである。ただし、Hudson, 1994 は基礎づけ主義的解釈を復権させようとしている。それへのさらなる再批判については Uebel, 1996 参照。また、確実性の概念の拒否という点では新カント派的な読みに同意するものの、認識論的な正当化といういみでの基礎づけ主義を『構築』に見出そうとする試みには、Tsou, 2003 がある。

- 53 ただし、この点には異論もありうる。注 49 参照。
- 54 還元主義においても意味論的実在論は維持される、という考え方は、Dummett, 1976/1993 において示されている。この点について詳しくは長田 2006 を参照。
- 55 以下、『現象の構造』からの引用では「SA」という略記とともにページ番号を記す。
- 56 ただし、『現象の構造』に先立つグッドマンの博士論文『質の研究』(*A Study of Qualities*) (Goodman, 1941) もまた、その 1 つである。また、だいぶ時代が下って、近年、『構築』の再評価が進む中で、Leitgeb, 2009 および Chalmers, 2012 のような『構築』プログラムの新たな継承の試みも現れている。
- 57 この概念については次節で論じる。
- 58 ただし、グッドマン自身が普遍者について懐疑的なのは間違いない。しかし、彼はそのような立場を「唯名論」の名のもとに考えていないということである (Cohnitz and Rossberg, 2006, p. 87)。
- 59 この点は、グッドマン自身、最初の『質の研究』においては個体計算とクラス計算を併用していたことからわかる。
- 60 以上のようなグッドマンの唯名論の特異性については、Cohnitz and Rossberg, 2006, Chap. 4 を参照。
- 61 グッドマンの前著『質の研究』の体系も然り。
- 62 ただし、『構築』はその種の体系を(唯名論的体系と比較して)「選びとっている」わけではない。カルナップは〈部分-全体〉関係と〈要素-クラス〉関係の区別を強調する議論を行なっているが (§§36f.)、それは体系構築にどちらを用いるかという議論ではなく、単にクラスが何であるかを明らかにするための議論である。彼が体系の階層形式はクラスと関係だ、と言うとき、対比されているのはむしろ、内包的存在者としての命題関数であろう。自存的対象の違いを体系に反映させたい彼にとってみれば、そもそも構成によって「階層」が形成されることは構成の必要条件であり、唯名論的体系を「選ぶ」余地などなかったことだろう。
- 63 ただし 3.4 節で論じたように、『構築』の立場を整合的に読み解こうとするなら、これはあくまで対象の形式の階層と見なされるべきである。
- 64 正確には、「クオリアどうしが」というよりは、「クオリアやクオリアの和である個体どうしが」である。この点は本節の少し先で論じる。
- 65 ただし、この用法は本論文で論じているいみでの「実在論」の用法とはかけ離れていて紛らわしいので、なるべく用いないことにする。用いる場合はカッコ付きで表現する。
- 66 以下の例は、Cohnitz and Rossberg, 2006, pp. 133f. による。
- 67 体系の原子的個体とは、「体系的な部分として他の個体をもたない個体」(SA, p. 85) と規定されるだけであり、この規定だけを見るならば、それが原始述語の適用される最小の部分(最小の基礎的単位)であることは特に保証されていない。
- 68 もちろん、これは定義ではなく、原始述語の体系外的な説明にすぎない。
- 69 ちなみに、以下では特に個体計算を仮定せず、集合論を用いる。この点はグッドマン自身の議論においても同じである。
- 70 ただし、正確には同型写像ではなく、ある種の準同型写像である。この点を確認するために、先に用語を導入しておこう。まず、列の構成要素(component)とは、その列が座としてとっている 1 つ 1 つの要素のことである。たとえば、列 $\langle \langle a, b \rangle, c \rangle, \langle d, c \rangle \rangle$ の構成要素は、 $\langle \langle a, b \rangle, c \rangle$ と $\langle d, c \rangle$ である。他方、列の構成要素のうち、それ自体列であるような構成要素について、その構成要素を 1 つ 1 つ分解していった際、そ

れ以上分解されない要素に辿りついた場合、これら要素を当該の列の「究極因子 (ultimate factor)」と呼ぶ。今の例で言えば、 a 、 b 、 c 、 d は先の列の究極因子である。これらの用語を用いて、グッドマンは同型性を次のように規定している (SA, p. 10)。

関係 R が関係 S と同型である

$\iff R$ は S 中の究極因子を整合的に置き換えることによって獲得されうる。

ただし、整合的な置き換えは、次の点のみを要請するものである。

- (1) 空でない究極因子の各々は、1 つの、そしてただ 1 つの空でない要素によって置き換えられねばならない。
- (2) 異なる空でない究極因子は常に、異なる空でない要素によって置き換えられねばならない。
- (3) 空クラスは常に、それ自身によって置き換えられねばならない。

これに従うと、置き換えるほうの要素は究極因子である必要はないから、この置き換えは同型写像というよりは、正確には準同型写像である。

⁷¹ 同様の論点は、プルースト (Proust, 1989) と彼女に従ったモルマン (Mormann, 2003) によって提出されている。プルーストによると、「グッドマンの反論は、本来の直観を通じて、つまり構築なしに、構成がその外延的データから導くものを支配できるという、全知の神の虚構を再実現してしまっている」 (Proust, 1989, p. 299)。モルマンは総合幾何学の手法を『構築』の構成理論の原型と見て、プルーストが批判するようなグッドマンの欠点は、そうした幾何学的背景を無視することによって生じていると診断する (Mormann, 2003, pp. 58f.)。

⁷² たとえば Proust, 1989 のように (注 71 参照)。

⁷³ ガーディナーはこれらのテーゼの他に、次もその一部に数えている (Gardiner, 2000, 140)。

- (4) 真理は根本的に非認識的である (非認識性テーゼ)。

⁷⁴ たとえば、飯田 1992; Hale and Wright, 1997; Gardiner, 2000 など。しかし、テイラーは完全性定理を用いた論証がもっとも重要だと見なしている (Taylor, 2006, p. 58)。

⁷⁵ ただし、以下で検討するものはパトナムのオリジナル版とは少し異なる。先述したとおり、パトナムは可能世界での真理値割りあてをもって真理条件の規定と見なしていた。そのため、パトナムの用いるモデル論的定理は、ここで検討する定理に可能世界における解釈という条件を加えた、より強い定理となっている (Putnam, 1981, pp. 217f.、また、より詳しくは Hale and Wright, 1997, pp. 449ff. 参照)。しかし、テイラーが指摘するように (Taylor, 2006, pp. 55ff.)、真理条件の規定は可能世界に拠らなくてもできるし、パトナムの議論自体がこれら定理の強さの違いに基づく点はほとんどないので、より弱い定理のほうを検討するにとどめた。ちなみにヘイルとライトは同様の定理が 2 階の言語や様相オペレータをもつ言語においても成り立つことを示している (Hale and Wright, 1997, pp. 451f.)。

⁷⁶ 証明。 A の式の構成に関する帰納法による。帰納法の基底。 A が原子式 $F^n(t_1, \dots, t_n)$ であるとき、

$$\begin{aligned} & \models_I F^n(t_1, \dots, t_n)[s] \\ \iff & \langle \bar{s}(t_1), \dots, \bar{s}(t_n) \rangle \in \text{Ref}_I(F^n) \\ \iff & \langle \pi(\bar{s}(t_1)), \dots, \pi(\bar{s}(t_n)) \rangle \in \text{Ref}_{I^*}(F^n) \quad (I^* \text{ の定義より}) \\ \iff & \langle \bar{\pi} \cdot \bar{s}(t_1), \dots, \bar{\pi} \cdot \bar{s}(t_n) \rangle \in \text{Ref}_{I^*}(F^n) \\ \iff & \models_{I^*} F^n(t_1, \dots, t_n)[\pi \cdot s] \end{aligned}$$

帰納的ステップ。 A が $\forall x B(x)$ のとき、 $\models_I B(x)[s] \iff \models_{I^*} B(x)[\pi \cdot s]$ だと仮定すると、

$$\begin{aligned} & \models_I \forall x B(x)[s] \\ \iff & \text{任意の } d \in D_I \text{ について、} \models_I B(x)[s(x|d)] \\ \iff & \text{任意の } d \in D_I \text{ について、} \models_{I^*} B(x)[\pi \cdot (s(x|d))] \quad (\text{帰納法の仮定より}) \\ \iff & \text{任意の } d \in D_I \text{ について、} \models_{I^*} B(x)[(\pi \cdot s)(x|\pi(d))] \end{aligned}$$

\Leftrightarrow 任意の $d^* \in D_{I^*}$ について、 $\models_{I^*} B(x)[(\pi \cdot s)(x|d^*)]$ (π は自己同型写像なので)
 $\Leftrightarrow \models_{I^*} \forall x B(x)[\pi \cdot s]$

A が $\neg B$ であるときや $B \wedge C$ であるときは容易に示される。

⁷⁷ テイラーによれば、他には (1) 領域に制限をかける、(2) 指示関係と領域の双方に制限をかける、(3) 文の真理値割りあてのレベルで制限をかける、などの方法がある (Taylor, 2006, pp. 60f.)。

⁷⁸ レイディーマンの言い方では、意味論テーゼは対応説において「現金化 (cash out)」される (Ladyman, 2002, p. 158)

⁷⁹ ただし、このような推論をカルナップが明示的に行っていたというわけではない。『構築』のアイデアを可能な限り整合的に読みとろうとする限り、そう考えざるをえない、ということである。

⁸⁰ 以下のカルナップの仕事の変遷の説明は、Psillos, 1999; Friedman, 2011 を参照している。

参考文献

- [1] Carnap, R., 1928, *Der logische Aufbau der Welt*, Weltkreis-Verlag (2nd Ed., Meiner, 1961) (Translated by R. George as *The Logical Structure of the World*, University of California Press, 1967).
- [2] Carnap, R., 1929, *Abriß der Logistik*, Springer.
- [3] Carnap, R., 1936–37, “Testability and Meaning,” in *Philosophy of Science*, 3, pp. 419–471 and 4, pp. 1–40.
- [4] Carnap, R., 1958, “Beobachtungssprache und Theoretische Sprache,” in *Dialectica*, 12, pp. 236–248.
- [5] Carnap, R., 1963, “Replies and Systematic Expositions,” in P.A. Schilpp (Ed.), *The Philosophy of Rudolf Carnap*, Open Court, pp. 859–1013.
- [6] Carnap, R., 1966, *Philosophical Foundations of Physics: An Introduction to the Philosophy of Science*, Basic Books.
- [7] Carnap, R., 1974, *An Introduction to the Philosophy of Science*, Basic Books.
- [8] Carus, A.W., 2007, *Carnap and Twentieth-Century Thought: Explication as Enlightenment*, Cambridge University Press.
- [9] Chalmers, D., 2012, *Constructing the World*, Oxford University Press.
- [10] Coffa, J.A., 1991, *The Semantic Tradition from Kant to Carnap: To the Vienna Station*, Cambridge University Press.
- [11] Cohnitz, D., and Rossberg, M., 2006, *Nelson Goodman*, McGill-Queen’s University Press.
- [12] Dummett, M., 1976, “What Is a Theory of Meaning? (II),” in G. Evans and J. McDowell (Eds.), *Truth and Meaning: Essays in Semantics*, Clarendon Press, pp. 67–137 (Reprinted in *His Seas of Language*, Oxford University Press, 1993, pp. 34–93).
- [13] Friedman, M., 1987, “Carnap’s *Aufbau* Reconsidered,” in *Noûs*, 21, pp. 521–545 (Reprinted in Friedman 1999, pp. 89–113).

- [14] Friedman, M., 1992, "Epistemology in the *Aufbau*," in *Synthese*, 93, pp. 15–57 (Reprinted in Friedman, 1999, pp. 114–162).
- [15] Friedman, M., 1999, *Reconsidering Logical Positivism*, Cambridge University Press.
- [16] Friedman, M., 2007, "The *Aufbau* and the Rejection of Metaphysics," in Friedman and Creath (Eds.), *The Cambridge Companion to Carnap*, Cambridge University Press, pp. 129–152.
- [17] Friedman, M., 2011, "Carnap on Theoretical Terms: Structuralism without Metaphysics," in *Synthese*, 180, pp. 249–263.
- [18] Gardiner, M.Q., 2000, *Semantic Challenges to Realism: Dummett and Putnam*, University of Toronto Press.
- [19] Goodman, N., 1940, *A Study of Qualities*, Harvard University Press.
- [20] Goodman, N., 1947, "The Problem of Counterfactual Conditionals," in *Journal of Philosophy*, xliv, pp. 113–128 (Reprinted in His *Fact, Fiction and Forecast*, Harvard University Press, 1979, pp. 3–27).
- [21] Goodman, N., 1951 [SA], *The Structure of Appearance*, Harvard University Press.
- [22] Goodman, N., 1978, *Ways of Worldmaking*, Hackett.
- [23] Hale, B., and Wright, C., 1997, "Putnam's Model-Theoretic Argument against Metaphysical Realism," in B. Hale and C. Wright (Eds.), *A Companion to the Philosophy of Language*, Blackwell, pp. 427–457.
- [24] Hempel, C.G., 1958, "The Theoretician's Dilemma: A Study in the Logic of Theory Construction," in H. Feigl, M. Scriven, and G. Maxwell (Eds.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science, Vol. II: Concepts, Theories and the Mind-Body Problem*, The University of Minnesota Press, pp. 37–98.
- [25] Hudson, R.G., 1994, "Empirical Constraints in the *Aufbau*," in *History of Philosophy Quarterly*, 11, pp. 237–251.
- [26] 飯田隆、1987年『言語哲学大全 I』勁草書房。
- [27] 飯田隆、1992年「解説 パトナムと分析哲学の現在」、ヒラリー・パトナム『实在論と理性』飯田隆、金田千秋、佐藤芳、関口浩喜、山下弘一郎訳、勁草書房、349–383頁所収。
- [28] Ladyman, J., 2002, *Understanding Philosophy of Science*, Routledge.
- [29] Leitgeb, H., 2009, "New Life for Carnap's *Aufbau*?" in *Synthese*, 180, pp. 265–299.
- [30] Lewis, D., 1984, "Putnam's Paradox," in *Australasian Journal of Philosophy*, 62, pp. 221–236 (Reprinted in His *Papers in Metaphysics and Epistemology*, Cam-

- bridge University Press, 1999, pp. 56–77).
- [31] Misak, C.J., 1995, *Verificationism: Its History and Prospects*, Routledge.
- [32] Mormann, T., 2003, “Synthetic Geometry and *Aufbau*,” in T. Bonk (Ed.), *Language, Truth and Knowledge: Contribution to the Philosophy of Rudolf Carnap*, Kluwer Academic Publishers, pp. 45–64.
- [33] 長田怜、2006年「二つの知識概念——実在論と反実在論」、『東京大学人文社会系研究科哲学研究室 論集』第25号、163–173頁所収。
- [34] Pincock, C., 2005, “A Reserved Reading of Carnap’s *Aufbau*,” in *Pacific Philosophical Quarterly*, 86, pp. 518–543.
- [35] Proust, J., 1989, *Questions of Form: Logic and the Analytic Proposition from Kant to Carnap*, The University of Minnesota Press (Translator, A. A. Brenner, Translation of *Questions de Form: Logique et Proposition Analytique de Kant à Carnap*, Fayard, 1986).
- [36] Psillos, S., 1999, *Scientific Realism: How Science Tracks Truth*, Routledge.
- [37] Putnam, H., 1981, *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press.
- [38] Putnam, H., 1983, “Models and Reality,” in His *Realism and Reason: Philosophical Papers Vol. 3*, Cambridge University Press, pp. 1–25.
- [39] Quine, W.V.O., 1953, “Two Dogmas of Empiricism,” in *The Philosophical Review*, 60, pp. 20–43 (Reprinted in His *Two Dogmas of Empiricism*, 1961, Harvard University Press, pp. 20–46).
- [40] Quine, W.V.O., 1969, *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia University Press.
- [41] Ramsey, F., 1929, “Theories,” in R.B. Braithwaite (ed.), *The Foundations of Mathematics and Other Logical Essays*, Routledge, pp. 212–236.
- [42] Richardson, A., 1998, *Carnap’s Construction of the World*, Cambridge University Press.
- [43] Russell, B., 1914, *Our Knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy*, Allen & Unwin.
- [44] Russell, B., 1917, “Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description,” in His *Mysticism and Logic and Other Essays*, Allen & Unwin.
- [45] Taylor, B., 2006, *Models, Truth, and Realism*, Oxford University Press.
- [46] 戸田山和久、2007年『科学哲学の冒険——サイエンスの目的と方法をさぐる』NHK出版。
- [47] Tsou, J.Y., 2003, “The Justification of Concepts in Carnap’s *Aufbau*,” in *Philosophy of Science*, 70, pp. 671–689.

-
- [48] Uebel, T., 1996, “Conventions in the *Aufbau*,” in *British Journal for the History of Philosophy*, 4, pp. 381–397.
- [49] Whitehead, A.N., and Russell, B., 1910–1913, *Principia Mathematica*, 3 Vols., Cambridge University Press.
- [50] Wright, C., 1986, “Scientific Realism, Observation, and the Verification Principle,” in G. Macdonald and C. Wright, 1986, *Fact, Science, and Morality*, Blackwell, pp. 247–274.